日本タンゴ・アカデミー機関誌

TANGUEANDO EN JAPON

No. 37
2016

タンゲアンド・エン・ハポン

ÓRGANO OFICIAL DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN

TANGUEANDO EN JAPÓN

Número 37, enero de 2016

日本タンゴ・アカデミー　機関誌

タンゲアンド・エン・ハポン

第37号（2016年1月）

Agustín Magaldi

日本タンゴ・アカデミー

（http://tangoacademy.jp/）

●日本タンゴ・アカデミー　機関誌
ÓRGANO OFICIAL DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN

TANGUEANDO EN JAPÓN　第37号（2016年1月）

（タンゲアンド・エン・ハポン）

目　次

		頁
2016年期 日本タンゴ・アカデミー役員及び実行委員		3
日本タンゴ・アカデミー 2015年下期活動実績	編集部	4
第92回 タンゴ・セミナー・レポート	海江田禎二	7
第83回 東京リンコン・レポート	福川靖彦・笠井正史	9
第84回 東京リンコン・レポート	福川靖彦・笠井正史	11
第85回 東京リンコン・レポート	福川靖彦・笠井正史	13
第16回 中部リンコン・レポート	吉岡達郎	15
第17回 中部リンコン・レポート	吉岡達郎	19
第26回 関西リンコン・レポート	鈴木忠夫	24
第５回 ミロンガパーティー報告	鈴木啓子・池永博威	26
第１回 東北リンコン・レポート	池永博威	29
横浜ポルテニヤ音楽同好会創立30周年記念	佐藤光男	33
第２回 港横浜タンゴ・フェスティバルを聴いて	丸岡将泰	35
第14回 金沢蓄音器館タンゴ・コンサート	笠井正史	39
真鶴タンゴ・ライブコンサート	中村尚文	41
第３回 アルゼンチンタンゴ早慶戦	笠井正史	42
＜愛好家インタビュー＞ —門奈紀生・麻場利華さん—	聞き手・宮本政樹	44
追悼 アルベルト・ポデスター	高場将美	59
シリーズ・資料再見（６）タンゴに就いて	野口久光	61
＜アーティストの足跡（３）＞リベルター・ラマルケ	弓田綾子	64
現代タンゴ群像（1955 ～ 1990）第８回　リト・エスカルソ	西村秀人	67
アグスティン・マガルディ	齋藤冨士郎	71
こんなタンゴを聴いています	七カ所博幸	79
全国リレー随想（17）	佐々木秋雄	81
カルロス・ガルデル（６）歌詞翻訳	大澤寛	87
2015年下期首都圏タンゴ・コンサート情報	脇田冨水彦	92
編集後記	編集部	96

＜２０１６年期　日本タンゴ・アカデミー役員及び実行委員＞

会　　長	飯塚　久夫	
副 会 長	高場　将美	（セミナー担当）
	＊大澤　寛	（編集長、企画委員）
理　　事	杉山　滋一	（会計担当）
	福川　靖彦	（東京リンコン担当、行事担当、企画委員）
	弓田　綾子	（事務局・会員サービス担当、企画委員、編集委員）
	西村　秀人	（行事担当、地域支援担当〈中部〉）
	宮本　政樹	（企画委員長、行事企画、編集委員）
	＊脇田　冨水彦	（会員管理・連絡担当）
	＊笠井　正史	（副編集長）
	＊池永　博威	（副編集長）
	＊中村　尚文	（行事担当、企画委員）
監　　事	山本　幸洋	（ホームページ担当、若手振興担当）
実行委員	鈴木　一哉	（若手振興担当）
	吉田　義之	（行事担当）
	山本　雅生	（地域担当〈関西〉）
	吉澤　義郎	（記録担当）
	吉岡　達郎	（地域担当〈中部〉）
	＊鈴木　啓子	（副編集長）
	＊佐藤　勝夫	（地域担当〈東北〉）

＊＝新任

名誉会長　　島﨑　長次郎

高場将美

西村秀人

福川靖彦

山本雅生

佐藤勝夫

鈴木啓子

山本幸洋

池永博威

2016年期　日本タンゴ・アカデミー　役員

前列左から　杉山滋一、大澤寛、飯塚久夫、島﨑長次郎、宮本政樹、弓田綾子
後列左から　吉澤義郎、鈴木一哉、笠井正史、吉岡達郎、吉田義之、脇田冨水彦、中村尚文

日本タンゴ・アカデミー　2015年下期活動実績

● 第５回ＮＴＡミロンガパーティー

８月２日（日）第５回ＮＴＡミロンガを昨年と同じ千代田区一番町カスケードホールで開催した。この日はダンスの人115名、聴くだけの人47名、合計162名が参加した。

演奏はチコス・デ・パンパ四重奏団。ダンス・デモはJOE ＆ TAKAMI。ＣＤの選曲は、海部、三浦、黒木、佐藤進の４名の会員が担当した。

● タンゴ・セミナー（CLASE DE TANGO）

◎ 第92回セミナー：９月19日（土）信濃町の東医健保会館において開催された。コメンテーターは海江田禎二氏で、「タンゴの楽しみ方　一私案」というタイトルで、タンゴの楽しみ方は十人十色という話を展開された。

◎ 第93回セミナー：12月13日前回同様信濃町の東医健保会館において開催された。第１部は「今年心に響いたタンゴ」と題してコメンテーターの清水裕氏と森正樹氏が夫々５曲を紹介、第２部は名誉会長の島﨑長次郎氏で「ラ・クンパルシータの名迷盤を訪ねて」というタイトルで、副題として「落穂ひろい－以前のセミナーで取り上げられなかったＳＰ」として、これまで聴く機会が殆どなかったラ・クンパルシータも紹介された。

● 東京リンコン・デ・タンゴ

◎ 第83回リンコン：７月21日（火）、恒例の納涼リンコンで昨年と同じ御茶ノ水の山の上ホテルで開催され第１部と第３部はＮＴＡ名誉会長の島﨑長次郎氏が「日本のタンゴの流れを追って」というタイトルで、昭和初期の日本にタンゴが初めて紹介されたところから話が始められ、戦争のさなかの受難期を経て、戦後まで、懐かしい15曲が紹介された。
第２部は慶應義塾ＫＢＲタンゴアンサンブルによる演奏。
参加者はNTA会員50名、非会員32名、の合計82名であった。

◎ 第84回リンコン：９月８日（火）「原宿クリスティー」で開催され、第１部は杉山滋一氏による「リンコン・タンゴの歴史1930年代」と題して1930年から1939年までの13曲が紹介された。第２部は会員による「私の好きなあの歌この歌」と題して５名の会員が各２曲、合計10曲が紹介された。
参加者はＮＴＡ会員35名、非会員３名の総勢38名であった。

◎ 第85回リンコン：11月17日（火）「原宿クリスティー」で開催され、第１部は「法要とタンゴ」という変わったタイトルで、仏門に明るいコメンテーターの中村尚文氏が10曲を選曲し、それぞれの演奏家や作曲者、作詞者の命日に話が及ぶという滅多にない曲目紹介が行われた。第２部はＮＴＡ会員の若手バンドネオン奏者池田達則氏のバンドネオン・ソロで６曲が披露された。
出席者はNTA会員36名、非会員２名、ゲスト１名の総勢39名であった。

● 関西リンコン・デ・タンゴ

第26回関西リンコン・デ・タンゴは11月８日（日）、神戸市三宮「サロン・ド・あいり」において開催された。プログラムは第１部「映像で見るタンゴ」でコメンテーターの上田登氏が病欠のため映像のみの鑑賞となった。第２部は関西で活躍している四重奏団「ＳＩＮＣＯＰＡ」がコントラバス欠員のため三重奏で11曲演奏された。第３部は東京から出向いた笠井正史氏による「コントラバスを聴く」というタイトルでコントラバスに焦点を当てた８曲が紹介された。出席者はＮＴＡ会員10名、非会員12名の合計22名であった。

● 中部リンコン・デ・タンゴ（第16回）

第16回中部リンコン・デ・タンゴは６月28日（日）三重県伊勢市の「伊勢河崎商人館角吾座」で開催された。参加者は遠隔地からの来訪者も含め55名と予想を大幅に上回る盛況であった。第１部はいつも通り地元会員による３曲選、第２部は地元コレクターによるＳＰコンサート、第３部はバイオリンとピアノの生演奏、第４部はＮＴＡ宮本政樹理事による「オーディオで聴くタンゴ」で８曲が披露された。

● 中部リンコン・デ・タンゴ（第17回）

第17回中部リンコン・デ・タンゴは10月10日（土）名古屋市栄町の大黒屋本店「巖本真理メモリアル・ホール」で開催された。プログラムの第１部「地元会員による３曲選」は現役のコントラバス奏者鈴木克比古氏による６曲、第２部は西村秀人氏によるＳＰと映像のコラボという初めての試みが展開された。続く第３部もＮＴＡ会長飯塚久夫氏による映像の提供で構成されたプログラムを満喫した。第４部はＮＴＡ名誉会長島崎長次郎氏のＳＰレココンで1927年から30年に録音された９曲が紹介された。

● 東北リンコン・デ・タンゴ（第１回）

東北地方で初めてのリンコン“2015東北リンコン・デ・タンゴ秋田”は、秋田中南米音楽同好会との共催で11月10日に秋田市大町の秋田市民俗芸能伝承館の４階練習室で開催された。プログラムは、飯塚久夫会長による映像と音を交えた「タンゴ黄金時代を巡って」、島崎名誉会長によるSPレコードを用いた「いま蘇るタンゴの名盤～針音を超えて」、当日参加した10人のNTA会員による２曲選であった。出席者はNTA会員12名、秋田中南米音楽同好会会員7名、その他25名の合計44名であった。

● 機関誌「タンゲアンド・エン・ハポン」36号、７月に発行。
● 機関誌「タンゴランディア」31号、10月に発行。

● 役員会・編集会議

＊　７月14日（火）

１.「タンゲアンド・エン・ハポン」の発行について

２.「タンゴランディア」発行に関する進捗状況について

３．東京、中部、関西リンコンの開催とコメンテーター派遣について

４．次回タンゴ・セミナーの開催について
５．東北リンコン立ち上げに関する具体的な企画案について
６．来年度「ラ・クンパルシータ全集」のＣＤ発売について
７．ＮＴＡ会員を増やすための方策について

＊　８月19日（水）
１．経費予算進捗状況について
２．「タンゴランディア」発行について
３．第３回ＮＴＡミロンガの結果報告
４．タンゴ早慶戦へのＮＴＡの関わりについて

＊　10月６日（火）
１．経費予算進捗状況について
２．東北リンコンへの取組について
３．タンゴ早慶戦後援について

＊　11月20日（金）
１．経費予算進捗状況について
２．「タンゲアンド・エン・ハポン」の原稿について
３．ＮＴＡ会員の出演するライブ・コンサート情報について
４．来年度全国会員の集いについて
　ゲスト出演者の選定について
５．東京・中部・関西・東北リンコンの実施状況について
６．企画委員会の設置について
　ＮＴＡ年間行事の企画実施のため、次の６名の企画委員を任命する：
　宮本政樹（企画委員長）、飯塚久夫、大澤寛、福川靖彦、中村尚文、弓田綾子
７．ホームページの復元について
　現在事実上中断状態にあるホームページの早期復元を図る（責任者：山本幸洋）

＊　12月13日（日）
新年度体制に関わる役員人事案について
飯塚会長より理事・実行委員・監事も関わる人事案提示（公表は2016年３月６日の全国会員の集いにおいて行う）

＊　12月26日（土）予定の「タンゲアンド・エン・ハポン」第37号の編集作業最終段階と来年度以降の機関誌発行の基本方針について討議

＊　2015年末の会員数181名
入会者：３名
　金子祐一（さいたま市）、後藤武（さいたま市）、長利（おさり）浩三（弘前市）
退会者：９名
　大久保江梨、大貫孝三（逝去・元理事）、勝俣秀夫、河村雅都、小松勝、新美豊、
　三浦幸三、安井敬晴、米山宏

タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

Clase de Tango

第92回タンゴ・セミナー　　2015年9月19日

タンゴの楽しみ方　一私案

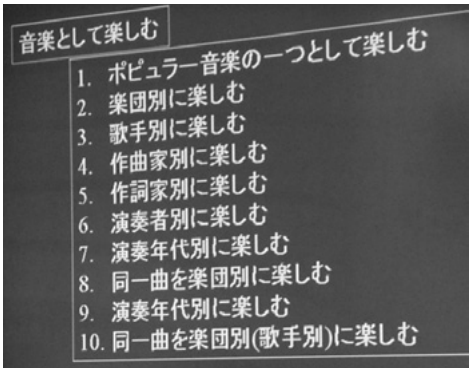
コメンテーター：**海江田 禎二**

内容は海江田氏ご自身が構築されたタンゴ・データベースとタンゴ・アーカイブについて、その構成と利用法を中心主題として、さらにそれを利用するとこのような楽しみ方が出来るという実例を「Barrio Pobre（貧しい街）」（曲：Vicente Belvedere　詞：Francisco García Jiménez）の12種の演奏例に基づいた説明でありました。

パワーポイントを多用したプレゼンテーションは極めて興味深くかつ理解しやすいものでした。更に、海江田氏はこのようなタンゴ・データベースとタンゴ・アーカイブを広く会員が共有することと、その手段についても熱心に提案されました。これらに関しては、今後、役員会での検討課題として、実現の方法を探って行くことになります。

以下に当日の内容を知るための一助とすべく、使用されたパワーポイント画像の一部を掲載します。

海江田禎二さん



画像「音楽として楽しむ」

聴き方の実例として「Barrio pobre」の録音年の古いものから順に18曲について（録音年）（レコード会社名）（演奏楽団・歌手）（コメント）の順に紹介され、その中の12曲を当日聴かせて貰いました。（なお*印は未復刻盤であり当日は聴けなかったものです）

1．1927　ELECTRA Francisco Pracánico インスト　この曲の最初の録音である

2.* 1930 ～ 31頃　COLUMBIA Virginia Vera のギター伴奏で歌ありなのだが未復刻

3．1945　ODEÓN Alberto Castillo con orq.　15年ほどの空白の後のリバイバル
歌詞の後半が歌われていない

4．1947　ODEÓN　歌 Carmen Duval　男歌であるこの曲をC.Duvalが情感を籠めて歌う

5．1957　EMI　歌 Jorge Vidal　この曲は発表当初はギター伴奏が主体だったのだろうか
歌は歌詞通りに進み、J.Vidal の声が素晴らしい

6．1957　COLUMBIA　歌 Julio Sosa　楽団 Armando Pontier
円熟したSosa の歌　一部にrecitadoが入る

7．1958　ODEÓN　歌 Roberto Goyeneche　楽団 Aníbal Troilo
若い日のGoyenechеの熱唱とTroilo の美しい伴奏　秀曲名演

8.* 1959　SONOLUX　歌 Óscar Larroca　これも未復刻と思われる

9.* 1959 ～ 63頃　レコード会社不明　歌 Félix Romero　楽団 Donato Racciatti
未復刻だがYouTube で聴ける

10．1966　CBS Columbia　歌 Roberto Yanés　楽団 Osvaldo Fresedo
長い器楽演奏がありYanés の力の籠った伸びのある唄が聴ける

11.* 1969　ODEÓN　歌 Miguel Montero　楽団 Óscar Castagnaro　これも未復刻

12.* 1970　PHILIPS　歌 Edmundo Rivero　楽団 Mario Demarco　これも未復刻

13．1976　EMBASSY　歌 Nelly Omar　伴奏 José Canet のギター・コンフント
原詞どおりに曲が進行する

14．1996　M&Z　歌 María Volonté　トリオ伴奏のバンドネオンが歌を邪魔せずに淡々とオブリガートで伴奏に徹している　曲の進行は原詞どおり　秀曲佳演

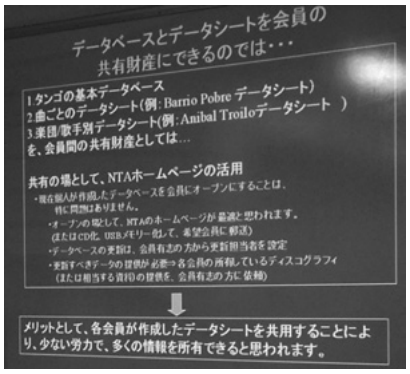
15．1997　FONOMIC Los Románticos del Tango楽団　この曲には珍しい器楽曲
思わず歌詞を口ずさみたくなるような好演

16．1998　DBN　歌 Luis Cardei　伴奏 Trío Argentino Galván　原詞どおりの進行
Cardeiの声にぴったり

17．2007　MEGADISC　歌 José Ángel Trelles　ギター伴奏　原詞どおりの進行

18.* 2006 ～ 8頃　EPSA　歌 Noelía Moncada　未所有

“「Barrio pobre」は年代が新しくなるほどに好編曲・好演が多くなり、とりわけLos Románticos del Tango楽団のメロディを各楽器でつなぐしみじみとした情景表現（多少メロドラマ的？）に強く心を打たれる”という海江田さんの感想が述べられました。



データベースとデータシートを会員の共有資産に出来るのでは…

熱心に聞き入る参加者

『東京リンコン・デ・タンゴ』

レポート：福川 靖彦・笠井 正史

第83回　2015年7月21日14:00～16:30　山の上ホテル「銀河の間」

第83回の今回は、恒例の納涼リンコンで、島﨑長次郎名誉会長による「日本のタンゴの流れを追って」と題するセミナーと、ＫＢＲタンゴアンサンブルによる生演奏の二本立てで行われました。参加者はタンゴ・アカデミー会員50名、非会員32名の総勢82名でした。

第１部「日本のタンゴの流れを追って」

コメンテーター：島﨑長次郎名誉会長

第１部は昭和初期、日本にタンゴが紹介された時代、まだアルゼンチンと交流がなく、欧米の原盤によるタンゴの楽曲が紹介されたところから話が始められ、やがて日中戦争に始まる苦難の時代のさなか日本人による曲も吹き込まれるようになったが、その後本格的な洋楽の禁止の時代を経て終戦に至ったところまでが語られた。

（1）「マードレ」（お母さん）　演奏：シャッハマイステル楽団
（2）「オールドメイド」（老嬢）　演奏：ビクター・タンゴ・オーケストラ
（その実はオルケスタ・ティピカ・ビクトル）
（3）「麗人の唄」（サトウ・ハチロー作詞、堀内敬三作曲）
歌：河原喜久恵
（4）「君恋し～波浮の港」　演奏：巴里ムーラン・ルージュ楽員
（5）「ラ・クンパルシータ」　演奏：巴里ムーラン・ルージュ楽員
（6）「Ｓ．Ｏ．Ｓ．」（エンリケ・サントス・ディセポロ作曲）
演奏：オルケスタ・ティピカ・ロサ
（7）「山は夕焼け」（桜井潔編曲）　演奏：サクライ・イ・ス・オルケスタ

第２部　慶應義塾ＫＢＲタンゴアンサンブルによる生演奏

タンゴ早慶戦等でお馴染みになった慶應義塾ＫＢＲタンゴアンサンブル卒業生メンバーにゲスト演奏家を加えた六重奏団で下記の曲が披露された：

（1）たそがれのオルガニート“ORGANITO DE LA TARDE”

（2）永遠に別れを（歌：柏原誠）“HASTA SIEMPRE AMOR”
（3）バンドネオンの嘆き“QUEJAS DE BANDONEÓN”
（4）ノスタルヒアス（歌：柏原誠）“NOSTALGIAS”
（5）繰り返し“REPETIDO”
（6）交わす盃（歌：柏原誠）“TOMO Y OBLIGO”
（7）ラ・クンパルシータ“LA CUMPARSITA”

ここで「オートラ！」の声に応えて柏原誠が再び登場、「最後の盃（ラ・ウルティマ・コーパ）」が演奏され第２部の幕を閉じた。

KBRタンゴアンサンブル

歌う柏原誠さん

第３部「日本のタンゴの流れを追って」戦後編

コメンテーター：島﨑長次郎名誉会長

会場風景

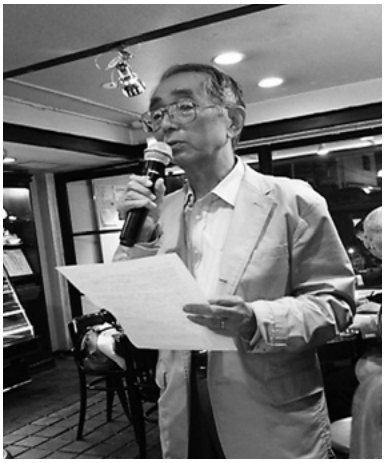
第３部は再び島﨑長次郎名誉会長による第１部の続きとなる戦後編としてオルケスタ・ティピカ東京の終幕までが紹介された。

（1）「待ち侘びて」（服部良一作曲、実は戦後大ヒットとなった「夜のプラットホーム」の原題）
演奏：ビック・マックスウェル楽団

（2）「マロニエの木陰」　歌：松島詩子
（3）「ラ・クンパルシータ」　演奏：原孝太郎と東京六重奏団
（4）「夕映え」　演奏：北村維章とシンフォニック・タンゴ・オーケストラ
（5）「黒いパイプ」　演奏：吉野章とその楽団
（6）「フェリシア」　演奏：坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ポルテニヤ
（7）「ラ・クンパルシータ」　演奏：早川真平とオルケスタ・ティピカ東京
（8）「ラ・クンパルシータ」　演奏：日本オールスター・タンゴ・オーケストラ（早川真平指揮、総勢26名による演奏）

第84回　2015年9月8日（火）　原宿「クリスティー」

第84回の今回は、２部構成のプログラムで、第１部は杉山滋一さんによる第２回「リンコン・タンゴの歴史」、第２部は５名の会員による「私の好きなあの歌この歌２曲選」でレココンを楽しみました。参加者はタンゴ・アカデミー会員35名、非会員３名、合計38名でした。



第１部「リンコン・タンゴの歴史１９３０年代」

コメンテーター：杉山滋一

（１）“ジーラ・ジーラ” YIRA...YIRA...
歌：カルロス・ガルデル（G：1930）

（２）“君を愛す” TE QUIERO（G：1932）
演奏：フランシスコ・カナロ楽団、歌：アダ・ファルコン

（３）“サン・テルモ” SAN TELMO
演奏：フランシスコ・ロムート楽団、歌：チャルロ（G:1932）

（４）“ミロンガ・センチメンタル” MILONGA SENTIMENTAL
歌：メルセデス・シモーネ（G：1932）

（５）“さようならも言わずに” SE FUE SIN DECIR ADIÓS
歌：リベルター・ラマルケ（G：1932）

（６）“エル・アコモード” EL ACOMODO
演奏：エドガルド・ドナート楽団（G：1933）

（７）“悲しみの足跡の中で” EN LA HUELLA DEL DOLOR
演奏：オスバルド・フレセド楽団、歌：ロベルト・ライ（G：1934）

（８）“私のギター” GUITARRA MÍA
歌：カルロス・ガルデル（G：1935.03.20）

（９）“ビクトリア・ホテル” HOTEL VICTORIA
演奏：フアン・ダリエンソ楽団（G：1935.07.02）

（10）“泣き虫” EL LLORÓN
演奏：ロベルト・フィルポ四重奏団（G：1935.12.19）

（11）“デレーチョ・ビエホ” DERECHO VIEJO
演奏：ドン・パンチョ五重奏団（G：1938.03.15）

（12）“緑のインク” TINTA VERDE
演奏：アニバル・トロイロ楽団（G：1938）

（13）“引退した人” EL RETIRAO
演奏：カルロス・ディ・サルリ楽団（G：1939）

以上の13曲をそれぞれの時代背景を交えて作詞者、作曲者、演奏家について詳しく解説されました。次回は1940年代が紹介される予定です。

第２部「私の好きなあの歌この歌」

第２部は５名の会員による「私の好きなあの歌この歌」というタイトルで、一人２曲、全部で10曲が紹介されました。

コメンテーター：福川靖彦

（1）“スール”SUR
歌：フリオ・ソーサ、演奏：ルイス・カルーソ楽団

（2）“我が悲しみの夜”MI NOCHE TRISTE
歌：フリオ・ソーサ、演奏：レオポルド・フェデリコ楽団

コメンテーター：宇都宮右太郎

（3）“ロココ”ROCOCÓ
歌：エルネスト・エレーラ、演奏：エクトル・バレラ楽団

（4）“愛したが故に”POR QUÉ LA QUISE TANTO
歌：マリオ・ポマール、演奏：ロス・セニョーレス・デル・タンゴ

コメンテーター：池永博威

（5）“ラ・ドンナ・デル・ブオノ・ア・ヌルラ”
LA DONNA DEL BUONO A NÚLLA
歌：ミルバ、
演奏：オルケスタ・ディレッタ・デ・イリェール・パタチーニ

（6）“君待つ間”FUMANDO ESPERO
歌：ロサウラ・シルベストレ、演奏：トリオ・ティピコ

コメンテーター：笠井正史

（7）“ビクトリア・ホテル”
HOTEL VICTORIA
歌：ティタ・メレロ、演奏：カルロス・フィガリ楽団

（8）“おい、金持ち女！”¡CHE BACANA!
歌：ティタ・メレロ（伴奏者不明）

コメンテーター：宮本政樹

（9）“どんなことでも”CUALQUIER COSA
歌：エンソ・バレンティーノ、演奏：ドミンゴ・フェデリコ楽団

（10）“道化師の魂”ALMA DE PAYASO
歌：ロベルト・マイダ、演奏：アルベルト・カステジャーノス楽団

第85回　2015年11月17日（火）　原宿「クリスティー」

第85回の今回は、２部構成のプログラムで、レココンと生演奏を鑑賞しました。参加者はタンゴ・アカデミー会員36名、非会員２名、ゲスト１名の総勢39名でした。

第１部「法要とタンゴ」

コメンテーター：中村尚文

（1）“わが悲しみの夜” MI NOCHE TRISTE
演奏：カジェタノ・プグリシ楽団

（2）“迷える魂” ALMA EN PENA
演奏：フランシスコ・カナロ楽団

（3）“ハシント・チクラーナ” JACINTO CHICLANA
歌：ネリー・オマール　伴奏：ホセ・カネー

（4）昭和30年代の名曲名唱三選

Ⅰ．“感傷の不良少年” PATOTERO SENTIMENTAL
歌：ロベルト・ルフィノ　伴奏：カルロス・ディ・サルリ

Ⅱ．“クリオージョの決闘” DUELO CRIOLLO
歌：アルベルト・マリノ　伴奏：エクトル・マリア・アルトーラ

Ⅲ．“別れ” EL ADIÓS
歌：アンヘル・バルガス　伴奏：アルマンド・ラカーバ

（5）“パリにつながれて” ANCLAO EN PARÍS
歌：カルロス・ガルデル

（6）“喫茶店の片隅で” EN UN RINCÓN DEL CAFÉ
演奏：フアン・マグリオ・パチョ楽団

（7）“海の底” MAR DE FONDO
演奏：フランシスコ・ロムート楽団

（8）“ブエノス・アイレスの影法師” SILUETA PORTEÑA
オスバルド・プグリエーセ楽団

（9）“マレーナ” MALENA
歌：フランシスコ・フィオレンティーノ　伴奏：アニバル・トロイロ楽団

（10）“友に捧ぐ” A LOS AMIGOS
演奏：フランチーニ・ポンティエール楽団

タイトルの「法要とタンゴ」は仏門の世界に精通している中村尚文さんならではの話題提供で、登場する演奏家・歌手と楽曲の作詞・作曲者の命日もしくは他界の年を夫々振返り乍ら話を進めて行くという、他にはないスタイルの楽曲紹介が行われました。

第２部 「生演奏」

第２部は生演奏で、日本タンゴ・アカデミー会員でメンターオ五重奏団やキサス・タンゴ四重奏団で活躍しているバンドネオン奏者の池田達則さんにソロ演奏で次の曲目を披露していただきました。

（１）“スール”SUR（ANÍBAL TROILO）
（２）“想いの届く日”EL DÍA QUE ME QUIERAS（CARLOS GARDEL）
（３）“ラ・クンパルシータ”LA CUMPARSITA
（GERALDO HERNÁN MATOS RODRÍGUEZ）
（４）“秋の奇想曲”CAPRICHO OTOÑAL
（LEOPOLDO FEDERICO）

当初予定は以上の４曲でしたが、ここで“オートラ”の声に応えて、次の２曲がサービスされました。

（５）“チェ・アレマン”CHE ALEMÁN
（LEOPOLDO FEDERICO）
（６）“ゴロンドリーナ”GOLONDRINA
（CARLOS GARDEL）

池田さんは曲目の合間にご自分のバンドネオンのことや、昨年アルゼンチンに滞在された折、現地の人からラ・ボカ近辺やその南の方は治安が悪いので行くなと脅かされて断念したこと、また敬愛していたレオポルド・フェデリコの死を知らされて、大変なショックを受けたことなどを語られ、若くして既に聴衆を退屈させないアルティスタとしての素養を身に着けておられると感心しました。

訃　報

元当会理事・大貫孝三さんが１月11日に多臓器不全で亡くなられました。
享年86歳。タンゴを愛し、当会の発展にも長年尽くしてこられました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

（編集部）

第16回「中部リンコン・デ・タンゴ」レポート

吉岡 達郎

第16回「中部リンコン・デ・タンゴ」（以下、中部リンコンと略記）は平成27年６月28日13時より、三重県伊勢市「伊勢河崎商人館角吾座」を会場に開催された。幸運にも前日までのこの時期特有のぐずついたお天気は見事に晴れ、幸先良いスタートを飾る事となった。当日は、東京・大阪・四国・静岡など遠隔地からの参加者もあり、55名の入場者を記録、予想を上回る盛況となった。

平成28年の「伊勢志摩サミット」に先駆ける「タンゴ・サミット」であったが、地元の「タンゴ・アルヘンティーノ三重」という、歴史ある愛好会が大北会長以下一丸となって強力な支援をして下さった事が、成功の大きな原動力になったと深く感謝を申し上げたい。

今回の「中部リンコン」は、地元会員勝原良太氏秘蔵の蓄音機「ＨＭＶ163」をフルに使うプログラムとし、第１部・第２部・第３部・第４部という欲張った４部構成とした。

第１部は地元会員による３曲選で、勝原良太会員・島田由美子会員が担当。

第２部は地元コレクターとして全国的にも有名な澤田義寛氏によるＳＰコンサート８曲選。

第３部は地元名古屋を中心に活躍中のヴァイオリニスト大久保ナオミさんと、地元桑名市出身で矢張り名古屋で大活躍中のピアニスト伊藤昌司さんによる二重奏の生演奏。

第４部は、東京からゲスト出演の宮本政樹氏による「ヴァイオリン・バンドネオン・歌……泣きのセンティミエント」と題したレコード・コンサートという大変欲張ったプログラムとなった。

第１部　地元会員による３曲選

プログラムのトップを切って爽やかに登場願ったのは、他ならぬ秘蔵の「ＨＭＶ163」を引っ提げて来られた勝原会員で、これまた秘蔵のＳＰレコードより３曲を披露して頂く事にした。常日頃から「私は未だほんの１年生、タンゴ歴が甚だ浅いから、トークなどとんでもない！」と強く辞退されていたが、「先ずは経験を積む事！」と強引に口説き落として出て頂いたが、非常に落ち着かれて、勝原流のトークを展開されたのは流石と言える。先ずは脱帽！　敬意を表したい。良い滑り出しが出来たと思う。場内からは初めて聴く蓄音機からの音の素晴らしさが予想外だった様で、暫くは感動のざわめきさえ起った。曲目は1934年アルベルト・ゴメスの歌で「Churrasca」、続いてカルロス・マルクッチ楽団の「Tinieblas」、そしてロス・プロビンシアノス楽団の「La cachila」

2015年（平成27年）6月29日（月曜日）　広域三重　14

蓄音機から タンゴの名曲

伊勢河崎商人館で愛好者交流会

中部地方のタンゴ愛好者の交流会が二十八日、伊勢市の伊勢河崎商人館であり、来場者約六十人が蓄音機から流れるタンゴの名曲に聴き入った。

交流会は、全国の愛好者でつくる日本タンゴ・アカデミー（東京）の東海北陸地方の会員が「リンコン・デ・タンゴ（タンゴ談話室）」の名称で年二回開催している。主に四日市市で開いてきたが、伊勢市では今回が初めて。

会場には一九二八年英国製の手回し蓄音機「HMV−163」が置かれ、所有者の勝原良太さん（六七）＝四日市市＝がお気に入りのSPレコードをかけた。来場者は目を閉じ、リズムに合わせて頭を動かすなど味わうように聴き入った。

若いころからずっとモダンジャズを聞き続け、五年ほど前にタンゴに〝転向〟したという勝原さんは「叙情的で湿っぽいところにほれ込んだ」と魅力を話していた。

交流会では、レコードコレクターとして知られる名張市の沢田義寛さんも蓄音機でアルゼンチンの作曲家ペドロ・マフィアの曲を流して解説。鈴鹿市の島田由美子さんが自身も奏でる楽器「バンドネオン」のソロ作品を紹介した。（中平雄大）

蓄音機（右奥）から流れるタンゴにじっくり聴き入る来場者＝伊勢市の伊勢河崎商人館で

目を閉じてレトロ感満喫

中日新聞に掲載された記事

が紹介された。

後半は地元で「フェリス・タンゴ」を主催するバンドネオニスタ島田由美子会員の登場を願った。彼女は“知る人ぞ知る”タンゴ・ワセダのＯＢで、かつては“パキータ”の愛称で呼ばれた人だ！今日は“指”ではなく指以上に達者な（？）“口”をフルに活用して貰う為に、特別にコメンテーターとして出場を願った次第だ。期待にたがわず“バンドネオン・ソロ特集”となった。最初の“Pacho”のソロ「La Sonámbula」は、何とアコもアコ、全盛期と言われる1913年録音のコロムビア盤ではないか！　担当が島田さんだけに大いに驚いた。後の２曲は「よしのり・よねやま」の「我が両親の家」といい、３曲目の「アストル・ピアソラ」の「Mi refugio（私の隠れ家）」といい、極めて島田さんらしい順当な選曲だと思った。私が感じたことは、島田さんのトークはなかなかのものだったということだ。これからも、機会が有れば、コメンテーターとしてもドシドシ活躍して欲しいと思った。地元の人達は案外それを待っているのでは？

第２部　ＳＰレコード・コンサート

ゲスト解説者　澤田義寛

三重県名張市在住日本有数のレコードコレクター・澤田義寛氏を招き、本日の目玉である「ＨＭＶ163」という蓄音機をフルに活用して貰う事とした。プログラムはペドロ・マフィア作品特集からの８曲選となった。最初このプログラムを頂いたときは正直、地味な選曲だなあ！　と思ったが、もう時間的に組み直しを依頼するのは無理な状態だったので、全面的に採用させて頂いた。プログラムの作成にはもっと注文をつけるべきだったと、少し後悔をした次第。

しかし、いざ始まってみると心配は杞憂に終わった。流石はキャリア十分なベテラン、独特の巧妙なトークと、演奏者の巧みな選び方が、私の危惧を吹き飛ばしてくれたのは見事だった。最初の１曲目こそ渋いマフィアとデ・フランコのバンドネオン二重奏「Amurado」（見棄てられて）だったが、２曲目からは、ダゴスティーノとバルガスの「No aflojés」（弱気を出すな）次にガルデルとカナロのコンビで「La mariposa」（蝶）、フィオレンティーノとトロイロで「Te aconsejo que me olvides」（私の事はわすれて）という具合に、当時としては最高の実力と最高の人気を有するコンビが選ばれていて、矢張りその素晴らしさはよく理解された様だ。５曲目はペドロ・マフィアのオルケスタで「Taconeando」（靴音高く）、６曲目は「Ventarrón」（つむじ風）、７曲目は「Pelele」（藁人形）と続き、最後の８曲目「Noche de reyes」（賢王の夜）で終わった。

一般には珍しい蓄音機によるＳＰ盤でのコンサートが、意外に聴衆には受けたことが後で判った。コンサート終了後、沢山の人から「あんなに音が素晴らしいとは思わなかった」とか、「蓄音機やＳＰがこんなに大きな音で聴けるとは……見直した」といった様に大変好評だったのは予想外のことであった。

尚、遅れたが、司会と進行は私吉岡が担当。但し次の第３部だけは、ヴァイオリニスト大久保ナオミさんの夫君で、マネージャーでもある方に司会は交代した。

第３部　ヴァイオリンとピアノの二重奏

ヴァイオリン：大久保ナオミ
ピアノ：伊藤　昌司

〈大久保ナオミ〉

1971年　日本弦楽指導者協会コンテスト、ヴァイオリン部門第１位獲得。
1975年　ＬＰ「バンドネオンの嘆き」リリース。
1979年　ＬＰ「グラシエラ・スサーナと祖国アルゼンチンに捧ぐ」リリース。
1982年　タンゴ楽団「タンゴ・デ・ラ・エスペランサ」のメンバーとしてアルゼンチン公演を行う。ブエノスアイレス・タンゴ市民証受賞。
1983年～1988年　ナゴヤシティ管弦楽団（現･セントラル愛知交響楽団）のコンサートマスター。
同年　ＬＰ「レクエルド・デ・ルナ・アスール」リリース。
（アストル・ピアソラより賞賛のメッセージを贈られる）
1992年　スペインのセビリア万国博覧会に於いて演奏。
「タンゴ・デ・ラ・エスペランサ」の一員としてパリ公演を行う。
フランス・ドイツ２か国のテレビで、アストル・ピアソラ楽団と共に紹介される。

現在、ソリストとして、各種演奏会に出演するほか、弦楽四重奏、室内楽、タンゴ、ポピュラー等、幅広い分野で活動を続けている。

〈伊藤　昌司〉

三重県桑名市出身。大学時代、ビッグバンドで全日本ＪＡＺＺコンテストで３位入賞。

プロ転向後もジャズ、シャンソン、クラシック等ジャンルにとらわれない高度な演奏技術を持ち、オリジナリティに溢れた都会派ピアニスト。世界デザイン博・三重まつり博・明宝ジャズフェスティバル・神戸ジャズストリート・愛知万博等々に出演。最近では世界的オカリナ奏者の大澤聡と、韓国、中国などのツアーに参加。その他さまざまなアーティストと競演するなど独自のユニークな活動をしており、名古屋では高岳町「ジャニー」出演中。

極めて異色なミュージシャンであるお二方によるライブは、短期間のリハーサル・音合わせにも関わらず、見事に息の合った即興的演奏をやって下さり、会場を大変興奮させてくれた。

演奏前にプログラムの提示を求めた処、「ラ・クンパルシータ以外は、当日のリハーサルで決めるので、私たちに曲目は任せて欲しい」という、前例のない事態となった。そういう訳で「リンコン」史上初の曲目無しのプログラムとなった次第である。

しかし、「第16回中部リンコン」としては、最高に盛り上がったプログラムとなり、ライブの重要さを今更ながらに知らされた。それにしても、通常我々が見聞きしているタンゴ・ミュージシャンとは比較にならない程の、サービス精神、ショーマン・シップには驚きを禁じ得ない。タンゴ・ミュージシャンはお高くとまっていないか？　この二人をもっと見習うべきだと思った。

第４部　プログラム「オーディオで聴くタンゴ」

ゲスト解説：宮本政樹

本日のリンコンも最終のプログラムとなる。テーマは「ヴァイオリン・バンドネオン・歌……泣きのセンティミエント」という、マニアには堪らないゾクゾクするプログラムだった。期待に違わぬ素晴らしいレココンとなった。私には大変勉強になったが、会場の人達にも漠然とではあろうが、タンゴの真髄が理解して貰えたのではと思いたい。第３部とは打って変わって、聴衆は静かにウットリと聴いて居られたように思う。そのプログラムは次の８曲であった：

１．Tarasca solo（タラスカ・ソロ）	オスバルド・フレセド楽団	1928年
２．Justicia criolla（クリオージョの掟）	フランシスコ・カナロ楽団	1927年
３．Loca de amor（狂乱の恋）	トリオ・シリアコ・オルティス	1940後半
４．Acquaforte（銅版画）	アグスティン・マガルディ歌	1930年頃
５．Mentira（いつわり）	アルベルト・ビラ歌	1930年
６．Nido de amor（愛の住み家）	ミノット・ディ・チコ楽団	1929年
７．Mi lamento（我が哀歌）	オスバルド・プグリエーセ楽団	1954年
８．Leyenda rea（やくざ者の伝説）	フアン・ギド楽団	1929年

私と宮本理事とはタンゴの好みが同じ古典タンゴである事は解っていたが、こうして聴いてみると、矢張り感動してしまう。その上トークが大変個性的で、本音で語る所が非常に多い人で、其処が魅力的であり、楽しいレココンになってしまう。これからの「中部リンコン」は名古屋開催が多くなると思うが、近い将来又お呼びしたいと思っている。

「第16回中部リンコン」はお陰様で予期しなかった程の成功を納めたと自負している。これは当事者のそれこそ血の滲む努力のお蔭であり、此処に改めて関係者各位に心からの感謝を申し上げて、レポートを終わりたい。

第17回「中部リンコン・デ・タンゴ」レポート

吉岡 達郎

第17回「中部リンコン・デ・タンゴ」（以下・中部リンコンと略記）は、前回の６月に引き続き、10月10日（土）13時より、久しぶりに名古屋市栄町の大黒屋本店「巌本真理メモリアル・ホール」３階で名古屋市在住の鈴木克比古会員並びに西村秀人理事と東京より参加して頂いた飯塚久夫会長、そして島﨑長次郎名誉会長の４氏による、リンコン始まって以来空前絶後の豪華メンバーのコメンテーターを迎えて開催された。

当日は絶好の秋日和と、これまた絶好のリンコン日和となりまさに“歴史的リンコン”に相応しい秋本番の開催となった。

それに久し振りに、岐阜在住の春日井邦夫会員・笠原芳雄会員のお元気な姿にも接する事が出来たし、はるばる遠方の静岡県磐田市から光廣威克会員、大阪在住の高田幹雄会員も参加して下さった。特筆すべきは勝原良太会員の関係で、ジャズやシャンソンのファンがかなり参加された事であった。十数名は居られたと思う。

更に嬉しかったことは、毎月第３日曜日にお世話になっている大阪の「ボデゲーロ」在籍の、津森健吾氏と林朝子氏のお二人が、奈良県大和郡山市と神戸市から参加して下さったことだ。多忙にも関わらずご参加頂いた皆様には深く感謝を申し上げる。当日は持参したプログラム50部が全部無くなったから、少なくとも50名の来場者はあったと思っている（会員は12名で他はビジター）。

プログラムについては、コメンテーターの面々を見てご想像がつくように、近来にない圧巻であった。映像あり、蓄音機によるＳＰコンサートあり、勿論ＣＤコンサートありで、その上に曲目も第１期黄金時代から、第２期黄金時代は言うまでもなく、それ以降の衰退期から現代にいたるまでフォローされて、来場者には、タンゴの奥の深さ、間口の広さ、そして時代の変遷による変化と進化の大きさに、今更ながら驚かされたのでは？と想像している。

特に今回の来場者の多くは、第１部を担当された鈴木会員のプログラムの様な比較的新しいタンゴには馴染みの薄い人達なので、ある意味では逆に新鮮な感動を受けられたのではと思った次第である。

さて早速プログラムに移ることにしよう。

第１部は地元名古屋市郊外に在住で、コントラバホ奏者として地元楽団の「タンゴプラティーノ」に所属されてバリバリ活躍されている現役演奏家でもある鈴木克比古会員である。勿論アカデミー会員でもある。私も既に何回も演奏会でお目にかかっているし、四日市の「サロン・デ・タンゴ」の例会にも名古屋から毎回参加され、プログラムも担当されており、いわば旧知の中であり、かつての仲間でもあった人である。前回の伊勢市での「第16回中部リンコン」にもコメントをお願いしたが、「どうしても抜けられない所用があるので……」ということで実現しなかった経緯があって、やっと今回実現した次第である。

その甲斐あって期待を裏切らない素晴らしいプログラムだった。タイトルにもあるように、「苦闘するタンゴ＝70年代」という70年代から80年代にかけては、アルゼンチン史上でも「ロスト・ゼネレ

ーション」と言われる一種の暗黒時代であった。単にタンゴ界だけでなくアルゼンチン国民が、アルゼンチン共和国全体が、内憂外患という苦闘を強いられていた時代でもある。

国民は軍政による弾圧下にあって、現在でも数万人が行方不明のままといわれている。経済も不調で失業者が氾濫、銀行は取り付け騒ぎが常時、それにイギリスの女傑サッチャー首相を相手に起こした、マルビナス諸島の領有権を争っての、いわゆる「マルビナス戦争」には、多くの若者が戦争に駆りだされて犠牲になり、挙句の果てには、あの女傑に完敗して、残されたのは多数の戦争犠牲者と、多額の借金という最悪の事態を迎えてしまった。

しかし敗戦のお蔭でやっと国民は自由を得た、何物にも勝る自由をである。軍政は終了し、議会制民主主義が復活したのである。そして久しぶりに総選挙が実施され、大統領選挙も行われ、国民に選ばれた大統領が旧ペロン派から選ばれた。私は名前を忘れたが、あのピアソラがパリで病に倒れたとき、余命僅かを悟ったピアソラの「ブエノスへ帰りたい」という切なる願いを夫人から伝え聞いて、飛行機の手配をして無事にピアソラをブエノスに帰還させた人、その大統領である（やっと思い出した！“メネム”だ！）。

以後、アルゼンチンは確実に復活の道を歩み、多事多難ではあったが現在に至っている。そしてタンゴも、アルゼンチン共和国に負けず劣らず、多事多難の道を歩みながらも、あの「タンゴ・アルヘンティーノ」というショウが、ニューヨークのブロードウェイで歴史的大成功を納めたのを契機として、今や世界中で踊られ演奏されるようになっている。見方によっては第３期黄金時代が到来しているのではないか？

しかし多くのタンゴ愛好家は、この私の意見には懐疑的な方が多いだろう。それはタンゴ界の状況や取り巻く環境からタンゴそのものの質的変化とか、愛好家の高齢化とか、楽しみ方の根本的変化つまり聴く時代から踊る時代に移っていること等々が原因と思われる。特にタンゴの質的変化は我々古くからの愛好家（つまり高齢者ということ）にとっては、致命的で且つ根本的な問題である。

今がタンゴの第３期黄金時代であるか否かは、これからの歴史が証明してくれることだろう。次の世代に（実在するのか不明だが、ある人に言わせるとタンゴは我々で御終いとか…）任すしか仕方がないのも事実である。

タンゴの歴史100年の変遷について、第１部の鈴木克比古氏のプログラムは、私に色々と改めて考えさせてくれた気がする。日常的に70年代のタンゴを聴く人は少ないと思う。私も正直言ってその部類に入る一人だが、でも、改めてジックリと聴くとピアソラとの違いは鮮明で、まだまだ我々でも十分に聴くに耐えるタンゴである。大編成のオーケストラで交響楽的に演奏されるタンゴも、これはこれで充分に一聴の価値はある。多分会場の皆さんも同感の人が多かったと思う。普段余り聴かない分、新鮮に聴けたのではと感じた。

第２部のプログラムは西村秀人理事にお願いしたが、当初の予定が変更になって、映像のみではなくＳＰ盤と映像のコラボによるプログラムとなった。蓄音機はご承知の如く「HMV163」で、我が同志勝原良太会員秘蔵の愛機である。

映像と蓄音機を使用してのプログラムは初めての体験だったが、予想以上に面白いプログラムで、演奏する楽団のメンバーが映像で紹介されて、リーダーは前列右側の端とか、後列の左側２人目がトップ･バイオリン奏者とか、説明を受けると、非常に解りやすく楽しみが倍増するから不思議である。これからのレココンの予見を受けた感じであった。

ＳＰコンサートも映像を使うことによって音だけの楽しみから、確実に楽しみが倍増することは明らかで、西村理事は重大な示唆を我々に今回与えてくれた気がしてならない。あらゆる点に於いて今回の「中部リンコン」は画期的であり、全ての点で歴史的であったという気がする。

続いての飯塚会長による映像の第３部となるが、矢張り映像の持つ魅力は大きい気がした。何よりも生きた本場ブエノスの雰囲気が味わえる！　この魅力は大きい。それに飯塚会長の軽妙な語り口と画面とが絶妙に溶け合って、観衆はその素晴らしいフィーリングに酔いしれてしまう。流石は映像を知り尽くしたベテランで、全くと言っていい程映像を使い切っている感じがした。会場のファンも大いに満足されたことだろう。

次に最後を飾るのは島﨑長次郎名誉会長による待望のＳＰ盤による「ＨＭＶ163」を使ってのレココンである。

不思議なことに何回聴いてもこのレココンは飽きない。音の魅力も大きいだろうが、たかだか３分前後の１曲の中に、タンゴのエキスが全て詰め込まれているというのが最大の魅力なのだと思う。そこにあの名調子の島﨑節と相まっての名解説が、更に我々聴く者を古き良きタンゴの世界に“陶酔”させて行く！　我々には絶対にマネの出来ない至芸である。

今回の第17回「中部リンコン」に、もうこれからは絶対ないといってよいと思う程の豪華なコメンテーターの方々に来て頂けたこと。４人の方による例を見ない程の多彩なプログラミングが実現したこと。映像あり、SP盤のレココンあり、ＣＤのレココンあり、更にＳＰと映像のコラボありと、あらゆる点に於いて画期的、歴史的、全国初の夢の「リンコン・デ・タンゴ」であったということを、重ねて何回も強調する次第である。

私も今後二度とこんな「リンコン・デ・タンゴ」は開催する自信は無い。コメントを担当して頂いた飯塚久夫会長・島﨑長次郎名誉会長・西村秀人理事・鈴木克比古氏に、心からの感謝を申し上げます。本当に有難うございました。

次に４氏のプログラムの詳細を第１部から順次掲載いたします。

第１部　鈴木克比古氏「悪戦苦闘のタンゴ70年代」

１．レオポルド・フェデリコ楽団
　（１）Cautivante（面白い）
　（２）Margarita de agosto（８月のマルガリータ）
２．オスバルド・ベリンジェリ楽団
　（１）Los mareados（酔っ払いたち）
　（２）Ojos negros（黒い瞳）
３．アティリオ・スタンポーネ楽団
　（１）Orgullo criollo（クリオージョの誇り）
　（２）El choclo（エル・チョクロ）

第２部　西村秀人氏「日本のタンゴ史を飾るアーティスト／来日楽団の映像集」

1．Palomita blanca（白い小鳩）- Mama yo quiero un novio（ママ私恋人が欲しいの）
ホルヘ・カルダーラ、藤沢嵐子、早川真平とオルケスタ・ティピカ東京
画像：1955年日本映画「月に飛ぶ雁」

2．Canaro en París（パリのカナロ）- Frente al mar（海に向かって）
藤沢嵐子、早川真平とオルケスタ・ティピカ東京
画像：1965年アルゼンチン映画“Viaje de una noche de verano”

3．En esta tarde gris（灰色の午後）
阿保郁夫、坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ポルテニア
＜1968年プエルトリコ録音＞

4．La puñalada（ラ・プニャラーダ）キンテート・レアル
＜1964年来日時のＴＶ番組“夜のコンサート”＞

5．A la gran muñeca（大きな人形に）エクトル・バレラ楽団
＜1971年来日時のＴＶ番組より＞

6．Adiós pampa mía（さらば草原よ）フロリンド・サッソーネ楽団
＜1972年来日時のＴＶ番組より＞

7．Tanguera（タンゲーラ）フランチーニ・ポンティエル楽団
＜1973年来日時のＴＶ番組より＞

8．Recuerdo（想いで）オスバルド・プグリエーセ楽団
＜1979年来日時のＴＶ番組より＞

9．La cumparsita（ラ・クンパルシータ）ビルヒニア・ルーケ
＜1987年来日時のＴＶ番組より＞

10. El choclo（エル・チョクロ）西塔祐三とオルケスタ・ティピカ・パンパ
＜1993年ＴＶ番組“軽音楽大全集”より＞

11. Chau París（チャウ！パリス）
小松亮太、志賀清、家野洋一、松波常雄他
＜2011年ＴＶ番組より＞

第３部　飯塚久夫氏　映像提供

第４部　島﨑長次郎氏「輝けるタンゴの時代の遺産」

1．Reina de maleva（やくざの女王）　オスバルド・フレセド楽団
2．Gloria（栄光）　フランシスコ・カナロ楽団
3．Color de rosa（バラの色）　フリオ・デ・カロ楽団
4．Lirio azul（青い百合）　フアン・ギド楽団
5．A la luz del candil（ランプの灯影で）　ロベルト・フィルポ楽団

6．Julián（フリアン）　ロシータ・キロガ
7．Cuando llora el corazón（心が泣くとき）　フアン・マグリオ・パチョ楽団
8．La cumparsita（ラ・クンパルシータ）　カジェタノ・プグリッシ楽団
9．Julienne（フリエンネ）　オルケスタ・ティピカ・ビクトル

ユリ・アスセナＣＤ第2作「COLORIDO」発売

ユリ・アスセナさんが新作ＣＤを発表した。タイトルの「COLORIDO」は“彩り”“色合い”をイメージしたもので、ボーナス曲を加えた全16曲の前半７曲はミロンガなどでよく耳にする曲。後半で“聴き応え”のあるものが選ばれている。初めて“Garganta con arena”を聴いて受けた衝撃がこのＣＤに籠められているという。聴く人にも踊る人にも受け入れられる１枚。

録音は2015年５～６月。場所はブエノス・アイレスのイオン・スタディオ。

伴奏メンバーは（Bn）：Hugo Pagano*（Vn）：Washington Williman
（Pf）：Aldo Zaralegui*（Cb）：Guillermo Ferrer

（*印は第１作にも参加している）

第26回 関西リンコン・デ・タンゴ・レポート

— 鈴木 忠夫（姫路市）—

関西リンコン・デ・タンゴが11月８日（日）いつもの神戸三宮「サロン・ド・あいり」で開催された。

当日は生憎の天気で雨が降っていた。会場に着いてみるといつも早々と準備されている受付が無人で、思案していると山本雅生氏がアタフタと階段を駆け上がってきて「上田君が風邪で急に欠席で、いま彼の家まで車をブッとばして今日のプログラムと第1部のビデオテープをもらってきた。リンコンに遅れないよう久しぶりに暴走族になった」と物騒なお言葉。リンコンより命を大事にされたい。

出だしは少々バタついたがNTA本部よりのゲスト笠井正史氏も到着され地元関西の顔ぶれも大体揃ったところで定刻となり、山本雅生氏の開会の挨拶があって開幕となった。

第１部「映像で見るタンゴ」ベストオブタンゴVol.3より

解説の上田登氏が欠席となったので、解説抜きでビデオの流しっぱなしとはなった。此のビデオは以前ラティーナより出ていたものでご覧になった方も多いと思うが、古い映像が殆んどなので画質音質共良くない。しかし貴重な映像も多々あり、ここでは出だしのサルガン楽団、トロイロ楽団の豪華布陣に度肝を抜かれる。最後に出てくるピアソラの自作自演も貴重な映像だ。その他ベバ・プグリエーセのオルケスタや、セステート・スールなど今となっては懐かしい演奏風景が見られ、ダンスシーンも多い。

第２部アルゼンチンタンゴユニット「SINCOPA」の演奏を楽しむ

「SINCOPA」は最近関西を中心に精力的に活動しているユニットだが、日頃不勉強な小生はこれが初見参だ。リーダーは以前舳松伸男氏主宰のロス・アセス・デ・オーサカでピアニストを務めた綾部美和子さんで、現在はタンゴを中心に様々なジャンルで活動している。ビオリンのYu-Ma氏は関西を中心に活動しているジャズバイオリニストだが、最近はタンゴやシャンソンにも取り組んでいる。バンドネオンの力石ひとみさんはピアソラに触発されて、ピアノからバンドネオンに転向し京都バンドネオンクラブで早川純氏に師事、現在は京都バンドネオンクラブの講習指導者の一人。通常はこの３人にコントラバスを加えたクァルテートで活動している。結成は2010年。会場のスペースの関係でここではトリオでの演奏だ。なんといっても注目はバンドネオンで、メンバー中一番小柄でスリムな女性が体力勝負の楽器を担当する。

演奏が始まった。どうしてもバンドネオンに耳を集中してしまう。中々良い感じだ、のびやかに楽器が歌っていて安心して聴いていられる。フォルティシモでも大きな動作もなく静かな表情で淡々と弾きながら音にメリハリがあリ、パワー不足を感じさせない。今後を期待させる若手有望株の出現と思った。ビオリンは本来はジャズで活動していると聞いたので、自由奔放を予想していたら意外と正統的タンゴビオリンが流れ出した。始めの方は本場の有名楽団のバージョンを下敷きにした演奏なのであまりハメを外せなかったようだが、５曲目のミロンガ辺りからだんだん熱くなってきた。ピアノの綾部さんもすぐに反応する。７曲目の「QUE NADIE SEPA MI SUFRIR」で完全に燃え上がり

白熱のバトルとなった。こりゃ完全にジャズのノリだわ。後で綾部さんは、かつてジャズピアノの小曽根真氏に師事したと知り、成程と納得した。11曲目の「MALA JUNTA」で正統的タンゴに戻り、アンコールの「LA CUMPARSITA」で第２部を終了した。今後の発展が楽しみなユニットだ。

第３部「コントラバスを聴く」

NTA本部よりお出で頂いた笠井正史氏のプログラムでコントラバスに焦点を合わせたプログラムを自己紹介の後、とに角まず一曲とプログラムの最初の曲「コントラバスでタンゴを」セルヒオ・リバスのコントラバス、ピアノ伴奏を聴く、名演!　続く２曲目を繰り下げ、３と４曲目を先に聴くよう変更され「EL APACHE ARGENTINO」をR.フィルポ四重奏団とキンテート・ピリンチョの演奏で聴きくらべた。笠井氏はこれは優劣の比較ではなく、コントラバスの有無による“何か”を感じてほしいとの意向のようだ。縁の下の力持ち的楽器に興味をもたれたきっかけを笠井氏は次のように語られた。

「かつて日本でタンゴがブームだった時代に、高山正彦氏が『皆さんタンゴを聴いてバイオリンがどうのバンドネオンのバリエーションがどうのとは言われるがコントラバスは話題に上らない。これがタンゴの土台なのにね』と話されるのを聞いて以来コントラバスを意識的に聴くようになった」とのこと。これ以降は、繰り下がった２曲目「CANARO EN PARÍS」に続いてプログラムどおりに進行した。何分主眼をコントラバスに置いたプログラムなので日頃滅多に聴かないものが殆んどだったが、唯一お馴染みの曲「ORGANITO DE LA TARDE」を「キサス・タンゴ四重奏団」の大熊慧の演奏したのは名曲名演だった。これまでになかった視点からのプログラムと解説に参会者たちも満足と納得の表情だった。

今日は生憎の天気で欠席者が多く、遠路の方やとくに「SINCOPA」には気の毒なことだった。恒例の写真撮影の後、懇親会に移り大いに盛り上がった。話は尽きなかったが20時に散会した。

出席者：昼の部・NTA会員10名非会員12名、夜の部・懇親会全員で15名
尚、次回第27回関西リンコン・デ・タンゴは2016年５月22日（日）於、サロン・ド・あいり
生演奏はバンドネオンとギタラのドゥオ、タンゴ・グレリオの予定

第５回 ミロンガパーティー報告

鈴木 啓子・池永 博威

今回で第５回となる、日本タンゴ･アカデミー主催のミロンガパーティーは、2015年８月２日（日）前回と同じく千代田区麹町にある「いきいきプラザ一番町」カスケードホールで行われた。前回は秋の開催だったが、会場確保の都合から今年は真夏の開催となった。

連日35℃を超える猛暑の中、それも午後２時30分より５時30分までの昼の時間ということで、参加者の減少が心配されたが、案に相違してキャンセルもほとんどなく、参加者数は前回を大きく超え今までのミロンガでも最多となる162名となった。やはり夜よりも昼の時間の方が参加しやすいということもあるのだろうか。

162名の内訳は、ダンスをする方が115名、音楽を聴くだけの方が47名。口コミやチラシを見て来られた方のほか、インターネットで知ったという方も多かったのが印象的である。

〈タイムスケジュール〉

14：00	開場
14：30～15：00	CD演奏によるミロンガタイム
15：00～15：05	飯塚久夫会長による挨拶
15：05～15：35	チコス・デ・パンパ演奏
15：35～15：50	ダンス・デモ（JOE & TAKAMI）
15：50～16：00	アカデミーからのお知らせ
16：00～16：40	CD演奏によるミロンガタイム
16：40～17：10	チコス・デ・パンパ演奏
17：10～17：30	CD演奏によるミロンガタイム
17：30	終演

暑い中を到着した方々が開場と同時に次々とホールに入り、中は冷房がほどよく効いていて皆さんほっとされた様子。さっそくCDに合わせて踊り始める人もいる。今回のCD選曲は海部英一郎、三浦幸三、黒木皆夫、佐藤進のベテラン会員の方々に各８曲ずつお願いした。ミロンガやワルツも取り混ぜ、ダンサブルな曲に乗って皆さん楽しく踊りはじめる。

ひとしきり踊ったところで飯塚会長の開会の挨拶。今回は会場側からのきびしいお達しでアルコール類を持ち込めなくなったので、残念ながらワインは無しとのこと。また男性が女性をダンスに誘う方法が、最近は「カベセオ」といって男女双方が目と目を合わせて合図するというやり方に変わってきているそうで、中国や韓国では一般的になってきているので日本でもだんだんそうなるのではないか、という会長のお話だった。

〈ライブ演奏第一部〉

会長の挨拶が終わっていよいよお待ちかね、CHICOS DE PAMPAの生演奏。チコス・デ・パンパは、大編成のアルゼンチン・タンゴ楽団「西塔祐三とオルケスタ・ティピカ・パンパ」の有力な若手メンバーによって結成され、バンドネオン、バイオリン、ピアノ、コントラバスによる４人編成のバンド。フアン・ダリエンソ楽団のスタイルを継承し、パワフルで歯切れの良いビートとシャープな演奏を得意とし、典型的なアルゼンチン･タンゴの正統なスタイルを受け継ぎながらも、新鮮味に溢れ、かつ高い演奏技術とアンサンブルの良さに定評があるバンドである。メンバーは北村聡（バンドネオン）永野亜希（バイオリン）宮沢由美（ピアノ）佐藤洋嗣（コントラバス）。

演奏するチコス・デ・パンパ四重奏団

「LOCA（狂女）」に始まり､「独立」「フェリシア」「心の底から」「ビエン･ポルテニャ」「夜明け」「ビクトリア･ホテル」「涙と笑い」「エル･チョクロ」「パリのカナロ」の10曲が第一部で演奏された。踊る人と聴く人のどちらをも満足させるその迫力のある演奏に、会場全体が盛り上がったところでお待ちかねのダンス・デモの時間となった。

〈ダンス・デモンストレーション〉

今回のダンサーはJOE ＆ TAKAMI。JOEは元ヒップホップダンサーで、TAKAMIはサルサダンサーという異色のカップルである。１曲目は小松亮太の演奏するCDによる「首の差で」、２曲目はダニエル・ビネリ楽団の「悪い仲間」。そのモダンで力強いダンスに拍手が盛り上がり、アンコールに応えての３曲目はワルツで「下町のロマンス」を披露してくれた。

この後、アカデミーからのお知らせを挟み、再びCD演奏によるミロンガタイム。カスケードホールの天井の高い広々とした空間に、踊る人の数がちょうど良い加減で、ぶつかることもなく楽しげに踊っている。

〈ライブ演奏第二部〉

第２回目のチコス・デ・パンパの生演奏タイムは「ラ・クンパルシータ」で始まった。続いてミロンガで「ガンガン飛ばせ」、「７月９日」、ワルツで「愛の悲しみ」と続く。その演奏はますます佳境に入り、座席で聴く人も身を乗り出して聴いている。踊る人も楽しげに踊っている。曲目は「黄昏のオルガニート」「わき目もふらず」「拍車」「何よりも偉大な」「これが王様だ」と盛り上り、早くも最後の曲「ピアニスタンゴ」。満場のお客様の拍手に応えてのアンコール曲は「LA RACHA」だった。

〈エピローグ〉

最後にまた30分間CDの演奏を聴いて、今年のミロンガパーティーは幕を閉じた。昼間のミロンガのせいかほとんどの人が最後の一曲が終わるまで余韻を楽しんでいるようだった。

ベテランの４人の方がミロンガのために選曲してくださった曲は以下の通り。いずれも踊るによし、

聴くによしの曲で、あらためてこの紙面を借りてお礼を申し上げます。

海部英一郎	1）ブランセン通り	アントニオ・ボナベナ楽団
	2）祈り	フアン・マグリオ・パチョ楽団
	3）涙と笑い	フアン・ダリエンソ楽団
	4）淡き光に	フロリンド・サッソーネ楽団
	5）メルセ寺院の鐘	フロリンド・サッソーネ楽団
	6）ナイフで一突き	フアン・ダリエンソ楽団
	7）黄昏のオルガニート	カルロス・ディ・サルリ楽団
	8）バイアブランカ	カルロス・ディ・サルリ楽団
三浦幸三	1）台風	エドガルド・ドナート楽団
	2）我が悩み	アルフレド・デ・アンジェリス楽団
	3）パタ・アンチャ	オスバルド・プグリエーセ楽団
	4）街角	キンテート・ピリンチョ
	5）ラ・モローチャ	カルロス・ディ・サルリ楽団
	6）ガウチョの嘆き	フランシスコ・カナロ楽団
	7）バンドネオンの嘆き	アニバル・トロイロ楽団
	8）愛と嫉妬	フアン・ダリエンソ楽団
黒木皆夫	1）口説き	アルマンド・ポンティエル楽団
	2）狂える魂	ロベルト・フィルポ楽団
	3）大きな人形に	フロリンド・サッソーネ楽団
	4）忘却の小道	ルイス・ペトルチェリー楽団
	5）バンドネオンの心	タンゴ・スエーニョス楽団
	6）夢の中で	フェリーペ・アントニオ楽団
	7）夜明け	カルロス・ラサリ楽団
	8）悪童	カルロス・ガルシアとタンゴ・オールスターズ
佐藤　進	1）三叉路	アンヘル・ダゴスティーノ楽団
	2）別れ	エドガルド・ドナート楽団
	3）夜遊び	オスバルド・プグリエーセ楽団
	4）涙と笑い	ロドルフォ・ビアジ楽団
	5）君の声を聞く	リカルド・タントゥーリ楽団
	6）エル・ガロン	ドン・パンチョ五重奏団
	7）夢の中で	ヌエボ・キンテート・レアル
	8）我が故郷に勝るところなし	フランシスコ・カナロ楽団

〈おわりに〉

タンゴ・アカデミーのミロンガは、踊る人と聴く人が一堂に会してタンゴを楽しめる唯一の会であり、来年は踊りたい人、聴きたい人、そして唄いたい人や演奏したい人も加わって、皆でタンゴに浸るひとときが持てれば素晴らしいと思う。

第１回 東北リンコンに参加して

池永 博威

東北地方で初めてのリンコン「2015東北リンコン・デ・タンゴ秋田」が、秋田中南米音楽同好会と日本タンゴ・アカデミー（NTA）の共催で、秋田市大町に建つ「秋田市民俗芸能伝承館」の４階練習室で去る11月10日に開催されました。会場の「秋田市民俗芸能伝承館」は“ねぶり流し館”の愛称で親しまれていて、１階の展示ホールには竿燈、土崎港まつり（土崎神明社曳き山行事）、梵天などの秋田市の民俗行事や伝統芸能が展示紹介されています。また竿燈演技を体験できるチャレンジコーナーもあり、４～10月の土・日・祝日には竿燈の実演を見ることもできます。東京からは７名のNTA会員が参加しました。

当日の参加総人数は44名で、そのうち秋田中南米音楽同好会の会員が10名（内NTA会員３名、元会員２名を含む）、県外NTA会員が９名（東京の７名の他に、大阪から１名、青森から１名）で、その他の25名は地元新聞の催事コーナーの記事や同好会会員によるPRと誘客によって初めて参加された地元の潜在愛好家でありました。また、男性が17名（39％）に対して女性が27名（61％）と圧倒的に女性の参加者が多い会になりました。

午後１時半になると、最初に秋田中南米音楽同好会の佐藤勝夫会長から開会のことばと東北リンコンが秋田で開催されるに至った経緯の説明があり、その後でスタッフとして受付や会場の設定などの手伝いをしていただいた同好会の５名の会員が紹介されました。続いて会長の飯塚久夫氏から挨拶を兼ねたNTAの紹介があり、いよいよレコードコンサートの開始です。

特別ゲスト・コメンテーターの飯塚久夫氏が「タンゴ黄金時代を巡って」と題して、黄金時代への道程と1940年代に活躍した楽団について貴重な映像と音を交えて歴史を辿りました。同じく特別ゲスト・コメンテーターのNTA名誉会長島﨑長次郎氏は「時代を超えて、いま蘇るタンゴの名盤」のタイトルで、すべてＳＰレコードを用いて分かり易い巧みな話術を交えて第１次黄金時代の名曲、名盤の素晴らしさについて振り返りました。さらに、他の10人のNTA会員が自慢の曲をそれぞれ２曲ずつ持ちよって披露しました。各自の曲目は後ろのプログラムに示したとおりです。しかし、高田幹夫氏、清水裕氏、宮本政樹氏、寺本千栄子氏、弓田綾子氏の５人が終わったところで時計の針は午後５時を回ってしまったので、一先ずコンサートはお開きになりました。

懇親会はNTA会員12人が参加して、宿泊した秋田温泉のホテル“さとみ”で行いました。ひと風呂浴びて浴衣に着替えて、秋田の地酒に酔い自慢の郷土料理に舌鼓をうちながら会員同士の友好を温めました。昼間積み残した池永博威氏、長利浩三氏、赤田弘子氏、小澤　忠氏、佐藤勝夫氏の５人の選曲も流れてあっという間の至福の一時でした。翌日はレンタカーを借りて秋田県南の名所を巡り、晩秋の名残を惜しみつつ夕刻全員無事に帰京しました。

当日、初参加された多くの方々からアンケートで感謝の言葉をいただきましたのでご紹介します。

● 書き切れないほどの感動と感銘に心から感謝いたします。有難うございました。（秋田市Ｓ.Ｙ・

女性）

- チケー、あなたの瞳を見つめるとき、タンゲーラ　がよかった。（秋田市O.S・女性）
- 今日初めて参加しました。素晴らしいタンゴのメロディー、生の演奏を聞いて見たいと思いました。昔懐かしい自分のうまれる前の映像、歴史を見て驚かされました。また参加したいと思います。（秋田市S.S・女性）
- SPレコードの音が良かった。（秋田市S.H・男性）
- 普段じっくり、タンゴだけを聴く機会がなかったのですが、大変貴重な音源を試聴させていただき、本当に有難うございました。皆さんが夢中になる訳がわかるような気がしました。92歳の女性歌手の素晴らしい歌声に感動しました。（秋田市S.Y・女性）
- SPレコード、一言で全てが素晴らしい！　関係者に感謝します。（秋田市S.T・女性）
- セミ・クラシックからラテン迄の音楽が好きです。今日はアルゼンチン・タンゴの良さを十分楽しませてもらいました。（秋田市N.R・男性）
- 今日のコンサートの準備から会員の心づくしに感謝でいっぱいです。有難うございました。クンパルシータの全集が出ましたら宜しくお願いします。（秋田市S.S・女性）
- 1995年、アルゼンチン、ブラジルを訪れて以来、５年毎に３回行って参りました。タンゴの発祥地ボカにその都度寄り、本場のタンゴを聴いてまいりました。今回の催事を懐かしく感じました。次回も楽しみにしております。（秋田市N.R・女性）
- 皆様の楽しい会話と、LP、SP盤は今後も聞かせて欲しい。（秋田市H.T・男性）
- これがタンゴだ!!　と感じ感銘を受けました。最高でした。（潟上市T.K・男性）
- また、タンゴを聞かせてください！（秋田市O.S・男性）

〈写真〉熱演の飯塚、島﨑両氏と真剣に聴き入る参加者（左、右上）、当日参加したNTA会員（右下）

東北地区NTA会員のバックアップと秋田中南米音楽同好会の支援で、第１回東北リンコンは大盛況の内に幕を閉じました。佐藤勝夫会長から次のようなお葉書をいただきました。

“NTA会員が少ない中での開催は当初から参加人数が心配されておりましたが、フリー参加者が多く来会されたのでほっとしています。今回の開催を契機に同好会に２名の新規会員に登録いただきました。一人でも、タンゴのコラソンを聴いて感動する人たちに励まされて、又コンサートを続けていきたいと思います。今回のリンコンは私たちに元気を頂いたと思います。”

第１回 東北リンコンプログラム

＜タンゴ黄金時代を巡って＞ 飯塚久夫

● **黄金時代への道程**

1. わが悲しみの夜 Mi Noche Triste（Samuel Castriota-Pascual Contursi）（1917）
   ビルヒニア・ルーケ（ロベルト・フィルポ） （映画「LA HISTRIA del TANGO」1949）
2. トモ・イ・オブリーゴ Tomo y Obrigo（Carlos Gardel-Manuel Romero）
   カルロス・ガルデル Carlos Gardel（映画「LAS LUCES de BUENOS AIRES」1931）
3. チルーサ Chirusa（J.D'Arienzo-Nolo Lopez）
   フアン・ダリエンソ Juan D'Arienzo（映画「TANGO」1933）

● **黄金時代を象徴する楽団（ミゲル・カローとフランチーニ＝ポンティエル）**

4. 心のときめき Al Compás del Corazón （Domingo Federico-Homero Expósito）（2006）
   ミゲル・カロー Miguel Caló（歌 Raúl Berón）（1942）
5. タンゲーラ Tanguera（Mariano Mores）（1955）
   フランチーニ＝ポンティエル Enrique Mario Francini=Armando Pontier（1973）

● **日本タンゴの黄金時代の始まり**

6. フアン・カナロ Juan Canaro（1892-1977）の来日（1954）
7. あなたの瞳を見つめる時 Cuando Miran Tus Ojos（J.M.Aguilar-Enrique Cadícamo）
   マリア・デ・ラ・フエンテ María de la Fuente（1918-2013）

● **黄金時代を象徴する楽団（J・ダリエンソとO・プグリエーセ）**

8. 追憶 Remembranzas（Mario Melfi-Mario Battistella）
   フアン・ダリエンソ（オスバルド・ラモス）Juan D'Arienzo（1968）
9. これが王様だ Este Es El Rey（Manuel Caballero）
   コロールタンゴ（"La Viruta" @BsAs 2010）
10. オスバルド・プグリエーセ Osvaldo Pugliese―その魅力の秘密
    ロベルト・アルバレス Roberto Álvarez（@USA 2007）
11. チケー Chiqué（Ricardo Luis Brignolo）
    オスバルド・プグリエーセ Osvaldo Pugliese

＜いま蘇るタンゴの名盤～針音を超えて＞ 島﨑長次郎

1）シン・クレメンシア（無情）	フランシスコ・ロムート楽団
Sin Clemencia（L.D`Agostino）	日 Columbia JX79 G;1930-（Odeon7859）
2）イルペー（大鬼蓮）	ロベルト・フィルポ楽団
Irupé（F.García）	Odeón 8885 G:1929
3）アルマ・デ・パジャーソ（道化師の心）	ロベルト・マイダ（歌）
Alma De Payaso（Pérez=Saraceno）	Regal DK8421 G:1930
4）プレガリア （祈り）	フアン・マグリオ "パチョ" 楽団
Plegaria（E.De Maio）	Odeón 9104 G:1931
5）麗しのクリオージャ	フリオ・デ・カロ楽団
Criolla Linda（Gorrese=Germino）	Odeón 55159 G:1950

6）エル・アコモード　フランシスコ・カナロ楽団
El　Acomodo（E.Donato）　Odeón4863　G:1933

7）さらばアルゼンチンよ　オルケスタ・ティピカ・ビクトル楽団
Adiós Argentina（Matos Rodríguez）　Víctor47436　G:1930

8）ラ・クンパルシータ　オルケスタ・ティピカ・ロス・プロビンシアノス
La cumparsita（Matos Rodríguez）　Víctor47621　G:1931

＜タンゴ・アカデミー会員　２曲選＞

大阪：高田幹雄
1．Y Fue Tu Risa（E.Bohr-A.Bates）　君の微笑み（そして君の笑い声があった）
José Bohr y su Orquesta Típica　79724A　1926年
2．Joven Engrupido（N.La.Farina-I.Durante）　自惚れた若者
Orquesta Típica Bonavena　歌：Antonio Buglione　A5530　1931年

東京：清水　裕
3．SANATA（milonga）　AMORES　TANGOS楽団　2012年
4．LÁGRIMAS Y SONRISAS（Vals）　涙と笑い　PABLO VALLE Sexteto楽団

東京：宮本政樹
5．LA MULITA（気弱な女）（ミロンガ）　ロベルト・フィルポ新四重奏団
6．PRINCESA（プリンセス）（ワルツ）　フアン・マグリオ“パチョ”楽団

東京：寺本千栄子
7．Esclavas Blancas　（白い奴隷）　Bianco=Bachicha　楽団　1928年
8．Matala　（殺してしまえ!）　Juan Maglio“Pacho”楽団　1930年

東京：弓田綾子
9．Milongueando en el 40（華麗なる40年代）　アニバル・トロイロ楽団
10．Arrepentido（後悔）　オスバルド・プグリエーセ楽団　歌：Jorge Maciel　1967年

東京：池永博威
11．Visión celeste（V）空色の風景　Juan D'Arienzo楽団　1936年
12．La vestido celeste　水色のスカート　ラウル・バルボーサ

青森：長利浩三
13．La Última Copa　最後の盃　歌：阿保郁夫　伴奏：フェルナンド・テル・トリオ

秋田：赤田弘子
14．エバリスト・カリエゴに捧ぐ　DVD　2003年フォーエバー・タンゴ公演から
15．La cumparsita　小松亮太の五重奏　DVD　（NHK名曲アルバムから）

秋田：小澤　忠
16．La　muchacha del circo　サーカスの娘　歌：A・マガルディー　1928年
17．Vieja guitarra　古いギター　歌：ロシータ・キロガ　ギター伴奏　1929年

秋田：佐藤勝夫
18．Esta Noche de Luna　月の今宵　DVD　歌：アリエル・アルデット　1943年
19．Garganta con arena　砂混じりの喉　DVD　歌：Adriana Varela　1993年

久々にライブコンサートを開催しました

横浜ポルテニヤ音楽同好会創立30周年記念

佐藤 光男（横浜市）

11月15日、池田みさ子とロス・アミーゴスをお招きし、横浜ポルテニヤ音楽同好会としては久しぶりのライブコンサートをオオハラ・ホールで開催しました。横浜ポルテニヤ音楽同好会は昨年末、創立満30周年を迎えました。その記念行事の一環として企画したものです。大勢の方々にお出でいただき、お陰様にて大変な成功裏に終えることができました。日本タンゴ・アカデミーからは、島﨑名誉会長、飯塚会長をはじめ多くの方々が横浜の地までお越しくださいました。皆様の厚いご支援に会員一同深く感謝申し上げます。

以前は、横ポルもライブ好き、パーティー好きでした。レココンを基調としていても、年２回、大小のライブを催していました。大勢の会員の好みは多様でした。そして、この頃はライブハウスはまことに少なかった。必然的に自前のライブコンサートが必要だったのです。しかし、会員の構成が変わり、環境が変わってライブに接する機会は次第に減ってきました。必要性が薄れてきたということでしょうか。そんなこんなで、もうここ６、７年こうした催物には縁遠くなっておりました。

当日になりました。池田みさ子とロス・アミーゴスの面々は気合いが入っていました。開演は２時なのですが、午前中にたっぷりとリハーサルを行いました。その間、会場に入ることは遠慮していたのですが、所用で覗くことになりました。そこには真剣さと張り詰めた気力、熱気がみなぎっていました。いい演奏が聴けそうだと予感した瞬間でした。

演奏が始まりました。「エル・レイ・デル・コンパス」、「フェリーシア」、「エル・チョクロ」、池田さんのピアノのリードと軽妙なお話で曲が進んで行きます。「ジュビア・デ・エストレージャス」はまさに手慣れたところ。「インビエルノ・ポルテーニョ」は気持ちが素直に入っていける音作りでした。「ケハス・デ・バンドネオン」では鈴木崇朗さんが繊細な音を探ります。「コントラバヘアンド」では東谷健司さんが聴衆をうならせ、周囲の楽器がそれを支えます。ご父君、池田光夫作曲の「二人だけの夜」はなんと静かな、そして情熱的な曲なのでしょう。

「ジェラシー」は多くの方が称賛の声を上げていました。吉田篤さんのバイオリンが素晴らしい。私はこの曲を２週続けて聞くことになりました。次の日曜日はタンゴ早慶戦でした。オルケスタ・オルテンシアの鈴木慶子さんのバイオリンは得もいわれぬ音を紡ぐ。両者は甲乙つけがたいものでした。日本の、男女二人のそれぞれ個性あるバイオリンの音、続けて聞けたのは何とも幸せなことでした。

ボーカルの金子なつみさんは横浜ポルテニヤ音楽同好会の会員です。いつもレココンでは個性的なタンゴを披露して下さる。しかしながら自分の会で歌うのは今回が初めてです。とても素敵な歌いっぷりを誇らしく感じたのは私だけではないでしょう。多くの皆さんがそういう感想を寄せて下さいました。「カセロン・デ・テーハス」、「ミロンガ・トリステ」は性に合った曲であると感じました。尚、研鑽を積み、得意なレパートリーにしていただきたいものです。

当日の会食の際、池田さんに多くの感謝、労い、賛辞の言葉がかけられました。そこで彼女が一番

強く反応したのは「情熱」という言葉でした。このことに私は少なからず感銘を受けました。一所懸命演奏を行ったという自負心がみなぎっているのです。本当に、よい音楽を聞かしてもらったものだと思いました。

今回のコンサートに際し、アンケートを実施しました。半数を超える方々に回答をいただきましたが、多くの、初めて横浜ポルテニヤ音楽同好会に来ていただいた方も熱心に回答くださいました。皆さんのご意向は、ライブ音楽を楽しみたいというお気持ちがとても強いということです。初期の横浜ポルテニヤ音楽同好会の姿をふつふつと思い出させます。最初に申し上げた通り、横浜ポルテニヤ音楽同好会はレコード音楽に偏らざるを得ないと考え、方針を漸次変更してやってまいりましたが、今また、ライブ音楽の実施をもっと研究しないといけないと思い至った次第です。

池田みさ子とロス・アミーゴスの演奏風景

アンケートのお願い

日本タンゴ・アカデミーも少子（新入会員減）高齢化（平均年齢上昇・退会者増）は激しいものがあります。

ここで今一度、当会設立の趣旨（タンゴの研究と普及）を振り返り、当会のあるべき姿・進むべき方向を考えてはどうかという声が高まっております。

ついては近日中に会員の皆様全員にアンケートの形で「ＮＴＡの今後のありかた・進路について」お考えをいただくことにいたします。じっくりとお考え置き下さるようお願いいたします。

第２回 港横浜タンゴ・フェスティバルを聴いて

丸岡 将泰（町田市）

2015年９月６日（日）午後、神奈川県立音楽堂で第２回港横浜タンゴ・フェスティバル（副題：港横浜★タンゴの星）が開かれた。当日は夕方から強い雨が予想されていたが、1,000人強収容のホールはほぼ満員の盛況ぶりだった。

この音楽祭は、オルケスタYOKOHAMAのマエストロ齋藤一臣さんが、BUENOS AIRESと同じ港町・横浜から多くの人にタンゴを知ってもらい、馴染んでもらおうとの思いで始められたと聞く。従って、主催は勿論齋藤さんが代表のNPO法人三田教育研究所である。

プログラムは、第１部で４楽団、第２部では３楽団がそれぞれの特徴ある編成で３曲ずつ演奏した。また、ダンスも６組が出演して、ダンスファンを楽しませた。司会は、当日本タンゴ・アカデミー会長の飯塚久夫氏が作曲者や曲の内容を絶妙な解説で紹介された。

プログラムの内容は、

第１部

＊オープニング　　横浜TANGO（オルケスタYOKOHAMAの編成で）

♪LA ÚLTIMA COPA　歌：藤田　翔

オルケスタYOKOHAMAの演奏スタイルはバイオリン４丁、バンドネオン３丁など11人によるティピカ構成でまずスタート。歌手・藤田はこの曲を日本語で、横浜港町を舞台にした孤独な男の心を力強く歌った。

＊懐かしのオルケスタYOKOHAMA

♪フリエンネ JULIENNE

♪行方知れず SIN RUMBO FIJO

♪おしゃべり EL CHAMUYO　ダンス：AKITO & aia

リードバイオリンを専光秀紀に譲った代表・齋藤一臣が「懐かしい昭和のタンゴの花道」を体現すべく、再びリードをとっての演奏は今までと変わらぬ安定感を示し聴衆をタンゴの世界に引きずり込み楽しませた。

＊専光秀紀コンフント

♪エル・インヘニエロ EL INGENIERO　ダンス：Toshiyuki & Kazumi

♪ジゴロ GIGOLÓ

♪グリセータ GRISETA　歌：KaZZma

フリオ・デ・カロのスタイルから学び結成され、土臭いバイオリン二丁による掛け合い等が持ち味のこのコンフントは静かな趣のある演奏であった。ダンスも呼吸の合った二人のステップは派手さが無くしっとりと落ち着いたもので聴衆を魅了していた。

＊キサス・タンゴ

♪ボエド BOEDO　ダンス：Marcy & Magi

♪ベベ B.B.

♪ダンサリン DANZARÍN

それぞれが個性を持った演奏をしているように見えて、まとまりのよい音を出していた。ブエノス・アイレスでのホセ・コランジェロから受けた影響も大きいようだ。この楽団は、2006年池田達則他３名で四重奏団として活動を開始、2012年よりタンゴショー「ブエノス･アイレスの冬」を上演、今年11月には第４回目が予定されている。

＊オルケスタ・アウロラ

♪デカリシモ DECARÍSIMO　ダンス：Araki & Mayumi

♪アディオス・ノニーノ ADIÓS NONINO

♪首の差で POR UNA CABEZA

ピアソラ作曲「アディオス・ノニーノ」、ガルデル曲の「首の差で」、いずれも独自のアレンジで芳醇な音を醸し出し聴衆を魅了する演奏であった。

このオルケスタは、ピアノの青木菜穂子とバイオリンの会田桃子をリーダーとし、常に古典タンゴからピアソラ曲等を独自のアレンジで幅広く演奏活動をしている。

第２部

＊ケーナとギターの夢

♪マリアは行く MARÍA VA　歌：南川紘子

♪我が愛のミロンガ MILONGA DE MIS AMORES

ダンス：Sumire & Tamai

♪コンドルは飛んでいく EL CÓNDOR PASA

フォルクローレ管楽器奏者・高橋マサヒロとギター奏者飯泉昌宏の二重奏。異ジャンルの二人がそれぞれの特徴を生かしての演奏で、高橋のサンポーニアと言う聞きなれない楽器と飯泉のギターは「我が愛のミロンガ」を独特の音で、皆さんお馴染みの「コンドルは飛んでいく」は勿論ケーナとギターの演奏で楽しませた。「マリアは行く」を歌った南川紘子はまだ高校生と言うから驚いた。次世代の藤沢嵐子になるか？

＊メンターオ

♪レデンシオン REDENCIÓN　ダンス：Shunsuke & Junko
♪蝶々 LA MARIPOSA
♪チャカブケアンド CHACABUQUEANDO

この楽団は、バンドネオンの池田達則とバイオリンの専光秀紀、コントラバスの大熊慧で結成。今回はいつものトリオに、更に宮越建政のバイオリンと松永裕平のピアノが加わりキンテート編成での演奏。ハーモニーの切れが良く呼吸のあった聴き応えのある演奏であった。演奏スタイルは、オスバルド・プグリエーセを継承している。楽団の名前はバンドネオン奏者・マエストロのロベルト・アルバレスが命名。

メンターオとはルンファルドで「名のある奴ら」を意味している由。

＊オルケスタYOKOHAMA

♪1900年代の低音弦 BORDONEO Y 900
♪ラ・ジュンバ LA YUMBA　ダンス：男性全員
♪盲の雄鶏 GALLO CIEGO　ダンス：全員

楽団のフルメンバー11人での演奏は、トップバイオリンの専光秀紀がリードを取り、オルケスタYOKOHAMAの普段のスタイルをしっかり出した安定感のある且つ豊かなサウンドであった。特に、「1900年代の低音弦」齊藤直樹のコントラバスが良い音を響かせ、「盲の雄鶏」ではバンドネオンとバイオリンの調和がタンゴの持つ哀愁や切れの良いプグリエーセスタイルの醍醐味を存分に味わわせてくれた。

ダンスは男性６人の切れの良いまとまった踊りと最後は６組の揃ったダンス、時にそれぞれの持ち味のスタイルで聴衆を堪能させてくれた。

＊オルケスタYOKOHAMAは、齋藤一臣が1982年「異文化に学ぶ」をモットーに結成。「シエテ・デ・オロ＝黄金の７人」と呼ばれているが、ブエノス・アイレスのタンゴの家にピアノを寄贈したり、86年にはプグリエーセ楽団と合同演奏会をするなど現地との交流を通じ、日本から多くの若き演奏家を研修に送りだした。現在もタンゴの研究や教育、普及に努めている数少ないORQUESTA TÍPICAである。

＊フィナーレ

♪待っています ESPERAR

この後更に、皆さんのアンコールに応えてLA CUMPARSITAで終演となった。

プログラムは、以上の様にTÍPICA編成有り、DÚO、TRÍO、QUINTETOと様々で、各楽団はそれぞれの特徴・持ち味を良く表し、聴衆はタンゴ音楽を堪能されたことでしょう。

またダンスは６組全てタンゴダンス選手権に参加されるだけの技量の持主ばかりで素晴らしい踊りを披露された。男だけのダンス、６組の群舞なども。群舞については今回の振付・監修の佐藤利幸氏は、２人ペアで踊るタンゴダンスには既にアンサンブルの要素が備わっており、更に６組で踊る多彩なバリエーションの群舞を楽しんでほしいと話されている。

＊プログラム最後の曲の演奏が始まる前に、このフェスティバル主催の齋藤一臣さんは、「普段のコンサートでは主に自分がお喋りしてリードしてきたが、今日は司会者にお任せし、私は一切お喋りしなかった。しかし最後に司会者から２分間だけしゃべっていいよと言われたので少しだけしゃべります」と前置きして、タンゴのオルケスタを持つようになったきっかけを次のように話された。「自分は大学時代タンゴバンドを引っ張ってきたが、タンゴ音楽が普遍的に続く音楽なのか、すたれていく音楽なのか、自分で確かめたい。そのために1982年BUENOS AIRESに行った。ブエノスのエセイサ空港から街に入る途中の道は戦車が一杯で、タンゴ音楽など微塵も聞こえない不穏な空気だった。後で気がつくとこの年は世界が注目したあのフォークランド紛争（アルゼンチンとイギリスとのマルビナス島の争奪戦争）であった。しかし街に入ると、プグリエーセ楽団など数楽団が演奏活動をしていた。この様な状態でもタンゴが生きている事を知って、アルゼンチンタンゴは不変の音楽であると確信し、タンゴ楽団を編成することを決心した。そして今日を迎えました。これからは自分は若い人達がこの音楽を益々育ててくれるよう見守っていきます」と。

この力強い言葉は、マエストロ齋藤一臣のタンゴ音楽に対する並々ならぬ決意と今日までの努力を裏付けたものであり、非常に印象深い言葉であった。

第14回　金沢蓄音器館 タンゴ・コンサート

― 盛況だったＳＰコンサート ―

笠井　正史

2015年10月31日（土）毎秋恒例の「秋の金沢で聴くタンゴ不滅の名盤」と題するＳＰコンサートが毎度お馴染みの金沢蓄音器館で開催されました。今年はその第14回目のコンサートでしたが、先頃北陸新幹線が開通した関係で、東京から往路約２時間半の近距離となり、例年以上の賑わいとなりました。出席者は総勢50名で、その中ＮＴＡ会員は、東京地区からは12名、東北地区３名、中部地区３名、関西地区２名、地元金沢地区３名の総勢23名となり、蓄音器館の会場は満席状態で、これは正に「北陸リンコン」ともいうべき盛況でした。特に、地元金沢の松本外司氏のご尽力に負うところが大きな支えとなったことが特筆されます。

今年もコメンテーターは日本タンゴ・アカデミー名誉会長の島﨑長次郎氏が御自らＳＰ21枚（実際はその他に７枚持参されたため合計28枚とか）を持っての登場で、次の21曲を披露されました。

秋の金沢で聴く“タンゴ不滅の名盤”

構成／解説：島﨑長次郎

◆「ヨーロッパの哀愁をつづった人びと」

（1）	“PLEGARIA”	(1927)	Orquesta Bianco-Bachicha
（2）	“SEREI FELIZ COM O TEU AMOR”	(1938)	Black Melody Band
（3）	“RECUERDO”	(1933)	Orquesta Manuel Pizarro

◆「世界を駆ける“ラ・クンパルシータ”の競演」

（4）	Orquesta Típica Brunswick	(1928)	ベルギー
（5）	The Castillians	(1927)	米国
（6）	Tani Scala Orchestra	(1939)	フランス
（7）	Tito Skipa acompañado por Orquesta Típica Víctor	(1932)	イタリア
（8）	Yoko Kuroki	(1952)	日本
（9）	Juan D’Arienzo y su Orquesta Típica	(1951)	アルゼンチン
（10）	Carlos Di Sarli y su Orquesta Típica	(1955)	アルゼンチン

◆「古き佳き時代を偲ばせる小編成楽団の魅力」

（11）	“EL LLORÓN”	(1936)	Roberto Firpo y su Cuarteto
（12）	“CANARO EN PARÍS”	(1927)	Francisco Canaro y su Quinteto Pirincho

◆「針音を越えて... いま蘇る“往年の名盤”」

（13）	“FELICIA”	(1927)	Osvaldo Fresedo y su Orquesta Típica
（14）	“A LA LUZ DEL CANDIL”	(1927)	Roberto Firpo y su Orquesta Típica
（15）	“VIEJO CIEGO”	(1928)	Francisco Canaro y su Orquesta Típica
（16）	“HONOR GAUCHO”	(1938)	Canta: Agustín Magardi
（17）	“MANDRIA”	(1927)	Canta: Rosita Quiroga
（18）	“MATALA”	(1930)	Canta: Carlos Gardel
（19）	“EL ARRANQUE”	(1934)	Julio De Caro y su Orquesta Típica
（20）	“NUNCA”	(1930)	Francisco Lomuto y su Orquesta Típica
（21）	“JULIENNE”	(1927)	Orquesta Típica Víctor

このＳＰレコードコンサートは休憩時間を挟んで３時間半に及ぶものでしたが、普段滅多に聴けない曲目の展開で参加者は元より蓄音器館の館長やスタッフの皆さんにも十分満足頂けたようでした。終了後は宿所である最寄りのＫＫＲホテル金沢にチェックイン、暫し休憩後地元近江町市場内「口福」で夕食、その後、大多数はお決まりのカラオケで打ち上げ、翌日は地元西川正一氏の案内で金沢城と、名物「雪吊り」の設営を見学する観光客でいっぱいの兼六園を散策しました。午後は東廓茶屋を見学し、近江町市場近辺を散策後、名残を惜しみつつ金沢駅で解散、それぞれ帰途につきました。

“アルゼンチン・タンゴ”その魅惑の世界を楽しむ

―真鶴タンゴ・ライブコンサート―

中村 尚文

出　演：アストロリコ四重奏団＆KaZZma
バイレ：エンリケ＆カロリーナ
日　時：2015年10月18日（日）14：00～16：00
場　所：檜チャリティーコンサートホール
主　催：アルゼンチン・タンゴ実行委員会
企画・監修：日本アルゼンチン協会
日本タンゴ・アカデミー
日本アルゼンチンタンゴ連盟

真鶴駅から急な坂を登り、斜面に広がった吉祥院檜チャリティーコンサートホールは、眼下に相模湾を望む景勝の地にある。さらに当日は秋晴れの絶好の日和となり、東京駅から２時間かけてやってきた甲斐があるというものである。ホールは吉野の樹齢200年の大檜と、地元箱根丹波の檜を利用し、日本古来の木組みと漆喰壁を存分に生かした造りとなっている。檜の温もりを肌で感じて貰えるようにと、会場には靴を脱いで入る。定員300の席はすでに殆んどが埋まっていた。主催者側の発表によると、関係者スタッフを含めて320名の来場ということだった。

開演前のセレモニーは実行委員長、真鶴町長の各挨拶、湯河原町長のメッセージと続き、いよいよ演奏がスタート。司会は飯塚日本タンゴ・アカデミー会長の軽妙な話術で進行。第１部は「El choclo」から始まり、４曲目の「El adiós」はKaZZmaの歌、間奏部分に門奈さんの小粋なバンドネオン装飾がキラリと光る。６曲目フアン・サンチェス・ゴリオの「Bendita nochebuena（幸せなクリスマス）」はバンドネオンのバリアシオンが圧巻。休憩を挟み、名古屋から駆けつけたエンリケ＆カロリーナのペアによるバイレが２曲楽しめた。

第２部は「Patotero sentimental」でスタート。次の「Silueta porteña」は、アレンジに注目、なかなかの出来栄え。３曲目は門奈さんの自作「Los vínculos（絆）」で自演快演。４曲目からは５曲連続でトロイロの名作が揃い聴く者を魅了した。KaZZmaの歌（Barrio de tango、Romance de barrio、Sur）も、最近とみに聞き応えのある男性歌手になりつつあるが、この日はマイクのセッティングが悪く、音がこもって声にキレがなく、本人もさぞ残念であったろうと思われる。アストロリコの演奏は、流石にメンバーも不動で長く活動してきているので、特にアンサンブルは素晴らしかった。アンコールは「La cumparsita」で幕を閉じた。

コンサートも無事終了し、打ち上げ二次会は真鶴駅前にある福寿司に移り、地元スタッフ、出演者全員、島﨑日本タンゴ・アカデミー名誉会長を始め関係者など総勢40名を超える参加者で場は大いに盛り上がり、アッという間に２時間は過ぎ、東京組は真鶴発19時18分の電車に乗り込み帰路についた。

第３回 アルゼンチンタンゴ早慶戦

笠井 正史

一昨年、昨年に引き続き今年もアルゼンチンタンゴ早慶戦が11月22日（日）霞が関のイイノホールで開催された。主催は昨年同様「アルゼンチンタンゴ早慶戦実行委員会」であるが、今年はこれを日本タンゴ・アカデミーと株式会社ラティーナが後援する形となった。イイノホールは500席の会場であったが、コンサートの概要が11月12日付の読売新聞朝刊で「タンゴ早慶戦今年も」と題して報道されるや、あっという間に満席となり、結局「完売につき...」と昨年同様お詫びをすることになって仕舞った。

開催当日開演時間の13時半には会場は既に満席となって演奏を待ち受ける状態となった。この日会場に駆けつけたのは早慶両大学の卒業生ばかりではなく、タンゴ好きの人たちが、全国各地から詰めかけた。毎度のこと乍ら大半は高齢者で、ロック世代やその前のフォーク世代とも異なる、その昔ラジオによりタンゴの愛好家となった人達であった。

13時半に日本タンゴ・アカデミー飯塚久夫会長の司会、福川靖彦実行委員長の挨拶でコンサートが始まり、先ず最初はこの企画の牽引役である、現在本邦唯一の「現役」オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダが“エル・アランケ（始動）”に始まる７曲を演奏した。オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダは総員18名が交互に舞台に上るという快挙で、この日が「タンゴ早慶戦」であることを印象づけた。

ワセダの次は中央大学ＯＢのオルケスタ・ティピカ・ルナで、タンゴ早慶戦には初登場で、形は友情出演ということであったが、卒後相当の年齢を経ているとは思えない力強い演奏を披露し、今後もまた出演を期待される内容であった。曲目は“オホス・ネグロス”に始まる７曲であったが、最後の７曲目は“マエストロに捧ぐ”を取り上げており、新しい曲目にも積極的に取り組んでいる一面が窺えた。

オルケスタ・ティピカ・ルナに続いては再びワセダの登場であったが、今度はワセダＯＢで今も活躍を続けているロス・ポジートスで、“ロカ（狂女）”他６曲をコントラバス奏者のマエストロ鎌田剛以下10名で演奏し、その中２曲にアキト＆アイアというカップルがダンスを披露した。

ここで休憩を挟んだ後、星野睦郎実行副委員長が大会企画実施の経緯を説明した。後半の最初はピアニストでＮＴＡ会員の大石豊率いる慶應義塾大学ＯＢのＫＢＲタンゴ・アンサンブルが登場し、アストル・ピアソラ作曲の“プレパーレンセ（用意！）”で始まる７曲を演奏したが、その中４曲は昨今注目のカントール柏原誠の歌が入り、ともすれば歌入りタンゴを敬遠される人達にもその甘く切ない歌声は届いたようである。何でも柏原誠には以前より「追っかけ」がいたそうであるから、人気の程が窺われる。

ＫＢＲタンゴアンサンブルの後はマルティン＆ユカのダンスで２曲、アグスティン・バルディの“ガジョ・シエゴ”とチャルローカディカモ合作の“わが故郷に勝る所なし”を踊った。

さて、この日のファイナルステージは、スペシャルゲストとして、ＮＴＡ会員でもある池田みさ子が先頃結成した、日本初の女性のみで構成された“オルケスタ・オルテンシア（あじさい）”のデビ

ューとなった。メンバーは：

マエストラ・ピアノ：池田みさ子

バンドネオン：川波幸恵、海上亞佑巳（元オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ）

バイオリン：鈴木慶子（ＫＢＲタンゴアンサンブル、ＮＴＡ会員）、瀬尾鮎子

コントラバス：佐藤梓（元オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ）

文字通り本邦初公開というか初演奏で次の６曲を続けて演奏した：

先ず１曲目はお馴染みの“パリのカナロ”、これに続いて池田みさ子のピアノをフィーチャーしたオスマール・マデルナの“ジュービア・デ・エストレージャス（降る星の如く）”の華麗な演奏が披露された。

３曲目は急ごしらえのセンターマイクの前にバイオリンの鈴木慶子が登場し“ジェラシー”を見事に独奏して喝采を浴びた。

この後の４曲目はがらっと雰囲気が変わり、日本歌謡曲の名曲“津軽海峡冬景色”が本格的にタンゴにアレンジされて演奏された。この曲は他楽団でも時折取り上げられているが、オルケスタ・オルテンシアでは原曲のイメージを残し乍ら、石川さゆりの歌う原曲とは異なるタンゴの曲として新規に紹介していた。

５曲目はフランシスコ・カナロの“コラソン・デ・オロ（黄金の心）”、６曲目はアストル・ピアソラの“インビエルノ・ポルテーニョ（ブエノスアイレスの冬）”、そして最後の７曲目“タンゲーラ”と続き、「オートラ！」の掛け声に応えて“ラ・ウルティマ・コーパ（最後の杯）”が、先程ＫＢＲで歌った柏原誠をゲストに迎え、初めての顔合わせとは思えない出来栄えで、会場一杯の拍手で幕が下りた。

幕が下りた後も拍手は続き、再び幕が上がると、今度は出演者ほぼ全員が舞台に再登場して、当然のこと乍ら曲目は“ラ・クンパルシータ”の合同演奏でお開きとなった。

こうして第３回アルゼンチンタンゴ早慶戦は好評裡に終えることができたが、今年もチケットを入手できなかった人達に「またの機会」を作るべく、来年も第４回として開催することが本決まりとなり、実行委員会では既に2016年11月27日（日）に、今回と同じ霞が関のイイノホールを予約取付け済みとのことである。

出演者全員によるフィナーレ

愛好家インタビュー

門奈 紀生さん（京都市）（バンドネオン奏者）
麻場 利華さん（京都市）（バイオリン奏者）

INTERVIEW

聞き手　宮本 政樹

＜門奈さんは1991年、楽団「アストロリコ」を結成。日本人離れしたタンゴの感性に、本場アルゼンチンでもマスコミや聴衆から「奇跡」と驚嘆される。「黄金の左腕を持つバンドネオン奏者」の異名のとおり、琴線に触れる情感豊かな演奏で聴衆を魅了し、温厚な人柄と品格を備え、演奏するカッコ良さに、人は彼を「タンゴ界の貴公子」と呼ぶ。「アストロリコ」は、最初は門奈さん以外全員がタンゴ未経験者で、タンゴ演奏家を増やすため常に新メンバーは未経験からの参加。麻場さんとピアノの平花さんは創立以来のメンバー。2015年11月19日、京都のソルーナ事務所にてインタビューを行う。＞

1　オスバルド・ルジェロのバンドネオンの音色に衝撃を！

門奈　1940年東京生まれの横浜育ちです。母がたまたまクリスチャン系の大学だったため、子供の頃から英語で歌う讃美歌に慣れ親しみ、英字新聞を読むような当時としてはハイカラな叔父もイギリス民謡やフォスターの歌、英国や米国の国歌なども英語で教えてくれて、一緒に歌ってました。小学校の５、６年生の時、中学校の教室から聞こえてきたブラスバンドの演奏に最初の衝撃。トランペットで顔を真っ赤にして、ホッペを膨らませている姿がカッコ良くて感動し、中学に入ってブラスバンド部のトランペット奏者。３年の時の横浜の国体開会式では、天皇陛下の前で、横浜中のブラスバンドが総勢1,500人。演奏人数が多いので５人以上の指揮者で合図を同時に出すのですが、一緒に演奏しているはずの音が音速の具合でずれて聞こえるんですね。かなり混乱しましたが、楽しい経験でした。

中学３年の始業式の日に転校生が、「タンゴクラブに入らないか」って言うので、英語の単語クラブと思って「入りたい」と答えて、家に誘われて遊びに行ったら、タンゴのレコードがいっぱい。その日に何枚か貸してくれたので、家に帰って聞いたのが初めてのタンゴ。ディ・サルリ、ダリエンソ、ドナート、トロイロ。中でもプグリエーセ楽団のルジェロのバンドネオンのソロの音を聴いた時に、ガァーンと来た衝撃。SPレコードなのでどんな楽器かも分からず、そのバンドネオンという名前と出てくる音がキラキラしていて夜のネオンサインを連想しました。

高校ではブラスバンド部がないので、そのタンゴの友達と一緒にハンドボール部と映画研究部に入部。高校生部員には、映画館が宣伝のためにタダで見せてくれるので、洋画ばっかり観ていましたね。高校３年の頃は映画とタンゴ喫茶。その頃は生演奏もあって、日曜日にはその友達と二人で銀座の「コロンビア」で一番前に座って、一日中聴いていました。午前中は神保町の「ミロンガ」、

午後からは「コロンビア」。日曜は昼も夜もやってましたから。

２　タンゴのラジオ放送とタンゴ喫茶へ

―　だんだんタンゴの世界にのめり込んで来ましたね。当然ラジオのタンゴ番組なども聴いていたでしょうし、レコード・コンサートなどにも行きましたか？

門奈　横浜のレコード・コンサートに行ってました。ラジオ放送では「リズムアワー」など聴いてましたが、その頃は留守録音が出来ないので、学校を早退して、４時には帰って来てリアルタイムで解説をノートに取りながら聴きました。20歳ごろから、将来の行く先を考えながら、サラリーマンはやりたくないし、どうしようか、何が出来るんだろうか？　と、タンゴ喫茶でずーっと考えていたら、トロイロの「インスピラシオン」でチェロのソロが耳に飛び込んできたんです。あとで知ったんですが、ピアソラの編曲だそうですね。「あー、いいなぁ！チェロやりたいなぁ！」と思ったんですが、友達が「お前、チェロやるなら、バンドネオンやれ！」って言うんです。「チェロは今からでは間に合わない、どうせやるならバンドネオンにしろっ！」と。バンドネオンは難しいと聞いていたんですが、しばらく考えて、思い切って「バンドネオンをやろう！」と決心しました。

３　いよいよバンドネオンに挑戦

―　やろうと決心してから最初はどなたかに習いに行ったんですか？

門奈　どこに行ったらいいか分からず家で手探りの練習していたところ、友達が新宿で教えてくれるところがあるからと、楽器をもって一緒に行ったんです。歌舞伎町の「女王蜂」というキャバレー。そこに行ったら、「これ着て舞台にすぐ上がれ！」と言われ、スイングバンドの人達が楽屋に降りて来て、此処では練習できないから、交代でステージに上がらされ、ぶ厚い楽譜を渡されて「何番を開け！」と。そこで教えてくれるのではなく、ただ座って弾いている格好をしろという事なのです。まだ、ドレミファぐらいしかわからず、楽譜でちょっとでも弾けるところを探して待っているんです。当時、バンドは人数で契約をしており、バンドネオンやバイオリンは３人いたら１人、２人が弾ければ、３人目はそれほど弾けなくてもよかったのでしょう。この頃は歌舞伎町だけでもタンゴバンドがいくつもありましたね。

―　それで休憩時間の楽屋ではバンドネオンは教えてくれないのですか？

門奈　教えてくれることはほとんどないです。テーブル囲んでポーカーとかカードがすぐ始まりますから、自分は今ステージでやったもの、次にやるものを持って来て、少しでも弾けるように手探りで練習していました。苦しくはなく、それはそれは楽しい毎日でした。一日ごとに弾けるものが多くなって行くわけですから。

―　当時はちゃんとした場所で正式にバンドネオンを教えてくれる人はいなかったのですか？

門奈　100％いなかったと思います。だいたい毎日仕事があるから、そんな暇がないんですね。本番で隣に座る先輩の音を見聴きしながら覚えて行く。この世界では昔からそのような習得方法が、慣習として続いて来たようですよ。つまり、隣に座る先輩が先生になりますよね。

―　昔はバンドマンと言われた楽団の人達は、楽屋裏とか、仕事を終えた後には、賭けマージャンやカードのギャンブル生活をしていた人が多かったようですが、門奈さんのイメージはそのような世界とはかけ離れた、品行方正で真面目な演奏家。それに我々のタンゴ仲間からは、温厚な人柄と気品溢れる存在として、「タンゴ界の貴公子」と呼ばれていましたが、門奈さんはそう聞いておられ

ますか？

（ここで麻場利華さんが登場） 私達はよく、お客様が言われるのを耳にしますよ。門奈さんはカッコイイからどこへ行っても「昔からの女性ファン」が現れるんですが通常、異性ファンが多いと同性に嫌われがちやないですか。門奈さんは「昔からの男性ファン」も多くて守備範囲は老若男女、下は４歳児から上は90歳、いや、命ある限りまで。デビュー公演の直後、女性ファンの方が私達女性メンバーに「私の星の王子様なんです」とキッパリ！　今でも「あんな風に年を取りたい」と憧れる若い男の子達、いっぱいいますわ。共演した男性アーチストも皆、そう言われます。（門奈さんはテレ笑いをしながらただ沈黙）

＜麻場利華さんは「アストロリコ」の第一バイオリン奏者。その前身の楽団「京都セイス」時代からのメンバーで、クラシック界と宝塚歌劇等ポピュラー界で研鑽を積んだ、明るい性格の人気者。演奏会での司会者も兼ね、話が面白く「アストロリコ」のエンターテイナー的存在。世界タンゴサミットではアントニオ・アグリやウーゴ・バラリスから絶賛される。またタンゴ番組（FMラジオ）のDJを４年間務めた。＞

４　アストロリコ誕生と名前の由来

―　門奈さんは人間の理想像ですね。だから「アストロリコ」は門奈さんの存在がすごいんですね。楽団設立の時に「アストロリコ」の名前に門奈さんの名前を付けた方が良かったのではないですか？

門奈　みんなそう言うんですけどね。タンゴを次世代に広めなければいけないという事で作ったのが、「アストロリコ」なんで、僕で終わってしまうのではいけないという初めからの想いがあったんです。門奈と付けてしまうと僕が死んだら無くなってしまう訳です。「アストロリコ」と言う名前だけだったら、誰がリーダーでもいいわけです。それは楽団を作る前から考えていた事で、初めから皆に言ってました。

麻場　デビュー当時、応援者の方達も皆、「門奈紀生を付けてくれ！」って何度も言うてはったし、私達からもしつこくお願いしたんですけど。その９年後、門奈さんが60歳の時に心筋梗塞で倒れた時のこと。門奈さん不在の中でも、「アストロリコ」のまま、つまり看板を書き換える必要がなかった時は、「ほらね、僕が言った通りにしていて良かったでしょ」って。

門奈　とにかくびっくりしたのは、「アストロリコ」で初めてアルゼンチンに行った時の演奏会で、司会者が名前の由来を言った時に、聴衆のウワァーという歓声が広がり、さらに長々と説明をするんですが、拍手喝采でしたね。

＜アストロリコの名前の由来は、門奈さんのスペイン語の造語で、アストロ＝天体、リコ＝豊かな（英語のリッチ）で豊かな天体、すばらしい宇宙という意味。この中に、門奈さんが尊敬するタンゴ史上最も重要な３人のバンドネオン奏者兼作曲家が入っている。アストル・ピアソラのアス、アニバル・トロイロのトロ、レオポルド・フェデリコのリコ。＞

麻場　アストロリコを紹介する司会者の口調ときたら（笑い）。どの司会者も名付けた本人を前にして、さも自分が付けたかのように得意げに「どや顔」で言うからおもしろい。あんたが付けたんとちゃ

うやん、ウケルわぁ。タンゴサミット・ロサリオ大会とトルコのマルマリス国際タンゴ祭から同時期に招聘を受けてツアー予定やった時、門奈さんが心筋梗塞で心肺停止の重体になられたんで、出演を辞退したんです。そしたら実行委員会が「代役に門奈さん級のマエストロを用意して「門奈さんへのオメナーヘ」にするし、辞退せんといてって。「オメナーヘ」って……死んでへんのに！（笑い）そないに熱望されるて光栄なことやし、門奈さん不在で勇気を出して当初の予定通りにツアーを決行したんですが、そのサミットのステージのアストロリコ紹介が、またまたウケル内容。緞帳裏でスタンバイして聞いていたら「アストル・ピアソラのアス、アニバル・トロイロのトロ、ドミンゴ・フェデリコのリコ！」って言わはったんです。思わずメンバーみんな、キョトン !?　門奈さんが名付けた名前が「門奈さんへのオメナーヘ」で、なんでこうなったんや！って。ドミンゴ・フェデリコはロサリオ出身だから現地受けするために、主催者が勝手に変えてしまったみたいです。（笑い）

— どちらにせよ、「アストロリコ」とはいい名前を付けましたね。ドミンゴ・フェデリコもいいですよ。

門奈　最初は、名前は大きくしなきゃいかんと。ティピカ・東京は東京でしょ。こっちの関西の名前を付けてもちっとも大きいと思われないし、「アストロリコ」の前身は、「京都セイス」（京都の６人）、これは京都のアマチュアバンドだから京都の６人でいいじゃないかと。今度はプロのバンドだから、大きな名前にしなきゃいかんと考えました。岩崎浤之さんはタンゴコスモス（宇宙）と言う名前で、いい名前を付けられたなぁ。ほかに大きなイメージはないかなぁ。アストロ（天体）ならいいかなと思い至り、あとはピアソラと、トロイロと、フェデリコの３人のバンドネオン奏者が、僕にとって地球という天体を豊かにしてくれたという意味を持たせました。

５　「タンゴクリスタル」での演奏

門奈　アストロリコ以前にやっていた「京都セイス」と並行して、「タンゴクリスタル」から関西でやる時、あるいは岡本昭さんが都合で出来ない時に手伝ってくれと言われまして、僕なんかでいいのかなぁと思いながらも、一時の代役だったらと限定付きで手伝い始めたら、忙しいバンドでね、あの頃は全国に行ってました。そのうち京都の自宅にいる時間より彼らと一緒にいる時間の方が多くなってしまった感じです。

— だんだんタンゴが復活して盛んになって来た頃ですね。

門奈　そうですね。「タンゴクリスタル」の小松夫妻の良いところはあの頃の誰もがやっていない、手打ちのコンサート、つまり自分たちが企画をして、会場をとったり、チラシを作って案内出したりして、積極的にタンゴコンサートをしていた事です。「クリスタル」が誕生する前の時期に、京谷さんと小松さん夫妻がやっていた京谷弘司トリオというのがあって、それは素晴らしい演奏でした。なので京都でも是非、京谷トリオを皆さんに聴いて欲しいと思って彼らに来てもらったことがあります。また、京谷さんから初めてのリサイタルの招待を受けて池袋のサンシャインへ聴きに行きました。その時、新人だった山崎美枝子さんが歌った曲がピアソラの「白い自転車」や「迷った小鳥たち」で、当時としては非常に積極的な“攻めの姿勢”のコンサートを展開していて、凄いことをしているなって改めて感心したんです。藤沢嵐子さんと、柚木秀子さんと、僕と３人並んだ席になっていて、藤沢さんが、「あんた何でこんなところ（客席）にいるの、あっち（ステージ）にいなきゃいけないじゃないの」と言われました。（笑い）懐かしいですね。京谷トリオは、本当にいいバンドだったので解散を知った時は本当に残念でした。

— 私は門奈さんの演奏を、クリスタルの楽団で新宿のミノトールでよく聴きました。阿保郁夫さん

や柚木さんが一緒に歌っていましたね。その時ですね、小松亮太さんが弟子入りしに来たのは、高校生でしたね。

門奈　当時中学生の亮太さんに最初は勉強を教えていたんですよ。その頃、ミノトールに聴きに来て「バンドネオンに興味を持ったらしいので教えてやって欲しい」と言われました。「小さい頃から色々な楽器を習わせたけど何やっても続かない」と、普段から真知子さんが良く言っていたので、せっかく自分からやりたいと思ったバンドネオンだけは、「嫌いにならないようにしないと」と思って、とにかく本人がいやにならずにバンドネオンを続ける、ということを一番心がけました。僕たち大人が、本番が終わって夜帰って来るまで、一心不乱に音を出していたみたいです。だから上達も早かったですね。

―　彼も努力しただろうけど、才能もあったでしょうね。門奈さんはその才能を見抜いてましたか？

門奈　いやぁ、見抜くというよりメキメキ上達するので誰でもわかるでしょう。僕自身の経験から早くステージに上げて実戦の中で育てたかったので「もう一緒にやったらいいんじゃない」って親たちに言ったら、「じゃ、一曲何か仕上げてから」という事になり、参加できる曲数もどんどん増えて行きましたね。もちろん努力もしましたが、集中力のある子でね、それは凄いです。若くてどんどん上達する亮太さんと一緒に演奏するのは、とても楽しかったです。バンドネオンは突発的に故障する楽器で、短い時間にすぐ修理してステージに戻らないといけない場面があるのですが、そういう時の応急修理なんかも、新しい方法を見つけては亮太さんにも伝えたり、タンゴやバンドネオンのいろいろな事を話したり、彼はスポンジのように吸収していきとても頼もしかったです。それで彼も育ってきたから、僕はクリスタルを辞めて京都に戻って来て、「アストロリコ」を旗揚げしたわけです。

―　でも結果的には良かったですね、京都をホームベースにして、自分の楽団を作って。東京でやるよりも京都でやった方がむしろ良かったでしょうね。

門奈　何よりも自宅がある地元ですから、当然自分のペースで活動できるので。1991年の暮れですね、結成したのは。1992年にデビューしました。

6　若い後継者の指導と演奏会での試み

―　門奈さんが良く言われるように、若いバンドネオン奏者を増やさなければならないという事ですが、バイオリンやピアノと違ってバンドネオンは最初から教え込んで一人前にするのが大変でしょうが、後継者をよく育てているのは凄いと思いますが、何か特別な指導方法があるんでしょうか？

　門奈さんは人を教えるのにあまり厳しくしないように思えるのですが、それでも若い人がたくさん育ってくるのは、皆、門奈さんを信頼して、門奈さんについて行けば間違いがないんだと言う信頼感があるからでしょうか。

門奈　指導方法って、特別に何もないですけど。なにしろ僕は「君やらないか？」って、勧めたことはないんです。やりたくて来ているので、亮太さんの時と同じように、それを止めないようにしなければいけない、嫌いにならないように、は心がけてます。ですがバンドネオンという楽器は、最初の段階から結構辛い試練があるので、それを乗り越えられるかは本人の情熱次第です。

―　そして常にレギュラーとしてオルケスタを編成できる人員を揃えているのがすばらしいですね。東京でもなかなかないですね、寄せ集めが多くて。

門奈　オルケスタでやる機会は余りにも少なすぎる。今は年に３回ぐらい、京都、神戸と大阪で。大

阪は本願寺北御堂という有難いお寺の仏教壮年会主催なんですが、デビューした翌年からずっとです。23年前にお寺でタンゴコンサートなんて非常に斬新でしたね。それが毎年欠かさず、もう23回。凄い事ですね。

— 若い世代の演奏家がもっと増えて来れば、若いタンゴファンも増えてくるでしょうね。

門奈 出来たらまともなタンゴを演奏して欲しいと思いますね。

麻場 以前、新しい試みとして、私が昔から懇意にしているジャズ界ではすごく有名な人で天才ピアニストがタンゴに挑戦したいと言う事で、お互いのフィールドを広げるために、門奈さんにお付き合いしてもらってタンゴ界２名、ジャズ界２名のジョイントユニットを実験的にやった事があるんです。基本はあくまでもタンゴ、その中で彼らが自由になるジャズ的なアドリブシーンもある、というスタイル。彼はタンゴのモチーフを使って実に見事に融合させました。最近、タンゴそのものを崩して「何でも有り」的なアドリブに行く傾向が出て来たので、どうもこの活動を勘違いされてしまったのかなぁと思ったり……。確固たるタンゴの芯を持ったマエストロがするパリージャは次元が違うと思うんです。ごちゃ混ぜになっている傾向があるから、門奈さんが、「まともなタンゴを、つまりはタンゴの魂を感じる演奏をして欲しい」と言わはるんです。自由なインプロでも、タンゴの魂を感じなければタンゴではないでしょ。

— インプロの仕方もあるんでしょうね。

麻場 ジャズ界の方々は血のにじむ思いでインプロビゼーションを訓練してきておられる。だからこそ、ジャズメンでない立場で軽々しくインプロやります、と言いたくないなぁ。と同時に、タンゴを演奏するにしても同じです。ジョイントユニットのジャズピアニストも、タンゴの奥深さを痛感、お互いが敬意を持って接していました。サルガンは「タンゴには絶対インプロは無い！」って言ってましたね。

— サルガンがそう言っていたのですか。

門奈 サルガンがタンゴについて書いた分厚い本がありますが、はっきりとサルガンが発言しています。「タンゴにはアドリブは存在しない」って。サルガンの演奏はとても軽やかで、アドリブ的な遊びを入れながら演奏しているかのように聞こえてしまいますが、サルガン＆デ・リオの二重奏、オルケスタの演奏、キンテート・レアルでの演奏、ピアノ・ソロの演奏、すべてやっている内容は同じですよ。

麻場 アルゼンチン人の辛口タンゴファン達が日本人の演奏と見破ることができず驚愕した門奈さんのタンゴに少しでも近づけるように、そして「これがタンゴだ」と感じる王道を目指してやって行きたい。門奈さんが20歳代で活動されていた「平野洋輔とロス・タンゲーロス」みたいに。アルゼンチンから来日中のタンゴプレーヤー達が偶然、タンゲーロスの演奏を聴いていて「君たちがやっているのがタンゴだ」と言ったという逸話のように、自分もなりたいですよね。

門奈 彼らにとって地球の裏側で普通にタンゴをやっている事にビックリしたようです。ビネリさんと会食をした時の話ですが。移民の挫折を味わったことがない日本に居る日本人にタンゴの心がわかるのか、疑問だったようです。確かに移民の挫折感の体験はないかも知れないが、原爆を落とされたり、故郷そのものが焼野原になり国が無くなった経験はアルゼンチンはしていないでしょう。戻るところを失い、そこから這い上がるしかない心境は推察できると思いますよ、と言うと彼は深く受け止めた様子でした。

７　クラシックの交響楽団との競演

―　門奈さんはフィルハーモニーとのソリストとして出演されてますね。名古屋フィル、新日本フィル、大阪シンフォニカ、札幌交響楽団などでやったのは、画期的な試みだと思いますが、コンチェルトみたいなものでやったのですか？

麻場　バンドネオン協奏曲ではないです。「ミサ・タンゴ」というミサ曲です。アルゼンチン人のバカロフの作曲でミサ曲としては大作で、大合唱団に、大オーケストラに、歌のソリスト、そこにバンドネオンのソリストが入るんです。門奈さん本人は絶対言わないから、私が勝手に言わせてもらいますが、井上道義さんと言う指揮者の方は、すぐに門奈さんを気に入ってしまったんです。井上氏はクラシック界ではスター性があって天才肌の人なんで、熱狂的なファンが多い方なんです。彼が公演後の関係者パーティーの時に「もう、私は門奈さんに嫉妬しましたよ」と。背中で感じるファンの人達の視線を足元から、門奈さんのバンドネオンの音色が全部持って行ってしまった。「本物のプレーヤーに会いました」と。井上さんが最初、名古屋フィルでやって大変気に入って、札幌、東京、大阪と続いたのです。

―　それはすばらしい経験でしたね。今度はピアソラのバンドネオン協奏曲でやったらいかがですか？

門奈　いやぁー、あんな大曲、もういいです。寿命を縮めたくないですよ、これ以上。（笑い）

８　タンゴ・アカデミーの問題点と要望

―　門奈さんのインタビューと演奏がＢＳテレビで放送されたそうですね。後から知ったんですが、放送日の11月10日は我々はちょうど秋田の東北リンコンに行っていたので、観られなかったですね。知っていたら誰かに留守録を頼んだんですが。

麻場　え！ご存じなかったんですかぁ。それは残念！　ＮＴＡの幹部の方にはＢＳ放送のこと、放送日までご案内してありましたし、今流行のフェイスブックでもＮＴＡの幹部の方はご存知のはずです。タンゴがどのように取り上げられているかはＮＴＡとしてチェックするべきと思いますよ。関西の会員さんには、関西リンコンの時に、神戸の山本雅生さんがしっかりと告知して下さったんです。

門奈　この前神奈川県でやったコンサートのことですよね。ＢＳ７chの音楽番組なんですが、ライブ収録して、公演後にインタビュー収録。僕の悪いところですが、おしゃべりが苦手なんです。でも反響が思いの外大きくて、やって良かったと思います。あの番組を観て「こんなバンドがあったなんて知らなかった！」って事務所に何件も電話があったらしいです。番組のお陰で、ホームページで調べてＣＤも買ってくださったり、嬉しい反応でしたね。昔からタンゴ好きで、とおっしゃるらしいんですが、日本タンゴ・アカデミー会員さんじゃないようなんですね。詳しくないけど聴くのは好きという方が圧倒的に多いのはわかりますが、もっと気軽に入会していただけるといいのに。

麻場　アストロリコのファン層は中高年が中心みたいなんで、インターネットで熱い思いを表現したりすることに用心したり、そもそもネットに繋がっていなかったり、やないか思います。若い年代の人達のネット上の拡散の威力は凄いですよね。色々問題視されているSNSやけど、こういう場面ではものすごく効果的。うちはメディアに出ても、その時だけで終わってしまいそれ以上は広がらないから困ったもんだなぁと思って。でも嬉しいですやん、門奈さんの生演奏に触れたわけやのうて、テレビというフィルターを通して聴いただけやのに「スゴイ」って電話までしてくれはるんやもん。

門奈　そのような人に情報を提供する方法をタンゴ・アカデミーが考えてくれたら有難いと思いますね。

―　今、アカデミーのスタッフも若手がいないもんですから、ホームページが良くなってないんですね。弁解になりますが。アカデミーもその方面で新たなシステムを考えなければいけないんですけどね。正確な情報を速く広く伝達する手段を。

麻場　アカデミーは、レココン系の方が多いんですか？　関東公演の時など、アカデミー会員さんの参加率は低いように感じました。主催者さんの要望もありますが、ほとんどのお客様がタンゴ初体験の方なんで、レクチャー的にならざるを得ないのが現実で、本音は黙々と演奏だけしていたいんですよ。往年のタンゴファンやアカデミー会員の方々も家族連れで演奏会に来て下されば、お子さんとか、お孫さんとかに自然に聴いて貰えるのに、お父さん、お爺ちゃんの「お一人様」行動。一緒に来れば若い世代にも広がるのに。「亡き父が好きだったので、懐かしいわ」と言って来はる人もいるけど、生きている時に一緒に来てあげれば喜ばはったやろに。職場の部下など若い方を何人か同伴して下さる方は、マニアックなタンゴファンではない方が多いのは、なんでやろ？

―　音楽に関しては親子断絶の家庭が多いですね。ロック世代の子供が親から「ロックなんて、あんなの音楽じゃない、ただの雑音だ！」なんて言われると、そこで親子の会話は終わってしまう。

門奈　タンゴ・アカデミーでは、レコードだけ聴く人達はタンゴが広まって欲しいのか？　もうこれ以上いらんもんなのか？　自分達は何年以前のレコードを聴いていれば満足で、それ以外の新しいものはもういらんと言う人達なのか。もちろん、そういう人達もいると思いますが、でもそういう人達がアカデミーに入って意味があるのかなぁとも思いますがね。「アカデミーとは何ぞや」となって来るんだけども。向く方向がそれぞれ違う人達がいると、気に入らない人は辞めて行くし、僕らは残っているけれども、あってどうだって事もない状態では良くないでしょ。僕らは時々出番をいただいているんで、それは有難い事ですけど。

―　アカデミーの目的はあくまで、タンゴの研究と普及にありますが、普及活動を実践する事には消極的です。レコード・コンサートとセミナー中心の在り方にも問題があり、なかなか新入会員の増加は期待出来ない現状です。過去の音楽をレコードで楽しむ人達が主流で、演奏家、歌手、ダンス関係の人達との交流をするイベントも少なく、組織の閉鎖性を打開しなければ発展しないし、存在意義も問われてきます。

門奈　宮本さんが主宰されているノチェーロ・ソイが中心になって積極的に外に働きかければいいんじゃないですか。僕らは久しぶりにテレビに出て、全国的にリアクションがあり応援メッセージもいただきましたが、見損ねた人もいっぱいいるんですよね。自分はこの前は見そびれたんでと、電話かかってくるんで、そういう人達は、ホームページに、また再放送して欲しいとか、また違うタンゴを企画して欲しいとか、なにも「アストロリコ」だけじゃなくていいんですよ。メディアを通してタンゴの特集をもっとやって欲しいとかね。そういう声をどんどん入れて欲しいんです。それをタンゴ・アカデミーが全国ネットでやってくれたら、もっと盛り上がるんですよ。今はタンゴの番組が少ないから、タンゴを知る機会がなかなか無いです。以前は、同じ関西でいうと神戸ポルテニア音楽同好会さんがラジオ神戸で自主番組でタンゴを広める努力をされたり、アストロリコでも麻場さんがパーソナリティで自費番組をＦＭコミュニティ局でやったり、あの時はわざわざ、電波が届くところまで時間になると車で出かけて聴いて下さったファンもありましたし、そういう方が積極的にテレビ局などに要望の電話をされたりして実に有難いです。そんな方がたくさん居てくだ

さると、それが力になってメディアも反応してくれるんですよね。不思議な事にそういう方々は僕が知る限りではアカデミー会員ではないんです。会員さんに実践してくださっている方がいらしたらごめんなさい。

9　次世代に残す草の根運動

子供たちに指導する門奈紀生

麻場　クラシックの演奏している人達に、最初はアストロリコを通してまずタンゴを知ってもらう事。だからピアソラの一周忌追悼公演だって産声を上げたばかりのアストロリコでしたが、たいへんな経費を負担してクラシックのプロオーケストラを共演に招いて公演しました。オーケストラ団員の人達もピアソラが今みたいにブームじゃないから、「何これっ、わからへん！」って言いながら必死になってやってくれたんですが、その時のチェロとバイオリンの首席奏者は、現在オルケスタ・アストロリコの主力メンバーですわ。今では練習時に「ゾクゾクするな～。プグリエーセ、ええわぁ」って言ってますもん。（笑い）門奈さんの作戦が、如実に効果を上げた一つの例です。ピアソラの曲は概ね、ほとんど細かく具体的に楽譜に書いてあることが多いので、クラシックの人達はすぐ弾いてしまえるんです。でも、一時的に弾けた気分になっても、そのうち「なんか、これタンゴっぽくないやん」って感じ出すんですよね。そんな人達のために「タンゴ基礎体力作りワークショップ」というのをやってます。初回は2005年だったかな？　あの時は夜行バスに乗ってタンゴワセダの学生も団体で参加してくれました。しばらく中断していましたが、今年は一年で３回開催してます。主に弦楽器とピアノがメインで、少ないですがバンドネオンで参加される方もいらっしゃいます。参加された方がそれぞれのフィールドに戻って体験を生かした演奏をして、また次の回に仲間を誘って参加してくれるんですよ。

―　それはすばらしいですね。若い演奏家が増えれば、タンゴが盛んになる突破口にもなりますね。

麻場　それと同時にリスナーも開拓しないと。今の日本の義務教育で音楽について言うと、西洋音楽の教育はかなり進んでいて戦前よりも底上げができているから、西洋音楽を聴く能力も感受する力も地盤が出来ています。あとは知っていただく機会を増やさんとあかん。デビューした翌年からずっと続けている活動の中に学校の鑑賞教室があります。近い過去の例で言うと、去年訪問した京都市立中学校では、初めて聴いた中学生たちが大学生並みの内容のすごい感想文をたくさんの生徒さんが書いて、こちらの方が感動しました。ちゃんと伝えれば、彼らは聴く能力がすごくあるんです。つまりは、いつかその中から凄いタンゴミュージシャンが出る可能性もあるという事です。

―　今の中学生くらいの年齢で、タンゴの音楽を理解する感性を持ち合わせていますかね？

麻場　民族音楽として、歴史や地理の要素を含めながら説明します。日本から一番遠い国アルゼンチンとの友好の歴史を日露海戦まで遡り、国際文化交流・親善の視点からも紹介します。それはアストロリコが最初にブエノスアイレスのテレビに出演した時に、現地の人から教えられた事でもあります。小学校１年生から６年生まで年齢差があっても、「タンゴは初耳」なのは同じなので、みんな目をきらきらさせて聴いてましたね。小学生相手でも本物のスペイン語を聴いて欲しかったので、歌はロベルト・デ・ロサーノさんにスペイン語のままで歌ってもらいました。楽器の紹介をして「挑

戦したい人」と聞くと、結構積極的に手をあげるんです。一時間強のレクチャーで、みんな一所懸命聴いてます。敬虔なクリスチャンのシスターが校長先生という学校でも遠慮なく、当時いつも一緒にショーをしていた「ルシア＆アルバロ」「フリオ＆ミキ」などプロダンサーも参加して、子供達にダンス体験コーナーやバンドネオンに挑戦コーナーで親しんでもらいました。子供たちは真面目に取り組んでくれて、文化としてのタンゴを体感してくれます。タンゴダンスにエロチックなイメージを持っておられたようですが、公演後は校長先生もすっかりニコニコされてタンゴが持つ負の印象が払拭されたようでした。そしてなによりも説得力あるのが、門奈さんのバンドネオンを目の前で聴かせてあげることなんです。去年訪問した中学校では女子生徒さん達が放課後、控室に「バンドネオン触らせて下さいっ」と押し寄せてきて、門奈さんはたいへん喜んでました。男子生徒たちは女子の勢いに押されて入って来づらかったみたいです（笑い）。

―　そのようなレクチャーが、中学校や、小学校でそれだけの反響があるんなら、高校や大学、そして市民大学等だったらもっと効果があるでしょうね。

麻場　去年、京都女子大学でも質疑応答の時間を入れて２時間半たっぷり講義をしました。もちろん、演奏もしっかりと。幼稚園から小・中・高・大学まで、公立、私立問わずです。同志社大学の国際交流セミナーや大阪音楽大学の楽器博物館主催でも好評でした。ある京都私立女子中・高合同レクチャーをしたときのこと。生徒達が大きな会館に集まってアストロリコ六重奏で演奏をしたんです。緞帳が上がると最前列にいた女子高生たちが門奈さんを見たとたんに、「キャー！カッコイイ！」って黄色い声が。しっかり門奈さんの耳に入ってましたね。とにかく、ワークショップにしてもレクチャーにしても、タンゴの演じ手と聴き手の両方の入り口を増やしたいと思ってやっていることやし。それは「タンゴがいい音楽だから」です。オランダのカンジェンゲとグラナダのタンゴサミットで会った時に話をしたときも同じ結論でした。「お互いにアルゼンチン人じゃないのに何でタンゴをしてるのか、それはいい音楽だから」って。そして演奏家は死活に直結してるから努力せざるを得ない。具体的にタンゴのデモンストレーションとしての広める努力はパフォーマー側の努力ですが、日本タンゴ・アカデミーという国名の冠つけたタンゴ組織に援護射撃をしていただくとどんなに助かる事か！

―　タンゴ・アカデミーでも各地に支援するシステムが出来ていれば、早めに情報を流したり、宣伝する体制を作るべきで、また自らも演奏会に足を運ぶ事ですね。

麻場　なるべくお子さんやら、近所の若者やら、一人でも若い人を同伴して会場に行く事を繰り返していただくと有難いですね。10人10回違う子を連れて行った中で、一人でも二人でもリピーターになってくれると嬉しいですね。

門奈　真鶴の演奏会でお母さんに勧められて一緒に来ましたという女の子がいましたが、「とても感動しました。今度は一人でも来ます」と言ってましたが、あれは嬉しかったですね。やはり実際に連れて来てくれる事が一番ですね。いきなり、親に連れられて「タンゴコンサート」となると、なかなか一緒に行動に移せない事もあるかもしれませんが、若い人達だけでもタンゴに出会えるきっかけの一つにアストロリコは、異なるジャンルのアーティストとこれまで、たくさんのコラボレーションをしてきました。

麻場　ダイヤモンド・ドックスや大浦みずきさんとの公演が一番良い例ですが、彼らの主旨はアストロリコのタンゴに寄り添ってタンゴを表現することなんです。「タンゴに挑戦したいので胸を貸して欲しい」と。また、ショーの中で必ず「アストロリコ」だけの場面を演出してくれます。彼らと

の競演は「タンゴとの出会いの時空」をたくさんの観衆に提供してくれたんやなぁって改めて痛感します。1000人単位の劇場に連続９～11公演とかするんやから、タンゴ界では考えられない規模の大きさで「タンゴの伝道者」としての役目をしてくれました。彼ら自身も、タンゴに身をゆだねてパフォーマンスしていることが心地良さそうであり、使命感に燃えている感じで、真剣勝負でタンゴに接してくれましたね。多くのファンは、同じ公演に何度も足を運んでくれるんです。その結果、熱心なタンゴリスナーになった人、タンゴダンス選手権に出場するくらいのダンスキャリアを積んでいる人などが出てきています。こういった公演をしている時、タンゴ界ではまったく話題になっていませんでしたけど他のジャンル、たとえばダンスマガジン系や劇場雑誌系では話題の公演になっていたんですよ。あの一連の公演は、真っ向勝負のタンゴしかしてないから、すごい曲目ばかりが並んで通常のライブ以上の質量だったので、聴くだけでも満足していただけるものでしたのにアーティストが攻めの姿勢の時に、肝心のタンゴ界は他人事みたいな感じで、孤軍奮闘している気がして残念というか寂しいというか、他のジャンルに対して恥ずかしかったですね。こういう絶好のチャンスのときに、他のジャンルみたいに結束して盛り上げる、ということがないから、勢いが殺がれてしまうんかなあ。

10　タンゴ・ルネッサンスはプグリエーセから

一　東京でアストロリコの演奏を聴いた大きなイベントとしては、2010年の浅草での「東京タンゴ祭」、2012年の上野での「春の音楽祭」とやはり11人編成のグランオルケスタの演奏は迫力ありましたね。特に上野の演奏会では、歌もダンスもなく、演奏だけをじっくりと、特にピアソラとプグリエーセの選曲でのプログラムを２時間近く堪能出来ましたね。「スム」、「ロケ・ベンドラー」、「ア・オルランド・ゴニ」、「パラ・ドス」、「パタ・アンチャ」、「シ・ソス・ブルーホ」などが良かったですね。究極のタンゴはプグリエーセじゃないかと思うんですけどね。

麻場　門奈さんが2000年４月に書きはった「タンゴ・ルネッサンスはプグリエーセから」というタイトルの文章がある機関誌にあります。「アストロリコ」を始めた時はクラシック音楽の人達にもやって欲しいから、ピアソラを多めに入れながら、といっても今となっては全然多く感じないですが、あの頃としては多めにやっていたんですね。そうこうしてピアソラ・ブームがあって、クラシックの人達が皆ピアソラの格好良さを知ってくれたので、だったら次はプグリエーセを知ってもらったら、絶対にタンゴの良さをわかってもらえると。同じ７月に亡くなったピアソラとプグリエーセを追悼する「ピアソラ＆プグリエーセ」ナンバーだけのプログラムでコンサートをオルケスタ編成で

若手中心のオルケスタ編成による演奏

開催したりもしました。

門奈　そしたら、しばらくしてアルゼンチンでも若い楽団、例えばフェルナンド・フィエロとか、プグリエーセのスタイルが好きで仕方がないっていうような演奏をする人達が出てきましたよね。

麻場　絶対次はプグリエーセを知ったら、もっと虜になるって。私達がそうやったし、門奈さんはいつも先を見てる、ていうか見えてはるんやろうなぁ。ピアソラ一周忌追悼をした時も10年早いって言われたけれど５年後にはブームになったり。そういえば、あの時も孤軍奮闘やったなぁ。

―　ピアソラとプグリエーセのあとと言うとなかなか難しいでしょうね。

門奈　それをやり続けるしかないですね。また、僕はプグリエーセ、ピアソラ以外にも、そのレジェンダ・ガウチャとか、あの辺の50年代の元気横溢なタンゴが好きですよ。トロイロとかミゲル・カローとかもいいですね。

―　ここに、2012年の上野の「春の音楽祭」のプログラムがありますが、アストロリコの若手の演奏者がずらーっと揃っていますね、11人の編成で。非常にいい演奏をしていました。

麻場　その頃は一番メンバーが多かったけれど、若手がアルゼンチンに行ったり、自主的に独立したりして、今はバンドネオンの若手精鋭として星野俊路君が頑張ってくれてます。彼は岡本昭さんや岡崎恵二さんのところでキャリアを積んだ後、京都に引っ越してきたんです。初対面の時は何だか頼りない感じもありましたが、今はすっかり頼もしく変貌していますよ。門奈さんと少し似たところがあるんですよね。テクニックはあるし魅力のある子です。門奈さんのもとでさらに、タンゴを美味しく仕上げていって欲しいですね。

11　「エスクエラ・デ・タンゴ」とタンゴ草の根運動

麻場　アルゼンチンに行ったバンドネオンの奥村君が「エスクエラ・デ・タンゴ」を出て、向こうでずっと頑張ってくれてます。今は、アルディットと言う歌手の「ピチューコ・トロイロ楽団」（2014年の生誕100周年のアニバル・トロイロのメモリアル楽団）というところで、スタートメンバーとして第２バンドネオンを担当しているそうです。スポンサーが背後に見え隠れする日本人だから、ということではなく純粋に現地の人と同等に扱ってもらい、受け入れられているということは、もう本物やなって喜んでいます。奥村君にはアルゼンチンで勉強することを前々から門奈さんは勧めていたんですが、彼は門奈さんの演奏が大好きで、ずっと門奈さんの側で勉強したかったんです。その一方でアルゼンチンのマエストロが元気なうちに彼らの演奏にも触れたいと、板挟みの想いだったのを門奈さんから「僕が若いころにできなかったことを代わりにやってきて僕に教えて欲しい」と背中を押されて決心がついたようです。エスクエラに入学してしばらくしたら、奥村君からの報告の中に「生徒の中には、昔のバンドネオン奏者から引き継がれた技を、私が当たり前のように出来ている事にびっくりされました。本場の人が出来ていない事を、私はとっくの昔に門奈さんから教えてもらっていたんだと改めて感謝しています」ってあったんです。門奈さんにとって「自分のやってきたことが間違いではなかった」という確信の証しになったので、奥村君の報告は本当に嬉しいものでした。卒業後、そのままブエノスアイレスで現地の人と同じ扱いでプレーヤーとして活躍している奥村君は、野球で言うとメジャーで活躍中の選手と同じなのに、なぜか日本のタンゴ界で話題になるどころか、今年リリースされたアルディットの新譜アルバムにプレーヤーとしてクレジットされているのに取り上げられない。こういうところが日本のタンゴ界を盛り下げている、いかにも偏狭で日本にとってマイナスですね。

―　日本でも「エスクエラ・デ・タンゴ」みたいなものを作ればいいですね。

麻場　門奈さんはアストロリコをスタートさせた頃「何で、アルゼンチンのマエストロ達は積極的に若い人達にタンゴを伝えていかないんだろう」と言うてはった。1994年に初めてブエノスアイレスに行った時、街にタンゴが溢れていると想像していたのに、街にはロックが溢れて専門店にもタンゴのＣＤコーナーは隅っこの少しだけだったのにビックリしました。今振り返るとアストロリコの練習は、今のエスクエラ・デ・タンゴの歴代の先生の役目を門奈さん一人でされていたように思います。

門奈　盛岡で長く活躍しているバンドネオンの先輩でもある森川倶志さんの下からは、熊田洋さんを筆頭に優秀なプロのタンゴピアニストが沢山出ているので、日本のタンゴ界へ素晴らしい貢献をされていると思います。エスクエラがブエノスアイレスに新設されたと聞いたときは、「やったー！」と嬉しかったですね。でも、向こうではもう先生がいないですね。バルカルセも亡くなってしまったし、ラバジェンはどうしたんでしょう？　マルコーニが引き継いだみたいだけど、大分スタイルが変わってしまって、評判が悪いようです。アルバレスは全然関わっていないようですね。

麻場　姪の麻場友姫胡が、バルカルセの最後の楽団でものすごく可愛がってもらいラッキーでした。私も「バルカルセが生きている間に行きなさい」と言って。だからイギリス留学から日本に帰らずに直接アルゼンチンに行かせたんです。在学中はバルカルセと一緒にオルケスタのメンバーとして友姫胡もローマツアーに行かせてもらいました。

門奈　友姫胡さんはエミリオ・バルカルセが指揮した最後のオルケスタメンバーになっちゃったね。エスクエラ在学中にバルカルセに彼の本名をユニット名に貰ったトリオを組んで活動してましたが、あの若さで凄くいい演奏していて、びっくりしたものです。あの学年は精鋭揃いでバルカルセも楽しそうでしたね。彼女は「カフェ・デ・ロス・マエストロス」DVDのエスクエラの場面で、バルカルセやみんなと和気あいあいとしているシーンがあるけど、ラバジェンやガレーロからも習えて良かったです。レオポルド・フェデリコとも一緒に演奏できたし。何よりもスアレス・パスが本当に彼女を可愛がってくれましたよね。卒業後はフィリベルトのオルケスタが出した２枚のＣＤにも彼女はメンバーとしてクレジットされているし、ブエノスアイレスではコマーシャルにも出たりと、僕は本当は彼女にもっとブエノスアイレスに居て欲しかったんですけど。あれ？ ラティーナとかで現地の日本人の活躍、記事になってなかったですかね？ 彼女はリサイタルもブエノスアイレスで開いてラミロ・ガージョがゲスト共演したりすごく活躍してましたが。

麻場　そうそう、今度民音で来日する「セステート・メリディオナル」のリーダーのピアニストのパブロやマルコが友姫胡とトリオを組んだ同級生達です。活躍は嬉しいけど、少し見ない間にオジサンになって……いや、素晴らしい貫禄でビックリ仰天！　さっき言ったアストロリコはエスクエラの日本版みたいだ、というのはどういうことかというと、過去の巨匠達のスタイルをなぞって行く、つまり画家が模写し勉強するみたいに、トロイロの楽団のスタイルやプグリエーセのスタイルなど色々なスタイルを真似しながら体得するという方法です。それにはオルケスタ編成で演奏することが必要となるわけで、維持するのは大変だけど門奈さんがオルケスタ編成にこだわるのは、この大事な活動があるから。我々は過去のマエストロと時空を共有できないけれど、門奈さんを介して勉強できるんです。いきなり自分のスタイルをと言うたって、そこを経ていないのに自分のスタイルと言うても無理。ピカソを彼のデッサン基礎抜きで語れないのと同じ。だから、ドミンゴ・フェデリコのレジェンダ・ガウチャの弾き方とか、ダリエンソやトロイロのリズムの切り方の違いとか、

いろいろある。

門奈　ディ・サルリはまだ「ラ・クンパルシータ」しかやってないんですけど、「エル・シルーハ」とか「コム・イル・フォー」とかを考えてはいるんです。以前、鎌倉でオルケスタ編成でやった事あるんですが、１曲目にディ・サルリの「ラ・クンパルシータ」をやった時、僕にタンゴを教え込んだ同級生が聴きに来てて、彼が泣いてくれたんです。バンドネオンをやってきて良かったと思いました。

麻場　今のはアストロリコの主力メンバーのトレーニングであって、さっき話題に出たワークショップの内容はまた別のやり方です。いつも地道なことばかりしているんですが同じ顔ぶれが毎回来るんです。きっと参加する以前の自分とは変わっていることに気が付いてくれるんやろうなぁって思います。

門奈　その時にやった人がまた申し込んで来るのはすごい事ですよね。だから、そういう人達にほんとのタンゴを弾くチャンスを作ってあげたいですね。近いうちに、参加者が自分たちの仲間を連れて、バンド全体に対しての「タンゴ処方箋」みたいなクリニックをすることになると思います。自分でやるみたいですが、僕はタンゴでありさえすれば嬉しいので、まじめにタンゴをやっている人の演奏を聴くのが大好きなんです。たぶん、クリニックでも、一タンゴファンのリスナーになっちゃうかも。練習の時なんかメンバーから「門奈さん、何か言ってください」っていつも言われるんですが、テクニックの上手下手ではなくて、「いかにタンゴか」ということの方が大事で、タンゴを一所懸命演奏していれば何も言うことはないんですよね。ただ、麻場さんを筆頭にメンバーは他のジャンルから転向してきているので、演奏方法として具体的にどう言ってあげれば相手が理解できるのか、体験から知っているので彼女達から学んだ人は近道ができてラッキーだと思います。自分の体験を惜しみなく伝えて、専売特許のように金庫にしまってしまわないので。

麻場　それは門奈さんがそうしてきたから、アストロリコのメンバーとしては当然です。アストロリコ・レディースとしてやった「タンゴ・アルコイリス」だって、草の根運動の一環でしたから。アルコイリスの話はともかく、門奈さんはバンドネオンに興味を持って近づいてきた人には、惜しみなく楽器を触らせてあげたり、貸してあげたりして、自分で楽器を買って続ける気になるまで待ってあげるんです。独立した元メンバーの中には、借りている期間に楽器を駅の階段で落下させて割ってしまった人もいますが、そのときですら門奈さんは「大丈夫だよ」と及び腰にならないように代わりの楽器を貸してはりました。

―　それが、25年もやっている草の根運動ですか。すばらしい事ですね。創設時の話に戻りますが、アストロリコそのもののバンドスタイルとしては、当初どのように考えられてましたか？

門奈　バンドのスタイルとしてこうやって行こうというのはなかったですね。スタイルと言うのは、やって行くうちに自然と出て来るものではないかと思っていました。当時日本のタンゴ解説・DJの超大物が京都に来た時に、「タンゴは21世紀には無くなる」と言っていたんです。僕は「無くなってはいけない、残さなければいけない！」と思って、今はとにかく聴いてくれる人を増やさなければいけない。それにはもっとプレーヤーも増やさなければいけない。それだったら今やっている人達の中から選んでバンドを作るのではなくて、今はタンゴを知らなくてもこれからタンゴを好きにさせる事が重要だと考えたわけです。アマチュアのメンバー中心だった「京都セイス」にサポートしてエキストラで来てくれていたプロ奏者で宝塚歌劇団オーケストラの男の子が、自分が来られない時にと言って紹介してくれたのが、同じオーケストラ仲間だった麻場さんでした。

麻場　京都セイスは、お手伝い程度です。アマチュア楽団といえども私以外はみなさんタンゴの経験

は豊富でした。ところが、京都セイスでの経験はアストロリコでは、まったく通用しないことを痛感しました。当然ですが、アマチュアの楽団でちょいとお手伝いした程度ではわからなかった門奈さんの凄さというか。なのに、新生楽団アストロリコのメンバーは門奈さん以外は誰もタンゴを知らないんです。当時門奈さんが京都で新しい楽団を結成したと聞いて、いきなり完成型を期待して駆けつけてくれはったタンゴファンがたくさんいたと思うんですよ。いざフタを開けてみたら、えっ!?　門奈さんが何であんなタンゴ素人みたいなもんと組むんや、とさんざん門奈さんは言われはったと思うんです。でもそれを私達が知ったら凹んでしまってタンゴから離れてしまうでしょ。だから私達には、そんなことおくびにも出さはらへんのです。たぶん、今聞いても凹むようなことを言われてはったと思いますわ。

門奈　だからちょっと技を入れてね、最初はニチェーレの四重奏、あのバイオリンとピアノだったらタンゴ知らなくても、楽譜通りに弾いていれば音楽になるんでね。あれとホルヘ・カルダーラのクアルテート。エストレージャス・デ・ブエノスアイレスやキンテート・レアルを中心にレパートリーを組んだんです。クラシックファンや演奏家には古い曲でも新しい編曲だからタンゴがわからなくても「いい音楽」としてわかってもらえるし、古いタンゴファンには編曲が新しくても古い曲だからある程度満足してもらえると思って。ピアソラを知ったばかりの麻場さんに、タンゴクリスタルでブエノスアイレスに行った時に出会ったコロール・タンゴの演奏を聴かせたら「カッコイイ！こんなのやりたい！」って言いだしたのには、びっくりしたのと同時に「やっぱり、ピアソラからプグリエーセの流れで行こう」と確信を得た瞬間でもありました。

麻場　まんまと門奈さんの作戦にやられたわけ？（笑い）とにかく、クラシック畑から見たら、すべて楽譜に書いてある通りなので弾きやすいというか、かえって「チャッ、チャッ、チャッ、チャッ」っと１小節に４つしか音なかったら、もう居場所がない、どうやって弾いていいかわからない。

門奈　ああいうのをやっていたらクラシックやっている人が聴いても、あっ、自分もやりたいなと思う音楽だと思ったんです。その中に、ピアソラを入れてね。それがまず僕の狙いだったんです。

―　そこまでちゃんと考えてやっているんですね。難しいけど最初が肝心なんですね。

麻場　まだ始めて間もない頃、「アディオス・アルヘンティーナ」を古いスタイルでやらざるを得なくなってやったんですよ。もう何か、見事に玉砕！（笑い）３分間が３時間に感じたくらいステージの上で身の置き場がなくて、もう大やけどでしたわ。それが20年近くたった最近では、自分の居場所が前より増えたように感じて、弾いていて楽しいんですわ。少しは進化したんかな。「メルセ寺院の鐘」や「エル・オンセ」など初めは居場所がなかったけど、今は門奈さんに「やりたい、やりたい」って。「こいつら、変わるもんやなぁ！」っと。（笑い）昔は弾いてても不穏な空気しか流れへんかった。ようそんな中で、門奈さん我慢して座ってはったわと思って。本日何回目かな？
まさに、孤軍奮闘。

門奈　そうそう、この変わり様ったら。そういうことで、最近の２枚のＣＤアルバムは、そういう編曲が多くなっているんです。というか、こういう曲を僕が選ぶように彼女達に仕向けられたかな。うまくやられてしまったみたいです。（笑い）

―　麻場さんが主宰した女性だけの楽団「タンゴ・アルコイリス」のことやワークショップ、タンゴサミットのことなど、まだまだお聞きしたいお話はたくさんあるんですが、今日は長い時間に亘って、貴重なお話ありがとうございました。これからもますますタンゴ界のためにご活躍される事を祈っております。

旅に出てしまった……アルベルト・ポデスター

Alberto Podestá... se fue de gira.

高場 将美

タンゴ音楽家たちの用語で、アーティストがこの世を去って行ったことを“Se fue de gira”という。訳せば、ツアーに出ちゃったよ……。

歌手アルベルト・ポデスターが、2015年12月９日９時30分、ブエノスアイレス市の高齢者病院から最後のツアーに出てしまった。91歳だったが、前年までイベントなどのステージでしっかり歌い、３月に入院してからも、アルゼンチン作詞作曲家協会のバーの常連（？）として、立派な現役ボヘミアンであったという。

アルベルト・ポデスターは、1924年にアルゼンチン中西部のサンフワン州都で生まれた。ポデスターというのは母方の姓で、父の姓はアレー Alé、シリア～レバノンからの移民ではないかと思う。父は早く亡くなり、ポデスターは小学校６年しか行かなかった。親類の経営する映画館でチョコレートを売ったりして家計を助けた。小学校のイベントで、ガルデールの曲を歌ったそうだ。

「どうやって歌を勉強したんですか？」という質問に、彼は「街角でしかタンゴは習えない。唯一の先生はガルデールだ」と答えている。タンゴ歌手とはそういうものだった。彼は、そんな世代の数少ない（みんなツアーに出てしまった）生き残りだった。

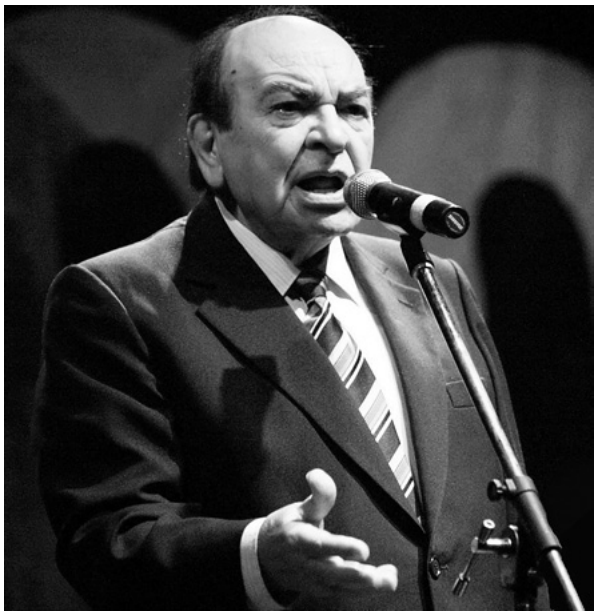
地方の放送局で歌ったりして、1939年、15歳でブエノスアイレスに上京してきた。ロベルト・カローの楽団で歌ったあと、その兄で、より有名な**ミゲール・カロー** Miguel Caló の楽団に入った（1941年？）。地方出身の若い優秀な音楽家を集めて輝いていたオルケスタ･ティピカである。アルベルトは、第１ヴァイオリンの**エンリケ・フランチーニ** Enrique Mario Francini（1916-78）、バンドネオンの**アルマンド・ポンティエール** Armando Pontier（1917-83）の親友になった。この楽団のレコードでの、ポデスターの初の大ヒットは、第１バンドネオンの**ドミンゴ・フェデリーコ** Domingo Federico（1916-2000）作曲、**オメーロ・エスポーシト** Homero Expósito（1918-87）作詞による『**ペルカール** Percal』（43年録音）だと思う。この曲は、亡くなるまでポデスターの十八番のひとつになっていた。

1942年には、最高の巨匠のひとりだった**カルロス・ディサルリ** Carlos Di Sarli の楽団に入った。

（この時期、専属とはいうが、契約書を交わすことはなかったようで、あるクラブやダンス・ホールで楽団の専属歌手として認められている人が、他の楽団で録音したり、また、アルバイトで、ダンス･パーティでは別の楽団に参加といったことがあるようだ。けっこう、いい加減なのである。年代の確定は、あんまり意味がなさそうだ）。

この楽団での最高のヒット曲は、『ペルカール』と同じ作者たちによる『**心のときめき**Al compás del corazón』だろう（1942年）。

1943年（まだ18歳そこそこ）で、さらに大巨匠の**ペドロ･ラウレンス** Pedro Laurenz 楽団に入った。ここで、ディサルリ楽団でのレパートリー『**ボヘミアンの魂** Alma de bohemio』を録音し、すごく声量と歌唱技術を必要とするこの曲が、彼の十八番のひとつになった。歌詞はまったくタンゴ的ではなく、音楽はサルスエーラ（スペイン歌劇）のアリア調だ。冒険心に満ちたさすらいの若者がロマン



ティックに歌いあげるところが、ポデスターに合っていたのだろう。

1945年に、**フランチーニとポンティエール**が、M・カロー楽団から独立して共同指揮のオルケスタ・ティピカを発足。その歌手としてポデスターに来てほしいと、彼が母と住んでいる家を訪ねてきた。たくさん仕事があって、かせぎまくっていたポデスターは、専属になるとかえって収入は減るのだが、年上の親友たちの依頼を断るはずはない。喜んで**フランチーニ＝ポンティエール**楽団の歌手になった。この楽団での、わたしがいちばん好きな１曲は、またまた**エスポーシト**作詞（サワリのフレーズ２小節は作曲も）、やはりM・カロー・サークル（？）の**エクトル・エスタンポーニHéctor Stamponi（1916-97）**作曲の『**愛について わたしに教えられるような人はいない Qué me van a hablar de amor**』。

このころから、オルケスタ・ティピカの経済条件は苦しくなり、50年代後半は絶滅の危機。でもソロ歌手は、小編成グループとともに、収入は減ったろうが、なんとか生き延びつづけた。「タンゴ歌手」を絵に描いたような存在感、個性の持ち主ポデスターは、活動を休むことはなく、南北アメリカ大陸各地へのツアーなども含めて、それなりに精いっぱい活動してきた（67 ～ 70年はチリ共和国に定住）。ファンの支持は衰えたわけではないので……。60年代後半から、ブエノスアイレスにタンゲリーアと名乗るライヴの店ができ、そこの中心はソロ歌手たちなので、その中のスター級存在であるポデスターも、この時代にしては大活躍だった。新しいヒットは、**レイナルド・ジソ Reynaldo Yiso** 作詞、ポデスターと同様に10代半ばからあちこちの楽団で大活躍した歌手**ロベルト・ルフィーノ Roberto Rufino**（ポデスターより２歳年長）作曲の『**おもちゃのバザー El bazar de los juguetes**』（56年にM・カロー楽団で録音）。そしてタンゴ最後のスーパー・ヒットといわれる『**あなたのいない空白 Qué falta que me hacés**』である（作詞フェデリーコ・シルバ Federico Silva、作曲ポンティエール。63年にM・カロー楽団で録音）。

21世紀に入って、タンゴ伝統を支える巨匠・大物を集めたイベント「タンゴのナショナル・チーム」が発足、その延長で映画『**カフェ・デ・ロス・マエストロス**』が制作され（2008年）、ポデスターも中心人物のひとりとして、若者に発見され、再認識され、この時代としてはいちばん大活躍のタンゴ歌手となった。最後のツアーにも祝福あれ！

＊インターネット上のテレビ、YouTube で、ポデスターの歌はたくさん無料で聴けます。映像付きでは、とりあえず『おもちゃのバザー』をおすすめ。https://youtu.be/pxcHM841g3w

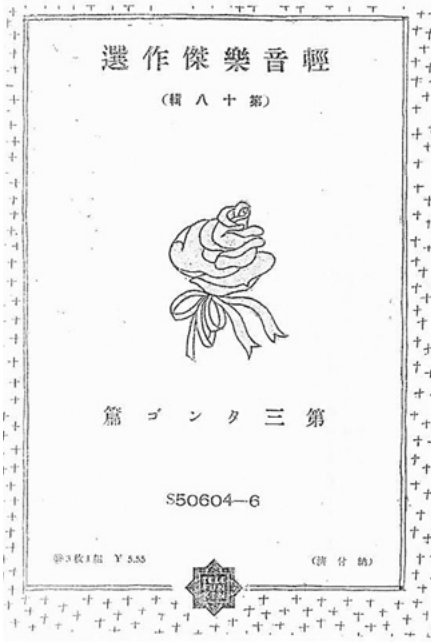
たぶん最後の映像は、『パリに碇を下ろして Anclao en París』。90歳という年令に関係なく感動的です。https://youtu.be/LWNvk1-3lmw

シリーズ・資料再見（6）

タンゴに就いて

野口久光　述

（出処：TELEFUNKEN　S50604-6「輕音樂傑作選（第十八輯）　第三タンゴ篇」解説より　原文のママ）



タンゴの本場は言ふまでもなくアルゼンチンのブエノス・アイレスであります。アルゼンチンの歌手の歌ふアルゼンチンのタンゴ、同じく本場のオルケストラの演奏する生粋のタンゴを聴くことなしに、タンゴの真髄に触れることは不可能であると言はれてをります。従って、タンゴの音樂的特質を、或は、タンゴの持つ民族的特性を研究しようとするならば、アルゼンチンのものをさしおいては出来ないのであります。わがくにのタンゴ研究家の多くはアルゼンチンがタンゴの本場であるといふことから、アルゼンチン・タンゴに非ざればタンゴに非ずと言ってをり、歐洲に移植されたタンゴの如きは本末の個性が失はれてゐる點唾棄すべきものであるとさへ極言してをりますが、これは余りにアルゼンチン贔屓な一方的な見方であるやうに思はれます。成程タンゴはアルゼンチンで發達したものであり、歐洲に移入されたタンゴはアルゼンチン・タンゴ本来の色彩、感情を失ってゐるかもしれません。しかしこれは當然なことで、アルゼンチン・タンゴはアルゼンチン人でなくては申分なく演奏することも歌ふことも出来ないことは歐洲人も知ってゐる筈です。獨逸人にしても佛蘭西人にしても、アルゼンチン・タンゴをたゞ模倣することの愚はとうに知ってゐるばかりでなく、アルゼンチン・タンゴが始めて歐洲に移入された1910年代の始め頃から今日まで三十年の間、タンゴを愛好し続けてゐる最大の理由は、アルゼンチン・タンゴの特つ國民性でもなければ、ノスタルジックな色彩でもないやうです。獨逸人も佛蘭西人も、むしろ、極めて單純に、タンゴの特つ獨得のリズムや、その舞踏としての形式の目新しさを愛したに違ひないのであります。獨逸人は誰憚るるところなく、これを獨逸人好みに感傷的に、或るロマンティックに作り上げて三十年もの間愛好してゐる譯ですし、佛蘭西人も又、アルゼンチン・タンゴに佛蘭西流の色彩や好みを加味して自分のものとしてしまってゐるのであります。従って今日わがくにでコンチネンタル・タンゴと稱されてゐる歐洲のタンゴは、アルゼンチン・タンゴとは別個の通俗輕音樂と考へる方が妥當であると思ひます。

アルゼンチン・タンゴと歐洲のタンゴとは流行するに至った經緯も違ふばかりでなく、本質的な差異があるのであります。アルゼンチン・タンゴがアルゼンチン人にとって單なる流行歌曲でなく、最愛唯一の國民音樂であるのに對し、歐洲人のタンゴに對する氣持はそれ程つきつめたものでなく、澤山ある流行歌や、舞踏曲の一部を占めるに過ぎないのであります。元々歐洲、主としてスペイン系の移住者の後裔であるアルゼンチン人には音樂も古い――傳統はなく、僅かの間に血の中に染み込んだ鄉愁の情が、原始的な民謡をタンゴという形式にまで發達させたのであり、心からこれを愛し、生活

の一部にしつかりと抱き、そこに誇りをさへ感じてゐるのであります。一方歐洲はといへば、藝術として誇り得る音樂は傳統もあり、獨逸にしても、佛蘭西にしても豐富な民謠を持つ一方、流行歌の一つとして或は舞踏曲の一種として適(たまたま)、タンゴを取り入れたに過ぎないのであります。アルゼンチン人はタンゴは心から歌ふものと云つてをりますが、歐洲人は、決して、それほどつきつめた態度でタンゴを歌ひ、聽き、或は踊ることはありません。流行歌曲の新しいタイプとして、また舞踏に於ける新しいスタイルを好んだものでありませう。たゞ、タンゴが、獨逸や佛蘭西ばかりてなく、わがくにを始め東洋でも厭きられることなく、ひろく愛好されてゐるのは、矢張り、タンゴそのものの不思議な魅力であると考へられます。

タンゴの起源、歴史については非常に多くの異説があつて、本場のアルゼンチンてさへ、十人が十人同じ説を支持してをりません。たゞ、どの説にも共通なところは、今日のタンゴに近いものが始めて演奏され、踊られたのはほんの四五十年前のことであるといふことと、タンゴの發生した地域が、ブエノス・アイレスの貧民街の安酒場やラ・プラタ河口の船着場にある勞働者や馭者のやうな連中の集まる料理やの如きところであつたといふことであります。四五十年前といふと、旱くて1890年代、遅くて二十世紀に入って間もない頃てあります。歐洲に始めてタンゴが紹介されたのは1911年と言はれてをりますから、タンゴの歴史からみますと、可成り早く、既に歐洲に齎されてゐたことになります。タンゴに歌詞が伴い、歌はれるやうになつたのはずつと後の1915年頃からでありますし、本場のアルゼンチンでも初期時代には上流社會からは一瞥も與へられなかつたものでありますが、歐洲に渡ったタンゴは中流以上の階級にも非常に歓迎されたのであります。1911,2年頃のモスコオを背景にした獨逸映画『モスコオの夜は更けて』には、当時の物珍しかったタンゴがレストランで踊られる情景が取り入れられてありましたが、これも史實的にみて興味深いものがありました。1910年代には世界的に社交舞踏の隆盛時代でありまして、アメリカでも丁度、第一次大戦が始まった頃にはタンゴが舞踏曲として人気を呼びつゝあったのであります。そして大戦が終わり1920年代に入ると、巴里でも非常な流行をみましたが、このことが、アルゼンチン本國を逆に刺激し、それまでタンゴを下賤なものとして顧みなかったブエノス・アイレスの上流社會人もタンゴに關心を持つやうになり、アルゼンチン・タンゴも本場に全盛時代を迎へたのであります。

1920年代になってからは、タンゴは世界的な流行歌曲として、殆ど世界中の各國に移入され、それぞれ、アルゼンチン的な色彩を離れ、獨自の地方色、民族色が盛られるやうになったものであります。

そこでアルゼンチン・タンゴはアルゼンチンといふ一種の植民地に發達した民衆音樂であり、獨逸で今日演奏しているタンゴは、アルゼンチン風のタンゴでこそあれ、意識的に或は無意識のうちにも獨逸人的な嗜好の入っている大陸化された一種の舞踏曲であるといふことになる譯であります。

われわれ日本人のタンゴに對する親しみの気持を實状をみますと、アルゼンチン物であると、大陸(コンチネンタル)のものであると區別しないほど強いものがあるやうです。アルゼンチン人に於けるアルゼンチン・タンゴほど切り離すことのない切實なものもなく、歐州人の如く、享樂の目的のためにタンゴを要求するのでもない、たゞよく言ってわれわれは素直な、純粋な気持ちでそのリズムを、甘美な旋律を樂しむといった方が至当かもしれません。またアルゼンチンのものにせよ、大陸のものにせよ、長い間に日本人の血の中にある一種のノスタルジックが感情に触れるものがあるから愛好されるのでもありませう。

大分前置きが長くなりましたが、アルゼンチン・タンゴが本物で、歐州のタンゴが偽せ物であるといふことも一概に言へない点を挙げたまでであります。も一つ、タンゴの歴史に關して、最も新しい

權威ある説を簡單にご紹介しておきませう。これはアルゼンチンのタンゴ研究家である作家エロス・ニコラ・シリ Eros Nicola Siriの研究發表によるものでありますが、彼の説に依りますと、タンゴは、アルゼンチンに歐州人が入って来る前から住んでいた遊牧の民の音樂でも、アルゼンチンに發生したものでもないといふのであります。タンゴの母体をなしているのはアフリカ・ニグロの踊りである『タンガノ』Tanganoであり、その名前も、これから来たものであるといふことです。『タンガノ』は、18世紀の初頭にアフリカから中米キューバ、ハイチなどへ連れて来られたニグロの奴隷がアフリカから移入したものであった、先ず中米で流行し、19世紀に入って彼等奴隷が南米に買はれて移住するやうになって、ラ・プラタ河沿岸であるアルゼンチン、ウルグアイ地方に齎されれ、彼等の間で踊られたものださうです。そして名前も『タンガノ』と言はず『カンドンベ』Candombeと言はれるようになりました。『カンドンベ』は当然黒人の間だけで踊られ、樂器には太鼓やギタア、タンバリンなどが使はれておりました。『カンドンベ』は４分の２拍子の速い曲調で、『ミロンガ』Milongaとリズムもそっくりのものであります。すると今日のタンゴと形式的にも同じものであるといふことになりますが、『ミロンガ』も19世紀時代にアルゼンチンの伊達男たちが、黒人の踊り（即ちカンドンベ）を揶揄って作り、踊ったものであると言はれていますから、『カンドンベ』から『ミロンガ』が生まれたものと見られます。斯くて、『カンドンベ』は、歐州系の舞踏曲であるハバネラ、ボレロ、ポルカ、マズルカなどと交流、次第に獨特のリズムと性格を築いていって、アルゼンチン・タンゴになったのだといふことであります。そして最初ラ・プラタ河口の船着場の下町で踊られてゐたものが、次第に中流階級にも入って行き、今日の盛大を至したものであります。そしてタンゴの最も性格的特長としては、移民國であり雑種族であるアルゼンチン人の血の中に秘められている傳統的な郷愁の感情、そのメランコリイそのものであると言はれてをります。

歐州のタンゴ。殊に獨逸のタンゴは、アルゼンチン・タンゴの持つ強烈なリズム、アクセント、色彩、歌詞や唱法の持つ情熱的な、或は感傷的な表現は殆ど無くなってをります。このアルバムに収められた、アダルベルト・ルッター、及びペーター・クロイダーの兩管弦樂団も、所謂オルケスタ・ティピカの編成ではなく、歐州で標準のダンス・オーケストラであります、従って、兩樂団ともタンゴを屡々演奏はいたしますが、ワルツもフォックス・トロットの、又パソ・ドブレ、ルムバなども演奏する譯であります。

この二樂団とは違って、わがくにに始めて紹介される『エル・アギラール』タンゴ樂団は、オルケスタ・ティピカといふ名前からも判るやうに、所謂ティピカに近い編成で、純然たるアルゼンチン・スタイルのタンゴを演奏しております。

今日のわがくにではすべてのタンゴが輕音樂といふ名称のジャンルに入れられて、多くの舞臺で演奏され、或は放送され、また或は都会人の憩ひのひととき、レコードを通じて耳を樂します譯でありますが、私は、このやうなレコードこそ理屈抜きに、ただお聴きになって、甘美な旋律を樂しみ、思ひ思ひの夢を追はれるならばそれで充分であると思ひます。その意味で、このアルバムに關しても曲目解説や演奏の分解などをなるべく少くし、タンゴに關する一般的なお話をするに止めた次第でもあります。

〈アーティストの足跡（3）〉

リベルター・ラマルケ

“ラテンアメリカで最も美しい恋人…リベルター・ラマルケ”

“LA NOVIA MAS HERMOSA DE AMERICA…LIBERTAD LAMARQUE”

LOS GRANDES DEL TANGO誌

著：JORGE PALACIO
訳：弓田　綾子

美貌の歌姫リベルター・ラマルケは1909年11月24日、サンタ・フェ州のロサリオで生まれた。ラマルケの父親は６人の子持ちの寡婦ホセファ・ボウサと再婚し、彼女は義兄たちの末っ子として両親に溺愛されていた。父親のガウデンシオはブリキ職人であり、また熱心なアナーキスト（無政府主義者）の幹部でもあったため、常にラマルケが組合関係の演劇で歌うことを勧めていた。ラマルケがはじめて舞台に出演したのは７歳のときだった。

ロドルフォ・ゴンサレス・パチェーコの劇、「蛇（Las víboras）」をはじめ、フロレンシオ・サンチェスの、「死者（Los muertos）」やアレハンドロ・ベルッティの「母なる大地（Madre tierra）」に少女役でデビューした。そして、ラマルケが弱冠12歳にして大きな運命の出会いがあった。

それは、せわしく人々の行き交う年末のある日、大学生たちに呼ばれて卒業生の演劇に出演した時のことである。演目は「Romántico Bulincito（ロマンティックなブリンシート）」で、気楽な人生を送る女性エンリケッタという役であった。ラマルケは役柄、慣れない高いヒールに黒のストッキングをはき、長い吸い口のキセルで煙草を吸うシーンがあったが、彼女はこれを見事にやってのけ、その大人顔負けの演技に大きな関心が集まり、次第に観衆の心を惹きつけた。

ある日ラマルケの家に、トップ俳優で監督、事業家のホセ・コンスタンソーが訪ねてきた。彼はラマルケの演技を見ていて、是非とも“サンタ･フェ”と“ブエノスアイレス”を巡演している一座に、彼女を迎え入れたいと、契約のお願いに来たのだった。その場で契約は成立し、彼はラマルケに台本と優雅な衣装を買うのに充分なお金を渡した。また、契約の他条項には、兄のペドロが彼女の付き添い人としての項目もあった。何故ならラマルケはまだ14歳だったからである。

３ヵ月後“コロネル・スアーレス”の劇場で仕事を始めた。その演目の最中に監督はラマルケに歌う部分を追加するように要求した。ラマルケは一部分しか知らなかったタンゴを繰り返し歌うだけだったが、かえって大好評を博しその都度タンゴを歌うようになった。だが、付き添ってくれていた兄ペドロが病気になりロサリオに帰らねばならなくなった。代わりにまだ未成年だったラマルケの付き添いに来たのは母親であった。

15歳でロサリオに戻った後、1923年父親の勧めで、ナシオナル劇場の経営者、パスクアル・カルカバージョに彼女は手紙と写真を送った。その手紙には「若い女性に仕事を下さい。月給500ペソで、母とブエノスアイレスに行くという条件で」、と書いた。しばらくして返事があり、「月給300ペソで女優の仕事を一年契約でどうですか」、とのことだった。やがてナシオナル劇場でデビューした彼女の演目は「El dueño del pueblo（街の顔役）」で、ラマルケの役は素朴な町民で端役であった。ここでの契約は３年間だったが、その間「Tucumancito（ツクマンっ子）」、「El rancho del hermano（兄

貴の牧場)」、「¿Dónde cantan zorzales?（つぐみはどこで鳴く)」、「Margot（マルゴー)」などに出演し、「Pata de palo（木の脚)」では主役を演じた。ラマルケのボーカル面については、パスクアリャ氏がマエストロのカストロヌオヴォのレッスンを受けさせてくれ、彼女の歌唱に磨きをかけた。

1926年、「La Porota（お豆さん)」の上演の際には、ラマルケは自ら結成したトリオで出演した。トリオのメンバーはラマルケとオリンダ・ボサン、アントニア・ヴォルヴェ、ギターがラファエル・“ネズ公”・イリアルテらである。その後「Los hombres de la ribera（スラム街の男たち)」で、船乗りの衣裳で「Tanita de popa（船尾のタニータ)」を歌った。

ある午後、稽古中のラマルケの元に「ラ・クンパルシータ」の作者、ヘラルド・H・マトス・ロドリゲスが訪ねて来た。彼女にタンゴを一曲初演依頼するためだった。曲は「Mocosita（鼻垂れ娘)」で、カフェ「Los 36 billares」で歌うラマルケはまたたく間に大人気となり、タンゴ狂たちが連日押しかけた。カフェは劇場の前にあり、彼らはラマルケの歌うタンゴを聴くためだけに、当時の狭いコリエンテスを渡って、カフェーのサロンに入って行ったのだ。

演劇の中で彼女が初演したタンゴは、「¿Por dónde andarás?（何処にいるの)」、「Déjalo（ほっといて)」、「El tatuaje（タトゥー)」、「Araca Corazón（気をつけろ　心よ)」、「Pato（アヒル)」等々であった。また同年には無声映画「Adiós Argentina（さらば、アルゼンチンよ)」に出演し、女優としても活躍した。

そしてオデオンでは「Déjalo（ほっといて)」、「Íntimas（親友)」を録音した。R.C.A.ビクターも、レコード一枚につき150ペソを支払うとラマルケと契約をしたが、その人気に早くも翌月には300ペソに増額し、手巻きのジュークボックスまで贈った。ラマルケのすべてのキャリアを通じて、ブエノスアイレスでもメキシコでも、同じレーベルのレコードを録音したのである。

最初のレコードは1926年9月2日に録音し、A面が「Gaucho sol（太陽のガウチョ)」、B面は「Chilenito（チリっ子)」であった。録音にはアルフレド・マレルバ（Alfredo Malerba)、マリオ・マウラーノ（Mario Maurano)、ハワイアン・パラダイス（Hawaian Paradise)、エクトル・スタンポーニ（Héctor Stamponi)、ビクトル・ブチーノ（Víctor Buchino)、フアン・ダリエンソ（Juan D'Arienzo)、ルシオ・ミレーナ（Lucio Milena)、オスカル・トスカーノ（Óscar Toscano)、ティト・リベーロ（Tito Ribero）ら、錚々たる楽団であった。

1926～27年は初期のラジオブームが始まり、もちろんのことラマルケもラジオ番組に出演し、彼女の「エーテルの＝ノイズのような」声は大変な人気を博した。1928年、娘が生まれた後に、ラマルケはフアン・サルシオーネと共に、「Su majestad, el Tango（タンゴの陛下)」という演目をもって、国内を巡演した。ブエノスアイレスに戻ると、パスクアル・カルカバージョが、アルベルト・ヴァカレッサの不朽のサイネーテ（喜劇)「El conventillo de la Paloma（パロマの安アパート)」の中の“12ペソ”役に選んだのである。そのサイネーテはナシオナル劇場で1929年4月5日初演され、大好評のうちに２年間のロングランを続けた。その中でラマルケはタンゴ「Atorrante（放浪者)」と「Largue a esa Mujica（それ捨てなさい、ムヒーカ)」を歌っていた。

1931年にはラジオ・プリエトと契約し、「Reina del Tango（タンゴの女王)」という煌びやかなタイトルでチリへ行った。しかし、タンゴを歌ったのではなく、あの有名なルンバ「El manisero（ピーナッツ売り＝南京豆売り)」を歌い踊ったのである。結果は大成功だった。観衆の中に有名なルイス・セサル・アマドーリがいて、すぐさまラマルケとマイポ劇場への出演の契約をした。1932年のことで、フロレンシオ・パラヴィチーニと看板を分け合い、キャストはアリシア・ヴィニョーリ、アルベルト・

アンチャール、レオン・サラテであった。演目は「Hay que embromarse con Parra（パーラをからかえ）」、「Ahora va a correr el vento（さあ金が廻るぞ）」であった。その時期映画出演の話もあったが、ラマルケは海外巡演のため船でペルーに向かった。

アルゼンチンに戻ったラマルケは新しい映画撮影をした後、またラテンアメリカの巡演に向かった。最初の国はキューバであった。そこでは卓越したラマルケの美貌と歌唱に、「La novia de America（ラテンアメリカの恋人）」という呼び名が与えられた。ハバナでは劇場やラジオ出演で前例のないほどの大成功を収め、レコードも録音した。ハバナで録音したレコードは、A面が「El tumbaíto（エル・トゥンバイート＝アフリカ起源の太鼓）」、B面が「Facundo（能弁）」だった。

キューバでのラマルケの人気は高く仕事が雨の降るようにあった。ドミニカ、プエルト・リコ、ベネズエラ、メキシコを巡演し、どこも引っ張りだこだった。メキシコでの伴奏はタタナチョで、当時人気を博していたオルケスタであった。

ナイトクラブ「エル・パティオ」に出演したときには、アルゼンチンとメキシコの多くの著名人が集まった。ルイス・サンドリーニ、ティタ・メレーロ、グローリア・グスマン、ティト・ダヴィソン、マリーア・フェリクス、アグスティン・ララ、アルトゥーロ・デ・コルドバ、ロベルト・ガヴァルドン、ペドロ・ヴァルガスらであった。

夫君のアルフレドと

そのメキシコは1956年に「La cantante del año（年間トップ歌手）」賞を彼女に贈った。メキシコ長期滞在中ニューヨークにも行った。プエルト・リコ劇場では１週間で45,000ドルもの興行収入を上げた。ラマルケはメキシコとブエノスを何度も行き交っていたが、ブエノスの観衆の前に再登場した時には、ラジオ・ベルグラーノで８つの番組で歌い、400,000ペソの報酬を得た。当時の状況では考えられない金額であった！！

1961年、ラマルケはスペイン、メキシコ合作の映画「BELLO RECUERDO（美しき追憶）」と「ASÍ ERA MI MADRE（母の想い出）」に出演した。その映画と並行してホセリートとデュオでレコード録音もした。「JILGUEROS（五色ヒワ）」、「QUIÉREME MUCHO（もっと愛して）」の曲が広く名声を博した。

1965年ブエノスに戻ったがメキシコにも住む目的で、アルゼンチンとメキシコ両国に家を購入した。

ブエノスに戻った年にテレビの「カナル13」に出演し、マーティ・コセンスとデュオで「CANTANDO（歌いながら）」を歌い、親友のメルセデス・シモーネに敬意を表した。

そして、ラマルケが絶え間なく活躍する中で、R.C.A.ビクターの録音室のマイクの前で50周年を迎えた時、記念盤のアルバムＬＰ３枚組の「Bodas de oro（金婚式）」を制作した。その中には1926年に最初の録音をした「チリっ子」も収められている。

いつも観衆から魂の喝采を受け“ラテンアメリカの恋人”と慕われ、成功で満たされたキャリア、娘、孫、ひ孫たちの愛に囲まれた、愛情に溢れた人生…。アスセナ・マイサニ、アダ・ファルコン、ロシータ・キロガ、ソフィア・ボサンらと肩を並べ、逆境にも負けることなく“カモメ”のように飛翔している緑がかった瞳の美しい女性、それがまさにリベルター・ラマルケなのだ…。

現代タンゴ群像（1955～1990） 第8回

リト・エスカルソ

por 西村秀人

今回は1960年代に多方面に活躍したピアニスト、リト・エスカルソが残したタンゴ演奏をまとめてご紹介する。もともとジャズ畑から出てきた人のようだが、本人に関するデータが乏しく、生年・没年・キャリア等はまったくわからない。

（A）Tonodisc TON-1002 “Quinteto Pernod”

＜日本盤　ビクター SWX-7018「栄光のアルゼンチン・タンゴ／キンテート・ペルノー＞

（1）Alma en pena　（2）Toda mi vida　（3）Mal de amores　（4）Fea　（5）Tres esquinas
（6）San José de Flores　（7）Pato　（8）El internado　（9）Te aconsejo que me olvides
（10）Sobre el pucho　（11）Qué viejo estoy　（12）Almagro　（13）Muchacho
（14）Tinta roja

時代的にはミュージックホール盤の最初の数枚の方が古いかもしれないのだが、断定する資料もないので、とりあえず1960年代初めのものと思われるトノディスク盤を最初に紹介しておく。リト・エスカルソのピアノを中心に、ギター２、ギタロン、コントラバスという非常に珍しい編成で、名義は「キンテート・ペルノー」（ペルノーは食前酒の一種）。歌手のギター伴奏スタイルをバックに、歌手の代わりにピアノがメロディを歌うという感じ。実際３、８以外はもともと歌曲だったレパートリーばかりで、５、９、11など演奏ではなかなか聞く機会のない通好みのレパートリーがうれしい。モノラルにもかかわらず後になってから日本盤が出たのもその辺の選曲の良さからだろう。実は原盤にはこのグループのリーダーがリト・エスカルソである旨の記載はないが、日本盤解説では明記されている。レコード番号で１つ前のTonodisc TON-1001がリト・エスカルソのコンフントによるポピュラー・ヒット曲集なので、キンテート・ペルノーがリト・エスカルソのグループであることは間違いないだろう。

（B）Music Hall 12171 “Lito Escarso… y el tango”

＜日本盤　キング MH63「リト・エスカルソ／タンゴ・ピアノ・タッチ＞

（1）Viejo rincón　（2）La tablada　（3）Gallo ciego　（4）Palomita blanca　（5）Esta noche

me emborracho （6）Por la vuelta （7）Organito de la tarde （8）Uno （9）Milonga sentimental （10）Cuando llora la milonga （11）Cuartito azul （12）Boedo

リト・エスカルソのアルバムの大半はミュージックホール・レーベルのものである（ミュージックホール社の音楽ディレクターだったという資料もある）。タンゴ集は多分これが最初で、これ以前にすでに３枚のアルバムをミュージックホールから出しているが、それらはすべて国内外のヒット曲をダンス・ミュージックにアレンジしたもので、タンゴは含まれていない。このタンゴ集はピアノを中心に、エレキギター、バイブラフォン、ドラム、ベースという編成で、後年ラウンジ・ミュージックと称されるホテルのバックグラウンドミュージックとして重宝されたスタイルであり、当時LP時代に移り変わって各社ともイージーリスニング系の分野を開拓する中で、リト・エスカルソにタンゴ集を提案したのだろう。しかしベストセラーになったフィリップス・レーベルのアンドレのコンフント（サントス・リペスケル）に比べると、リト・エスカルソの演奏はよりリズムを強調したもので、特にピアノのタッチは非常に鋭く、イージーリスニングというよりはダンス向けを指向したものかもしれない。メンバーは明らかにされていないが、多くのレコードでオルガンはホルヘ・ケニー、ドラムはミグリアーノだったというが、タンゴ演奏の時にはタンゴ系のメンバーが招集されていたのではないかと思う。このアルバムは早くも1963年に日本盤で紹介されており、当時日本のファンの間では、ピアソラとは異なるモダン・タンゴのもう一つの行き方ととらえられていたようだ。

（C）Music Hall 12269 “Tangoscope – Música típica en nueva dimensión”

（1）Canaro en París （2）Chiqué （3）Remembranzas
（4）Jueves （5）Barrio pobre （6）Los mareados
（7）El abrojito （8）Silbando （9）Mocosita
（10）Bahía Blanca （11）Pero yo sé （12）La maleva
（13）La copa del olvido （14）La cachila

タンゴ集の中では最高傑作と言える作品。オルケスタ名義になっており、いつものコンフントのみで演奏される曲と、そこにストリングスを追加した曲とが半々・交互に収録されている。ライナーに記載されたメンバーはキチョ・ディアス（コントラバス）、リカルド・ドミンゲス（エレキ・ギター）、ダニー・モンターノ（パーカッション）、エンリケ・フランチーニ、ウーゴ・バラリス、ティト・ベスプロバン、シモン・ブロイトマン、フランシスコ・オレフィチェ、ベルナルド・プルサック、サルバドール・（ニト）ファラーチェ、エルネスト（エドゥアルド）・バルサック（バイオリン）という豪

華メンバーで、通常よりかなり力の入った作品だったのだろう。しかしなぜかこの１枚だけ日本盤は出なかった。歌ものだけではなく、元来器楽だった曲が増えているのも特徴だ。

(D) Music Hall 12351 “¡Qué tangos!”

＜日本盤　キング MH204「ロマンティック・タンゴ・ムード／リト・エスカルソと彼のオルケスタ＞

（１）Gran Hotel Victoria　（２）¿Dónde estás corazón?　（３）Orlando Goñi　（４）María
（５）El choclo　（６）Volver　（７）La yumba　（８）Elegante papirusa　（９）Confesión
（10）El clavelito　（11）Ilusión de mi vida　（12）Racing Club　（13）Tierrita
（14）El marne

引き続き器楽的なレパートリーが多くなっているのが特徴。日本でも1965年に発売されている。ジャケットのライナーはリト・エスカルソ自身が執筆しており、そこに「最近私のアルバム“Lito Escarso… y el tango”が日本で発売され...」と書かれているので、このアルバムは1963年頃の録音ということになるだろう。

(E) Music Hall 12369 “La vuelta al mundo en tango”

＜日本盤　キング SH189「タンゴの旅情／リト・エスカルソと彼の楽団」＞

※曲順はアルゼンチン盤と異なる

（１）Buenos Aires　（２）Fiesta negra　（３）La Mónica Pérez　（４）La cucaracha
（５）Noche y día（Night and Day）（６）Abril en Porugal（April in Potugal）
（７）Fumando espero　（８）Dulce Francia（Douce France）
（９）Torna a Sorrento（Come Back to Sorrento）（10）Las piernas de Dolores（Das machen nor die beine von Dolores）（11）Ojos negros（Dark Eyes）（12）Sukiyaki
（13）Aqualera do Brasil（Brazil）（14）Volver

世界の名曲をタンゴのリズムで、という趣旨のアルバムで、レギュラーのコンフント編成による演奏。３の作者はPenny Mendó-Marfilと記されているが、ペニー・メンドーはリト・エスカルソの変名。日本盤は「スキヤキ」（上を向いて歩こう）をＡ面１曲目に持ってきて、ステレオ盤として1965年に発売されている。「スキヤキ」の世界的ヒットが1963 ～ 64年なので、アルバム自体は1964年の録音だろうか。

（F）Music Hall 12508 “Tangos con amor”

＜アルゼンチン盤再発　Music Hall 70874-6 “Tangos con amor” 1979年＞

（１）En esta tarde gris　（２）Vida mía　（３）Una lágrima tuya　（４）Sus ojos se cerraron
（５）Flores negras　（６）La que nunca tuvo novio　（７）Senda florida
（８）Cafetín de Buenos Aires　（９）Malena　（10）Niebla del Riachuelo　（11）Cristal
（12）Nostalgias

私が確認できた範囲では、リト・エスカルソのミュージックホール・レーベルへのタンゴ集としては最後になったもの。タイトル通り、メロディックなレパートリーが中心。日本盤は出なかったが、アルゼンチンでは1979年にジャケットを変えて再発売されている。

この他、リト・エスカルソはタンゴ歌手（エクトル・マウレー、ロサンナ・ファラスカ、オラシオ・カサーレス）の録音でも伴奏しているが、歌手伴奏だとよりティピカルなスタイルになっている。前述の通り、リト・エスカルソはタンゴ以外のダンス音楽のLPを多数出しており、さらにミュージックホール社ではアテンシオ・パレーデス（Atencio Paredes）名義でフォルクローレを、ディエゴ・ラウレンタル（Diego Laurental）名義でボレロやポップス歌手の伴奏を行っている。

1980年代半ば以降、リト・エスカルソの名前は全く聞かれなくなってしまい、その消息も全く分からない。しかし今回この原稿を執筆するにあたってインターネットで検索していて驚きの映像を発見した。2013年にYouTubeにアップされたものだが、カリブ海のクラサオ（キュラソー）島で現地ダンスパーティの音楽を演奏するアルゼンチン人 Lito Scarsoなる人物の映像があり、確認してみると間違いなく、リト・エスカルソ本人であった。クラサオ島には数年滞在していたという。映像には（qepd）と記されているので、すでに故人になったと思われるが、映像はそれほど古いものには見えない。あくまで勝手な推測だが、軍事政権期にアルゼンチンを離れ、中南米をあちこち回っていたのではないだろうか。とにかくピアノの腕は確かだし、これだけ多才ならどこにいっても編曲家・演奏家としても重用されたことだろう。それにしてもクラサオ島とはなかなか珍しいところへ行ったものだ。

— La Voz Sentimental de Buenos Aires —

アグスティン・マガルディ

齋藤　冨士郎（町田市）

La Voz Sentimental de Buenos Aires

アグスティン・マガルディは“La Voz Sentimental de Buenos Aires”というキャッチ・フレーズで良く知られている。この言葉は1936年２月15日にマガルディがラジオ・スプレンディに出演した際に、アナウンサー(*)が冒頭にこう宣言したことで一気に知られることとなった。しかしマガルディはこの後、２年半ほどしか生きなかった。

栴檀は双葉より芳し

アグスティン・マガルディ（Agustín Magaldi）の生年に関しては、数十年前まではアルゼンチンにおいても諸説があったが、オスバルド・カスティジョン（Osvaldo Castillón）やその他の人々による研究の結果、現在では1898年12月１日サンタ・フェ州ロサリオ生まれということが、洗礼証書などの資料に基づいて、確定している。父親はカルロス・マガルディ（Carlos Magaldi）、母親はカルメン・コビエッロ（Carmen Coviello）で共にイタリア出身である。アグスティンの兄弟姉妹にはブラス（Blas）、パスクアル（Pascual）、エミリオ（Emilio）、クリスティーナ（Christina）が居た。父親のカルロス・マガルディは早世したらしく、母親のカルメンはその後ライモンド・テジョ（Raimondo Tello）と再婚し、アントニオ（Antonio）とカルメン（Carmen）の２子をもうけた。

アグスティン・マガルディが生まれて間もなく、一家はサンタ・フェ州のカシルダ（Casilda）に引っ越した。そしてアグスティンが就学年齢に達した７年後にロサリオに戻った。学業を終えるとマガルディは母方の３人の叔父が経営する花火工場に見習いの資格で入った。今日では花火製造のような危険な仕事に子供を就労させることなど論外であるが、当時は許されていたらしい。その後、マガルディは兄のブラスが経営していたボタンやヘアピンを製作する工場に入り、機械工として働いた。

天才と言われるような人は誰でも幼い頃からその片鱗を示したとよく言われるが、マガルディもそうであったようだ。まだカシルダにいた読み書きも出来ない頃から歌の天分は現れていた。ある時、マガルディはオペラ公演に連れて行かれたことがあったが、彼はその詳細をすべて記憶できた。

花火工場ではマガルディの祖父が、皆が仕事をしている時にも、蓄音器でエンリコ・カルーソ（Enrico Caruso）のレコードなどを聴いて楽しんでいたらしい。その影響でマガルディは仕事そっちのけで歌に熱中し、とうとう３人の叔父たちもマガルディの才能を認めることになった。また、兄のブラスの工場で働いている時も、一方で、若い仲間たちと「ボルピ＝ガルディ一座（la TROPE VOLPI=

（＊）このアナウンサーの名前は参考資料［１］～［３］ではドゥプイ・デ・ロメ（Dupuy de Lome）とあり、一方参考資料［４］ではマリオ・オスカル・カタラーノ（Mario Óscar Catalano）と全く違った名前になっている。どちらが正しいのかは不明である。

GALDI)」を結成し、あちらこちらで演奏活動をした。

そんな時に、マガルディはギター奏者のペドロ・マヌエル・エギーア（Pedro Manuel Eguía）からギター演奏を教わった。その息子のエクトル・エロイ・エギーア（Héctor Eloy Eguía）もボルピ=ガルディ一座に加わったが、このエクトル・エロイ・エギーアこそ後年のエクトル・パラシオス（Héctor Palacios）である。

中々芽が出なかった７年間（1918年－1925年）

第１次世界大戦が終結した1918年に不世出の大歌手のエンリコ・カルーソが南北米大陸演奏旅行の途次にロサリオにもやって来た。マガルディはカルーソの歌劇団に「その他大勢」の資格で加わることができた。カルーソはマガルディに絶大な影響を与えた。たまたまカルーソの歌劇団のマエストロ代理であったニコラ・ミニョナ（Nicola Mignona）がマガルディの最初の歌の教授となった。ミニョナは結婚してロサリオに定住するためにカルーソの歌劇団を離れたのであった。

1919年９月21日にサン・マルティン劇場で催された慈善祭典でオペラの断片を歌うことになった。これが彼のデビューとなった。しかしこのデビューは学生たちの悪戯で散々な目にあった。それでも彼は何とか歌い終わり、最後は拍手喝采を浴びた。この後、ミニョナはマガルディに本当に歌を勉強するのならミラノ・スカラ座で修業した方が良いと言い、ブエノス・アイレスに行って後援者を探し始めた。しかしその途中でミニョナが急死してしまったのでこの話は沙汰やみとなった。当時、ロサリオでは古典歌曲はあまり聴かれなかったので、マガルディはカンシオン・クリオージャに転じた。しかし、この後、マガルディは中々芽が出なかった。

1920年にはジュボネ（Yubone、Yubeneとする資料もある［３］）とドゥオを組んで映画館に出演したが、大成功というわけには行かず、ドゥオは１週間で解散する羽目になった。

1921年にマガルディはロサリオに公演に来ていたカルロス・ガルデルに会い、ガルデルから勇気付けの言葉を貰った。

1922年にはフアン・カルロス・エスピノサ（Juan Carlos Espinoza）と組んでドゥオを立ち上げ、ギター伴奏者を連れて初めてブエノス・アイレスに向かった。しかし結果は思わしくなく、彼らは再びロサリオに戻った。その後、マガルディは幸運にも宝くじの１番違いの残念賞でそこそこの金を手にしたので、それを旅費と滞在費に当てて、マガルディはエスピノサと共に再びブエノス・アイレスに行った。しかし２人は結局「悪所通い」で金を使い果たし、再び貧窮の生活に舞い戻った。これを救ったのは彼の母の直感で、兄のブラスは母の依頼に応じてマガルディを探し出しロサリオに連れ戻った。

エスピノサの後にマガルディが出会ったのは俳優兼歌手のニコラース・ロッシ（Nicolás Rossi）であった。1923年のことである。そして1924年に２人でドゥオを結成し、ギター奏者とバンドネオン奏者と伴ってブエノス・アイレスの様々な場所で出演した。今度は旨く行きそうであったが、ロッシが舞台の仕事で渡欧しなければならなくなったので、このドゥオも短期間で解散しなければならなかった。しかしロッシは渡欧後にマガルディにブエノス・アイレスでの成功を予言する手紙を送った。ロッシの後、マガルディはフェリックス・ブランコ（Félix Blanco）と組んで活動を続けた。

1924年７月９日、マガルディはL.O.Y.のラジオ放送に出演することができ、そこのスタジオでロシータ・キロガ（Rosita Quiroga）と知り合うことが出来た。これがマガルディにとっての転機であった。キロガはマガルディにドゥオで歌うことを提案し、1924年12月９日にRCA ビクトルで最初のレ

コードを録音した。曲目はガトの“El amor de los amores”（79518A）とサンバの“La Jachallera”（79518B）であった。残念ながら２曲ともタンゴでない。1925年１月６日にはキロガ＝マガルディのドゥオは２枚目のレコードを録音した。曲目はこれもタンゴではなく、トナーダの“Virgencita de Luján”（79537A）とキロガ作のクエカの“Chilena ingrata”（79537B）である。（このレコード番号は参考資料［１］記載による。レフコビッチのディスコグラフィ［５］では79511となっている。）やっと芽が出かけたに見えたが、マガルディとキロガでは芸風がまるで違っていたので、２人のドゥオはこれで終わりとなった。（参考資料［２］と［５］では1927年７月５日にもキロガ＝マガルディのドゥオで“Chilena ingrata”と“Virgencita de Luján”を録音したように記載されている。）

成功への道を開いたペドロ・ノダとの出会い（1925年－1935年）

キロガとのドゥオを解散した後、RCA ビクトルのディレクターたちはマガルディとドゥオを組むための新しい男性歌手を探し始めた。そうした時、ギター奏者のエンリケ・マシエル（Enrique Maciel）がフランシスコ・ブランカッティ（Francisco Brancatti）と協力して、新しいドゥオにぴったりの人物としてマタデロ地区の著名な歌手でギター奏者のペドロ・ノダ（Pedro Noda）を探し出した。マガルディ＝ノダのドゥオはエンリケ・マシエルとマリア・ホセ・アギラール（Maria José Aguilar）のギター伴奏で1925年５月５日にRCA ビクトルにサンバの“No me despiertes nunca”とチャカレーラの“Cuándo”を録音することでデビューを果たした。次いで同年６月２日にタンゴ“La santina”とワルツ“Blanca flor”を録音した。マガルディ＝ノダのレコードは国中で熱狂的な反響と歓迎を受けた。これがこのドゥオの以後10年間の大活躍の発端であった。マガルディは成功を勝ち取ったのである。当時はアコースティック録音方式の時代であったので、録音は月に１枚のレコードのペースであったという。これ以後、映画館や劇場への出演、国内外での巡業、ラジオ放送、レコード録音と休む暇もない活動が続く。以下、毎年の活動を箇条書き記述する：

アグスティン・マガルディとペドロ・ノダ

1925年：映画館ミネルバ（Minerva）に出演。トゥクマン（Tucumán）で２か月間公演。LOYラジオ・フローレス局及びもう１局と契約。フローレス局は、後年、名前をL.R.3 ラジオ・ナシオナールと変える。

1926年：映画館レアル（Real）に出演、フリオ・デ・カロ（Julio de Caro）楽団やフアン・ギド（Juan Guido）楽団と人気を分かち合う。

1928年：モンテビデオ公演。この公演では熱狂を通り越した気狂いじみた歓迎を受けた。
この年の10月10日までにRCA ビクトルで93曲を録音。

1929年：スマルト（Smart）劇場とフニン（Junín）のパレス・シアター（Palace Theatre）で活動。
スマルト劇場ではフアン・マグリオ“パチョ”のオルケスタと共に舞台を盛り上げた。
この年、破格のギャラで新興のブルンスウィック社にスカウトされ、録音開始。

1930年：ラジオ・プリエト（Radio Prieto）で活動を続け、映画館メトロポール（Metropol）に出演。

1931年：映画館グラン・スプレンディ（Grand Splendid）とバイーア・ブランカのビジャ・フロレスタの何と刑務所で公演。

1932年：LS10 ラジオ・アメリカ（Radio America）、LS2 ラジオ・プリエト、LR4 ラジオ・ス

プレンディ、LS3 ラジオ・ナシオナールで活躍。コミコ（Cómico）劇場とジョッキー・クラブ（Jockey Club）に出演。

この年、ブルンスウィック社が倒産・廃業したのでマガルディ＝ノダのドゥオは９月１日に再びRCA ビクトルに復帰した。ブルンスウィックでは152曲録音した。

1933年：メンドサのラジオ・クジョ（Radio Cuyo）で活動。又、映画館のビジャ・クレスポ（Villa Crespo）、プエイレドーン（Pueyrredón）、エトワール・パラス（Etoile Palace）、ミトレ（Mitre）、コロニアル（Colonial）などに出演。国内巡業とチリ公演も果たす。

1934年：この年のある夜、マガルディはラジオ・ナシオナールのオーナーのハイメ・ヤンケレビッチ（Jaime Yankeledvich）と些細なことで大喧嘩になり、契約は破棄された。

1935年：ヤンケレビッチと仲違いしたマガルディ＝ノダはラジオをLR8 ラジオ・パリス（Radio París）に変えた。更にラ・プラタの映画館アストロ（Astro）にも出演した。また映画「モンテ・クリオジョ（Monte Criollo）」に出演した。

この年の12月にマガルディ＝ノダのドゥオは解散した。

ローラ・ミセレンディーノとの結婚と別居

1931年にマガルディはリオ・ドゥアルト市への巡業の際に知り合った当地の資産家の娘のローラ・ミセレンディーノ（Lola Miserendino）と結婚し、1932年には２人の間に１人息子のアグスティン・マガルディ２世（1932－1988）が生まれた。しかしお嬢さん育ちのローラは姑のカルメンと折り合いが悪く、２人は1933年の初めに別居してしまった。(＊)

エバ・ドゥアルテをブエノス・アイレスに連れ出す

1933年、15歳の少女であったエバ・ドゥアルテ（Eva Duarte）は巡業でフニンにやってきたマガルディにブエノス・アイレスに連れて行くことを内緒で頼み込んだ。マガルディはその頼みを聞き入れ、公演からの帰途に彼女を同行した。このエバ・ドゥアルテこそ後年のエバ・ペロン（Eva Perón）である。しかし勿論マガルディはエバ・ペロンとなったエバ・ドゥアルテを見ることは無かった。(＊＊)

ソリスタとしての活躍、そして急死

1936年にはマガルディはLR4 ラジオ・スプレンディで活躍した。そして冒頭に述べたような経緯で“La Voz Sentimental de Buenos Aires”という別名を獲得した。この年の中頃、マガルディはヤンケレビッチと仲直りし、LR8 ラジオ・ベルグラーノ（ラジオ・ナシオナールを改名）に復帰した。一方、多数の映画館や劇場での出演や国内巡業も多忙を極めた。こうした事情でレコード録音に割ける時間が減じたのは大変残念であった。又彼は南米諸国への巡業を考えていたらしいが、結局それは彼の急死で実現されなかった。

1937年にも連続出演ではないがLR8 ラジオ・ベルグラーノでの活動は続いたが、平行してコルドバにしばしば旅をした。マガルディは精神的に疲れていたようであった。

1938年８月17日、マガルディは12時15分にラジオ・ベルグラーノで、13時10分と13時50分にラジ

（＊）http://www.puntal.com.ar/noticia.php?id=74540

（＊＊）ジョン・バーンズ（牛島信明　訳）「エバ・ペロン　美しき野心」（新潮社、昭和57年）

オ・ミトレ（Radio Mitre）で歌い、そして最後に14時30分にラジオ・ポルテニャ（Radio Porteña）で“Salve, Señora madre”と“Alborada criolla”を歌った。これが生涯最後の歌となった。この後、マガルディは急に体調を崩し、アパートメントに戻り、兄弟のエミリオとアントニオの到着を待った。診察した医師のガムンディ（Gamundi）は肝臓障害と診断し、直ちに入院を勧めた。そして８月19日にサナトリオ・オタメンディ（el Sanatrio Otamendi）において医師のペドロ・バルデース（Pedro Valdés）による手術が行われた。胆管の分泌液が膵臓まで浸出していた。手術は成功したが、やはり重態であった。それでも21日間は生きたが、1938年９月８日７時、マガルディは息を引き取った。40歳の誕生日を迎える３ヶ月前であった。彼の臨終の言葉は―¡ママ！であった。遺体とのお別れはルナ・パークにおいて執り行われ、多数の弔問者が訪れた。マガルディの終の棲家があったモレノ通りとソリス通りの南東の角にはマガルディを讃える文言を記した化粧タイルが配置されているという。

母親のカルメン・コビエッロ

チャカリータ墓地にあるアグスティン・マガルディの墓

アグスティン・マガルディのレコード録音

マガルディのディスコグラフィにはすでに参考資料［２］［５］［６］があるので、ここに再録はしない。但し参考資料［２］にはレコード番号の記載は無く、また細部に関してこれら３種類の資料の間で多少の異同はある。

参考資料［２］によれば、マガルディは1924年から1938年までの14年間で326曲をレコード録音している。その中で、ソリスタとしての録音は166曲、ペドロ・ノダとのドゥオでの録音は147曲ある（ソリスタ及びドゥオのエストリビジスタとしての録音は除く）。次頁の図１はソリスタとマガルディ＝ノダのドゥオに限っての録音歴である。これを見ると1925年から1935年まではソリスタとしての録音とドゥオでの録音がほぼ半々である。この点でマガルディはガルデルやコルシーニとは大いに異なっている。またブルンスウィック時代が最も録音量が多く、この時代がマガルディの（そしてマガルディ＝ノダの）全盛時代であったことがわかる。

マガルディは生涯にわたってタンゴとフォルクローレの両方を歌い続けた。次頁の図２はマガルディの録音歴におけるタンゴ系（タンゴ、ミロンガ）と非タンゴ系（バルス、サンバ、トナーダ、等）の割合を示したもので、数量的には非タンゴ系の方が多いくらいである。このことがアルゼンチンの大衆からマガルディが強い支持を得ていた理由かもしれない。タンゴ系と非タンゴ系がほぼ半々であるのはメルセデス・シモーネと似ている（Tangueando en Japón, No.14参照）。マガルディもシモーネも、老若男女を問わず多数の聴衆を相手にするラジオ放送に力を入れていたというから、そのことが曲種比率に影響したかもしれない。

アグスティン・マガルディの作品

マガルディは作曲家としても多くの作品を残している。次頁の表１は筆者が所有するLP/CDから拾い出した彼の作品である。勿論、網羅はしていない。

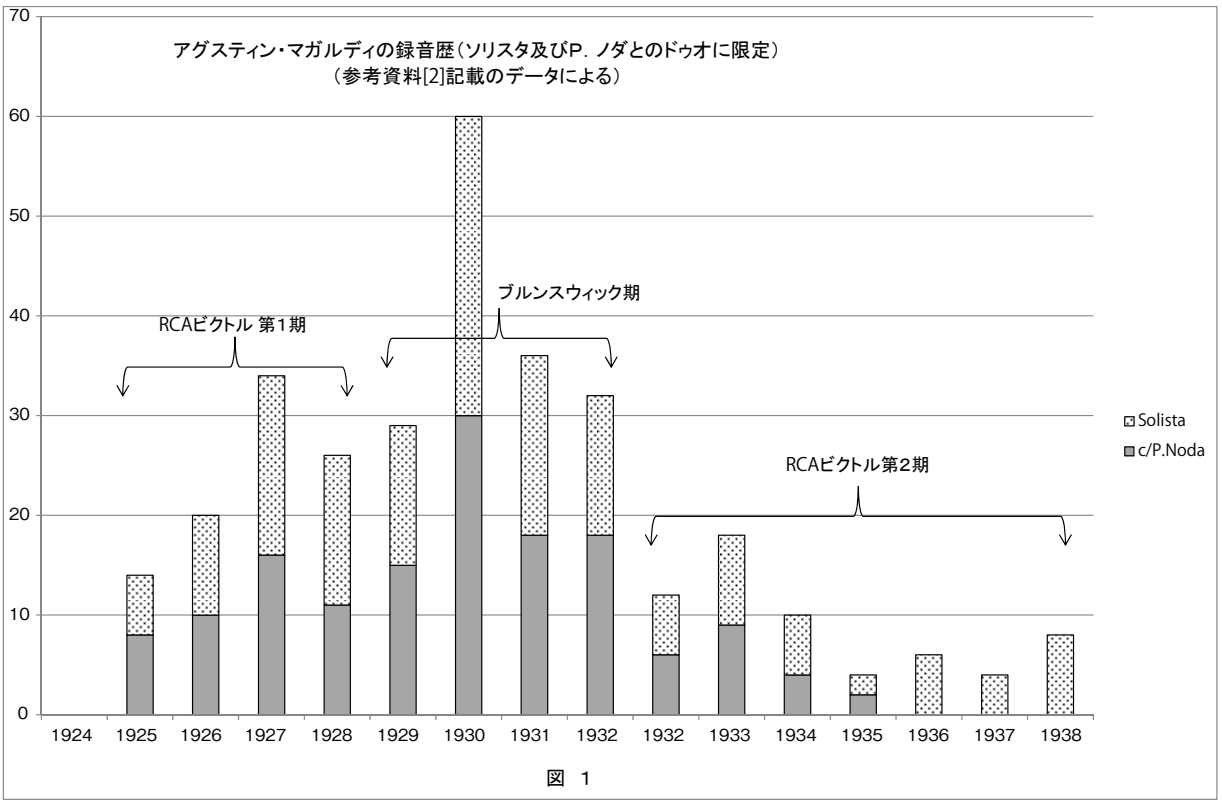


図 1

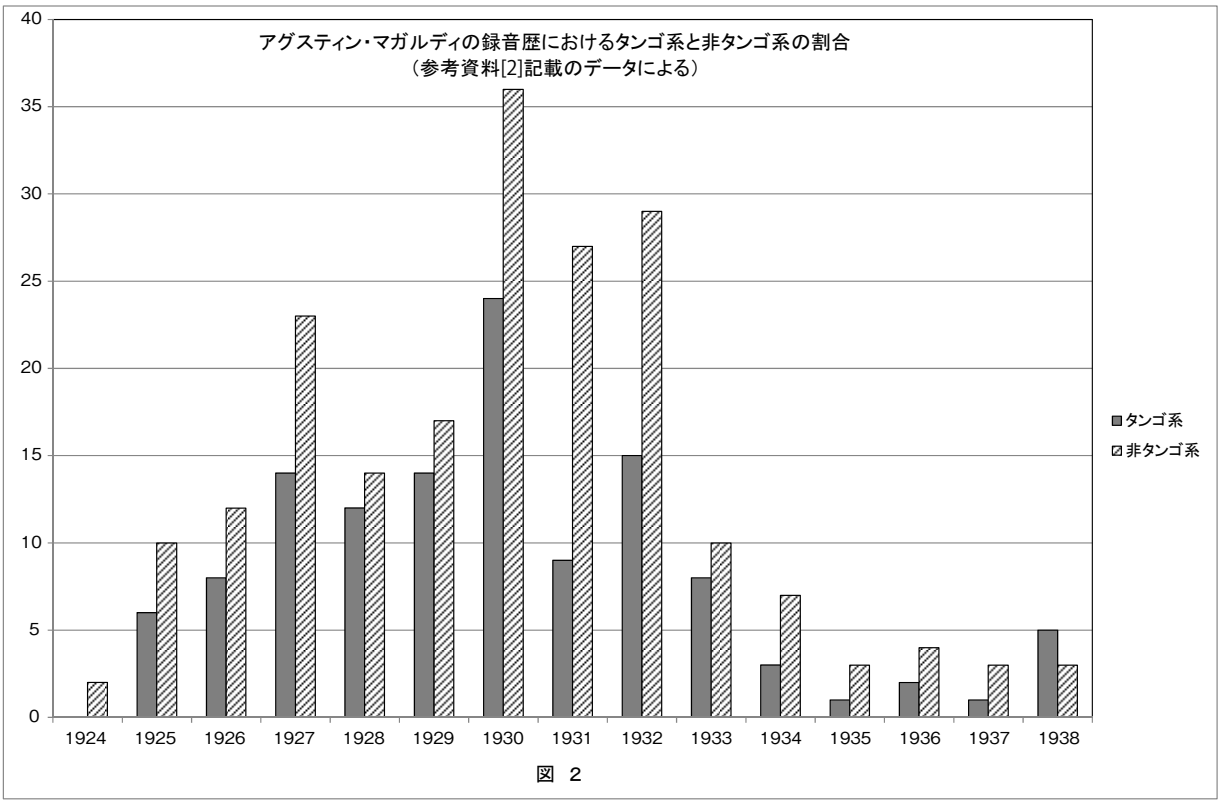


図 2

アグスティン・マガルディの作品（ペドロ・ノダとの合作を含む）

No.	タイトル	曲種（記入無しはタンゴ）	No.	タイトル	曲種（記入無しはタンゴ）
1	Allá en el bajo		24	Libertad	
2	Alma mía		25	Mama, llevame pa'l pueblo	
3	Aura y se fue	triunfo	26	Mañana es domingo	
4	Ausencia		27	Martín pecador	ranchera
5	Blanca flor	vals	28	Mi único tesoro	
6	Boga barquero	canción	29	Mis delirios	
7	Bueno muchachos, me voy		30	Nieve	canción ruso
8	Chafalonia		31	No llores mi amor	
9	Che cuñatai		32	No quiero verte llorar	
10	Consejo de oro		33	No volverá	
11	Cruel destino	canción	34	Oro, copa espada y basto	
12	De punta y hacha		35	¿Quién eres tú?	vals
13	Del pasado		36	Se fue la pobre viejita	
14	Dios te salve m'hijo		37	Se quema y se quema y se quemo	
15	¿Dónde estás?	shimmy	38	Sonata	vals
16	El penado 14		39	Trapo viejo	
17	El pibe chacarita		40	Triste destino	
18	En la celda	canción	41	Vagabundo	
19	Honor gaucho		42	Viva el amor	rumba
20	Jorobeta		43	Ya ves... y te fuiste	
21	La que nunca tuvo novio		44	Yo te recuerdo, madre	vals
22	La última carta		45	Zorrita maula	
23	Levanta la frente				

表 1

“Siempre llorando”の謎

日本ではマガルディと言えば「Siempre llorando、いつも泣いている」が何時も引き合いに出され、いくつかの著名な著書にも引用されている。その最も古い例と思われるものは、岩垂司氏のご教示によると、「高山正彦著『タンゴ　名曲とレコード』（東京創元社、1957年）」の179頁のビクターA-1110（*）の“El Farol de los Gauchos”を紹介した文章にあるのがそれらしい。そこには「…その美しく情緒に富む声は無比であります。『シエムプレ・ジョランド（いつでも泣いている）』とあだ名されたほどに激情的な歌手云々」とある。これからすると高山氏自身もこれ以前にどこかでこの言葉を目にしたと思われる。ところがこの一文を草するにあたって、アルゼンチンの資料をいくつか調べたが、どこにもこの言葉を見出すことはできなかった。不思議に思い、高場将美氏にお訊ねしたところ、以下のようなご返事を頂いた：

「Siempre llorandoはスペイン語として間違いである。siempre は副詞であるから llorando を補足説明しているので問題はない。しかし、その llorando は、動詞の形のひとつ gerundio（動名詞、現在分詞）である。英語ならば現在分詞はどれも形容詞に使える。たとえば crying は「泣いている（○○）」と、名詞○○の形容に使える。しかし、スペイン語では動名詞は形容には使えない。そういう使い方は、やめるようにと、最新のもっとも権威あるスペイン文法書でも勧告している」

また大澤寛氏からも以下のようなご意見を頂いた：

1．会話の中で“あいつはいつもぼやいてばかりだ”という表現で“Se queja mucho ¿no? Siempre lleva quejando”という発言を聞いたことは覚えている。

（*）この録音は戦前のVICTOR DANCE RECORD ALBUMの１枚にも収められており、そこでの番号はDC-47-Aとなっている。

2．しかしこの場合でもlleva が入っている。かなり南米的な表現かと思うが動名詞としてのquejando を目的語的に用いて“ぼやくことを持ち歩いている”というものである。
3．氏の語感としてはsiempre ～ ndo 形があったとしてもその前に内容を表す動詞の活用形が来て（Se queja mucho のように）その後であれば siempre quejando はあり得ると思う。
4．シモーネの“Cantando”では歌詞の中にCantando yo le diという主動詞が用いられているから、この場合は問題ない。

結局のところ、“Siempre llorando”が単独で使われることはないらしい。ところで、最近、島﨑長次郎氏のご厚意で前頁脚注に示したSP盤DC-47-Aが収められている昭和14年のアルバムに付属の解説パンフレット“ARGENTINE ALBUM VOL.3 VICTOR RECORD”を見ることができた。著者は明記されていないが中の写真などから高橋忠雄氏ではないかと推測される。その中の“El Farol de los Gauchos”の曲目解説に「マガルディは.....悲しい曲を歌う時には歌いながらボロボロ涙をこぼすのである」という一節がある。この言い方そのものはスペイン語法から見ても問題はない。この一節がいつの間にか日本語としてより短い「いつも泣いている」になり、更におそらくは英語との類推から“Siempre llorando”と等置され、それが活字化されてタンゴファンの間で定着したのではないか。今のところ言えるのはここまでである。

マガルディは本当に「いつも泣いている」のか

「いつも泣いている」という言葉は短調の、センチメンタルな「泣き節」が大好きな日本のタンゴ・ファンにはぴったりの言葉で、それがこの言葉が日本で広まった大きな理由だろう。実際はどうであろうか。あくまで筆者個人の感想であるが、マガルディの声は確かに独特で、時によってセンチメンタルに聴こえるが、歌自体は決して「泣き節」ではないと思う。むしろ反対に対象を客観的に捉えて聴く者にそれをありのままに伝えようとする姿勢すら感ずる。もっともこれには反対意見も多いだろう。但しこれはタンゴの場合で、フォルクローレについては何とも言えない。

謝辞　Siempre llorandoに関してスペイン語法の立場で詳細な説明を頂いた高場将美氏と大澤寛氏、及びその出典に関して貴重な情報を頂いた岩垂司氏と島﨑長次郎氏に改めて深謝の意を表します。

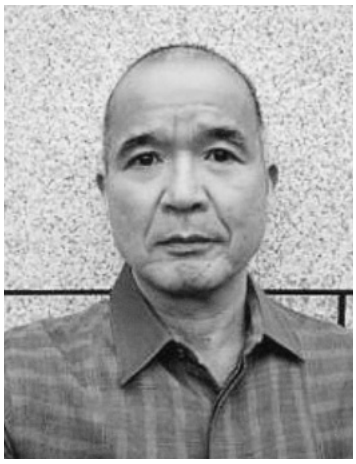
参考資料

［1］Roberto Cassinelli,“La Historia de Agustín Magaldi”, RCA CAMDEN CAS-6035 ライナーノート
［2］Roberto Gutiérrez Miglio,“EL TANGO Y SUS INTÉRPRETES”TOMO IV, pp.75-91 （CORREGIDOR, 1999）
［3］“LA VOZ SENTIMENTAL”1880-UN SIGLO DE HISTORIA-1980 TANGO, No.38 pp149-152
［4］Colección“LOS GRANDES DEL TANGO”No.15
［5］S. Nicolás Lefcovich,“ESTUDIO DE LA DISCOGRAFÍA DE AGUSTÍN MAGALDI”（1995）
［6］1880-UN SIGLO DE HISTORIA-1980 TANGO, No.40-45
［7］大岩祥浩、「アルゼンチン・タンゴ　アーティストとそのレコード」（（株）ミュージック・マガジン 1999）

こんなレコード／CDを聴いています　8

こんなタンゴを聴いています

七カ所 博幸（江東区）



レコードコンサートに参加するようになって３年ほどのころだ。チラシをもらって申し込んだ。蟹江さんの解説はユーモアを交えてていねいで、初心者にもわかりやすい。この講座でタンゴの歴史とその変遷をはじめて知る。現代タンゴの回のゲストは、斎藤充正さんだ。

秋期講座「アルゼンチンタンゴの世界」
講師：蟹江丈夫氏
2000年10月27日～ 12月22日
隔週水曜日全５回　定員20人
18時30分～ 20時30分
江東区森下文化センター

「ダビングを重ねていて画質は悪いのですが」という声とともにビデオの上映ははじまる。

拍手のなかに聞こえてくるのは、La yumbaのリズム。それまで聴いていたどのCDの演奏よりも胸に響いてくる。そして、映しだされるプグリエーセとピアソラ。プグリエーセ楽団とピアソラ六重奏団がいっしょに演奏している。ピアノソロにつづいて、Adiós Noninoの演奏だ。いちばん好きな２楽団の共演におどろいた。そして、うれしかった。

これが、1989年６月26日のアムステルダム・カレー劇場「ファイナリー・トゥゲザー公演」の映像を観た最初だ。

高田馬場駅のムトウでその公演を収録した２枚のCDをみつけたのは、だいぶあとだ。CDジャケットはシリーズの体裁だ。それぞれにLa yumba（とAdiós Nonino）は入っている。聴いていると、ライブ会場の観客といっしょに拍手をして口笛を吹いているような気分になる。

はるかに鮮明なビデオを昨年もレココンで観た。YouTubeでも観られる。ピアソラのとなりでサポートしているのはダニエル・ビネリだと今は観てわかるし、プグリエーセ楽団は11月に日本で引退公演をしたことも歴史として知っている。しかし、そんなことよりも映像を観ていて胸が熱くなるのは、蟹江さんのタンゴ講座をおもいだすからだ。タンゴの世界に足を踏み入れようとしていたころの初心をおもいだす。

映画『CAFÉ DE LOS MAESTROS』の公開は、2010年６月だ。撮影は2004年ごろからだという。たくさんのマエストロが登場する。なかでもアルベルト・ポデスターの印象がつよい。深い悲しみのなかでPercalを歌っている。オルケスタ・ティピカ・ロス・マエストロスが演奏している。

1943年のミゲル・カロー楽団盤のポデスターのPercalは、名曲名演として著名だ。1924年９月22日生まれのポデスターは、そのとき19歳。60年余の歳月を経て歌ったPercalは、それを上まわるセンテ

ィメントにあふれている。１人のキャラコを着た娘ではなく、幾世代にもわたるペルカール娘にポデスターは想いを馳せている。

ポデスターはいま、アリエル・アルディトなど若い歌手と演奏家を応援している。孫の世代だ。ポデスターの長寿とともにそのこともうれしい。

セステート・ミロンゲーロ楽団をはじめて聴いたのは、2013年の春だ。それ以来、聴いている。若者の躍動がつたわってくる演奏だ。とりわけハビエル・ディ・シリアコの歌唱に魅了される。あたたかさとやさしさを感じる。

楽団の曲目がすてきだ。手元のCD ３枚（うち１枚は２枚組）全53曲の内訳は、歌41曲、インストルメンタル12曲（うちソロ２曲）だ。タンゴ黄金時代のものが中心になっている。Tú,,, el cielo y tú…、Oigo tu vos、Junto a tu corazón、Pocas palabras、El adiós、Humillación などがならんでいる。はじめて知る曲目もおおい。YouTubeで検索すると、黄金時代の演奏にもたどり着く。両方を聴ける電子機器の恩恵に感謝感謝。

楽団は、海外での公演もおおいようだ。ヨーロッパだけではない。2013年３月の第５回イスタンブール・タンゴフェスティバルに、コロールタンゴとともに出演して共演している。10月には第１回シンガポール・タンゴフェスティバルに出演している。それらの映像を観ては、来日公演をたのしみにしている。

こんな感想を述べられたのも日本タンゴ・アカデミー、各レコードコンサートのみなさまのご教授ご支援のおかげです。お礼申しあげます。

（2015年11月30日）

全国リレー随想（17）

心温まるような 温まらないようなショートな話

佐々木秋雄（福島県いわき市）

情熱が感動を呼ぶ ということ

◆東京で伝統のあるタンゴ愛好のサークル“すいよう会”。そのサークル所属のセミ・プロ？タンゴ六重奏団《スエニョス楽団》のライブ演奏のＤＶＤを会長の黒木さんが贈って下さいました。東京・雑司ヶ谷にあるタンゴ・ライブの聴ける貴重な店、その名も“エル・チョクロ”での演奏動画であります。私は晩酌の日本酒を呑みながら、録画済の『鬼平犯科帳』を見るのが毎夜の至福の時であります(自己紹介デス)。でも、その夜は『鬼平』をやめて、『スエニョス楽団のＤＶＤ』を見たのでした。日本酒ではなく、タンゴに合わせてウイスキーのロックにしました。(「そんなことはどうでもいい！」「すみません」)『フェリシア』『ウナ・ノーチェ・エン・ラ・ミロンガ』と演奏が続きます。「ウムー、“キンテート・ピリンチョ”の域にはまだ達してないなぁ～。リーダーでバンドネオン奏者の黒木さんのテクニックも“ミノット”・ディ・チコ とはいささか距離があるな～」。いっぱしの音楽評論家的冷酷な視点であります。『ポエマ』『カジェシータ・ブランセン』そしてゲスト出演の日本のマイサニこと“ユリ・アスセナ”さんの『フマンド・エスペロ』と動画は進んで参ります。現在本場アルゼンチンでも演唱されることのない貴重なレパートリーを演じてくれるのもこの楽団の嬉しいところ。曲は『ケハス・デ・バンドネオン』。お客さんの反響がすごい！ 大喝采。

　その時、ふと、我に返ってみると、いつの間にか私の目も耳も……五感全てが映像に吸い寄せられているではありませんか！　薄っすらと涙腺が緩んでもいます。「この真剣な演奏ぶりは何なんだ！」。奏者一人一人のこのほとばしる情熱が画面を透して私に押し寄せるのでした。「そうだ、情熱が感動を呼ぶんだ」。オレの今までの音楽を聴く姿勢は、解りもしない音楽用語をひけらかし、奏者の経歴にこだわり、技術面のあら探しにうつつをぬかしていたのではあるまいか。「確かにオレの音楽の聴き方は間違っている。聴き手は『奏者の情熱』を感じられたときこそ癒されるんだ。それを名演というんだ」。つくづく思う。余談ですが、ギャラだって“スズメの……”。楽団員の平均年齢は70歳を優に超すとのことで、ここでまた驚愕と感動。私には絶対出来ない。

◆実話です。このオレの興奮の“スエニョス話”を行きつけのスナックでカウンター越しに“ママさん”に話しました。「カラオケだって同じだよね」。このスエニョス楽団の“情熱と感動”のオレの話を、二つ離れた席に座ってじっと聞いていた客がいました。たまに見かける“中年おやじ”だ。このおやじが突然立ち上がって「オレに一曲歌わせろ」ときたもんだ。彼の歌は以前にも聞いたことがあるのですが、しんばり棒を横に並べたような（オレの例えはいつも古いなぁ～）抑揚のない歌い方

で、しかも声ときたら老後の青江三奈さんが扁桃腺炎を患ったような状態だ。唄が始まった。凄い。堂々。正確。情感たっぷり。思わずママと顔を見合わせた。（ここで注：オレとママとの関係は……）私のような素人耳にもうまいのが分かる。他の客も合わせて大拍手。オレの話のお陰であることは“遠山の金さん”に聞かなくたって明明白白だ。《スエニョス楽団》を見りゃあなた様のカラオケだって今日から様変りさ。変わらなきゃもともと脳の土台の杭が短いのさ。「オレ、カラオケ教室でも始めようかな」。

歌は世につれ 世は歌につれ

◆いわき中南米音楽同好会。24～５名の小さなサークルです。会員の中には、地元のダンス界で名をなすプロの教師や、更なる高きを求めて研鑽に励む皆さんが６名も居られます。音楽もしっかり聴いて、ご自分のレベル・アップを図ろうとして居られるようです。（見せるステージダンスです）（ここで注：以下、【ダンス】とは欧米スタイルの“社交ダンス”の意味です。当いわき地方ではタンゴもアルゼンチン・スタイルで踊られる方は皆無に近い）

　この皆さんが、研修会や大きな発表会でタンゴを踊るのですが、外から見ていますと、選曲（曲選び）に時代の進化と共に大きな変化を起こしているのが興味深く見受けられます。未だに全く踊れない私が、このダンスされる皆さんと接触させていただいてまだ10年ですが、それでも、明らかに進化しております。

◆10年前、初めて発表会を見学したころは『フェリシア』（ダリエンソ演奏）、『エル・チョクロ』に『クンパルシータ』（ディ・サルリ）、『タンゲーラ』（モレス）、『台風』（ドナート）、他に、ハウゼやマランドなどの欧州系の曲と楽団が全てでした。続いて６～７年前になりますと、プグリエーセやピアソラの作品が登場します。『リベルタンゴ』（ピアソラ他）、『オブリビオン』（ピアソラ他）、珍しいところで『エスクワロ』（楽団不明）、その他、明らかにピアソラ系の曲の全盛でした。

　そこで昨今ですが、エレクトロ・タンゴの登場です。ゴタン・プロジェクトの『サンタマリア・デル・ブエノスアイレス』は元より、『ルナティコ』（精神異常者）、タンゲットの『ブスカンド・カマラ』（喧嘩を売るの意？）、バホフォンド・タンゴ・クラブの『ピデ・ピソ』などを所狭しと踊り回るのです、おば様・おじ様達が。

◆当会のレコ・コンでも時折このエレクトロ・タンゴは取り上げているので、その影響でのダンス曲選定となっているのは想像に難くないのですが、当会とは無関係の他のダンス教室の方々も最新のエレ・タンで登場してまいりますから驚きです。もう、社交ダンスの世界ではピアソラさえも古いのでしょうか？“いわきの会”も古典中心のプログラムに変革を起こさねば……。でも、でも、タンゴ・ダンスのお陰で“タンゴ”の火がこれからも燃え続けてくれるなら、曲は古典だって、モダンだって良いじゃないですか。ダンスだってアルゼンチン式だろうが欧米式だろうが、モンゴル風だろうが……。だけど、お願いだからオレの前でコンチネンタル・タンゴだけはやめてくれ～。

歌は世につれ　世にオレ付いてけず

◆４～５年前の実話です。音楽バーのカウンターでチビチビやりながらマスターと雑談していました。（『鬼平犯科帳』と『佐々木』の話は飲み屋の登場シーンが多いんだ）と、その時です、４人ほどの学生と思しき若者がドヤドヤとやって来て、「今このＣＤ、アマゾンで買ったんだ、掛けてよ」とマスターに頼み込んだのでした。流れ出した。なんと、そのＣＤは“ピアソラ”ではありませんか！

これで驚くのはまだ早い。更に、前から店にいた３人の若い女性群がＣＤの若者に声をかけました。「そのＣＤ見せてよ」。この女性がＣＤジャケットを見てから更に言いました。「私、小松亮太 好きなのよ」。こうなりゃオレが割って入って“ピアソラ論”をひとくさりせにゃならんと思いしが、時すでに遅しで、男女の若者たちは“入り乱れ”てメール・アドレスの交換で嬉々としている。オレの意見は「カナロやパチョの方がず～といいのになぁ～」。でも良いか、“いわきの会”の見かけの若い？皆さんだって“モダン派”なんですから、ついでに、顔も洋服も。

◆当会の会員20名をレンタカーのバスに乗せて、道のり90分の郡山市に行って来ました。小松亮太さんのコンフントの公演を見るためです。帰りのバスの中は良かった良かったの大合唱です。ちなみに、平均年齢は65歳。余談ですが、バスにカラオケの設備が付いてないのにご不満だったようで……。でも私は助かりました。ピアソラ聴いて、また ピアソラ風の音程でカラオケ聞かされてはたまりませんものね。ピアソラ中心の演目に加え、色々？？のパフォーマンスとおしゃべりが楽しかったようです。結構、結構。だが私だけがムッとしていました。鈍い私には情熱が伝わって来なかったからでしょうか。そう言えば、カナロ公演も、ピアソラ公演も、ユパンキ公演も、プグリエーセ公演も、スエニョス楽団公演も“お言葉”も“パフォーマンス”もありませんでした。（プグリエーセ楽団とスエニョス楽団を同列に扱うのはどちらかに失礼でしょうか？）そんな下らんもの？無くたって、あのときの感動は何十年経っても忘れませんよね、墓場までも。ついでに一言「うけを取りたかったら演奏で取れって～んだ」。あっ、そう言えば、女性のアルパ奏者にもそんなイヤなのいたっけ。

本当にカビが生えてしまった？“古き良き時代”

◆私の“タンゴ事始め”はカナロです。浪人時代に聞いたカナロ楽団演奏・アレーナス歌の『アディオス・パンパ・ミーア』でした。そして初めて買ったレコードがピリンチョ五重奏団の『ア・ラ・グラン・ムニェーカ』『マタサーノ』のドーナツ盤でした。（自己紹介のつもりデス）それからは、今日、喜寿になっても続く赤貧の身でありながらも、細々とカナロのレコードを買い続けたのでした。実は、この数少ない私のレコードを、皆さんに聴いて頂きたくて“いわき中南米”のサークルを始めた理由の一つでもあります。ですから、当初は毎月のレコ・コンのプログラムにカナロを筆頭に《古き良き時代》の演奏を組みました。でも、毎回反応は鈍いものです。ひどい人は「タンゴなしでラテンだけにしようよ」とか「タンゴが終わってラテンの部になった時間頃に出席するよ」とか言われたりもしました。ＳＰ盤を掛けて「コンサート中にサンマを焼くな！」なんて言った方も居りました。それでいて、ピアソラやエレクトロ・タンゴや和製タンゴなどをお聴き頂くと拍手が湧きます。どうも当会では“古き良き時代”は終わりを告げたようです。

◆“いわきの会”を一人の老人（私）のための遊び場や自慢話の場にしてはいけないと痛感しています。カビの生えた“古き良き時代のタンゴ”の自己中心的押し売りは、いわきではこのへんにして、次の未来の発展に注力しようっと考えています。
（我ながら、格調高いこと言うなぁ～。でも、“喜寿”過ぎのオレに未来なんてあるのかなぁ～？それよりもお墓買うことを急いで考えなきゃ）

『切れやすい？老人』

◆アルゼンチンへの出張土産に買った、石膏で作ったタンゴ楽団（５体編成）の飾り人形。その横に

同じく、メキシコ名物のマリアッチ楽団（５体編成）の人形も飾って置きました。東北大震災で、１メートル高さの棚から全てが落下してしまい、タンゴの人形が１体とマリアッチの人形が１体を除いて他は“こなごな”になってしまいました（写真をご覧下さい）。オープン・リールのプレイヤーも落ちて壊れました。でも、我が家の家屋の損壊はまぬがれました。市街地などの建物倒壊は実に惨憺たるものでしたし、いわきの海岸地域では部落全体が多くの人間共々津波にさらわれて、放棄しなければならない惨状です。現在の話です。復興が遅々として進まないのです。大臣が視察に来ても、汚れと悪事は隠して（これ本当）、いいとこだけ見せて、後は料亭で宴会？？？

◆昨日（11月末）、拙宅にドヤドタと作業服の男たちがやって来ました。我が家の庭の放射能汚染の徐染作業です。爆発した東京電力の原子力発電所からは約50キロも離れているのにです。でも、“いわきの会”には爆発した原発から約５～10キロの距離の方が２名おられます。彼らの土地も家も家財もすべて原発の放射能汚染で失いました。６回も逃げまどった上に仮の住まい。今は一家はバラバラになった上、公営のプレハブ住宅住まいです。“汚染の町”はアメリカの西部劇に見る“ゴースト・タウン”をはるかにしのぐ惨状です。野生化した豚や猪や牛やウサギや……、背丈ほどある雑草の町中を闊歩しています。「サハリ・パークより頭数は圧倒的に多い？」

問『戻れる可能性はあるのですか？』

答『大丈夫です。100年後には戻れるでしょう……』

そうだ、《東京・永田町に原子力発電所を建てる会》または、《東京電力本社内に汚染物質の永久保管庫を作る会》の事務局補佐にでもなろうか？　そうだ、東京・信濃町にある東医健保会館あたりも適地だな～（ちなみに、福島県は東北電力の供給）。

◆『君っ、この老人の怒りと“日本タンゴ・アカデミー”とはいかなる関係が有るんだ！』

『まったく関係有りません』

でも、かような悲しい状態の方でも、毎月熱心にタンゴやラテンを聴きにお越しいただいています。礼を一言云いたかったんです、お二人への心からの感謝を込めて。

「随想て言うけど、こんなこと書いてはダメなんだよなぁ～。近頃の老人ときたら、所かまわず切れるから、困ったもんだ」

カアチャンは分かってない？

◆オレ「おーい、今夜は寒いから“ぎゅー”（牛）のシャブ・シャブにするか～」

カアチャン「だめよ、今月も家計が厳しいんだから！　今夜も湯豆腐よ。第一、あんたは、今月もＣＤは買うわ、“日本…なにがし”に14,000円も払うわ、散々よ。しかも、忘年会だ、懇親会だ、“酔妖怪”だ、なんだかんだ、もう、いい加減にしてよ！ ＣＤだって、同じようなの、家に山ほど有るでしょ。“タンゴ…なにがし”なんて止めちゃいなさいよ！！　お金ばっかり掛かって。そんなお金あったら私に“えり巻”の一枚も買ってよ。“タンゴ…なにがし”より“えり巻”の方がよっぽど温まるわ、身も心も……」（続く）

カアチャンのお小言はまだまだ続く。いつだって３倍返しなんだ。それにしても、なぜそんなに“えり巻”を欲しがるんだ、お前は“トカゲ”か。

◆そもそも《日本タンゴ…》の良さが分かってないんだよ、カアチャンは。この年寄りだけの最後の遊び場を。僅かの年会費払って、汽車賃掛けて、ホテル代掛けて、会費払って、参加させて頂いて、残りわずかの時間を使って、それだって値打ちがあるてぇもんだ。オレの随想文の様に、本当に有意義で、格調高くて、読みごたえのある記事満載の会報だって年に２回も届くんだ。『カアチャンはいつだって分かってないんだ！』

『いや待てよ、それより分かってないのはオレの方か？？？？？』

※次は東京都港区の大河内祐さん（バンドネオン奏者）です。

・・・「2016年度ＮＴＡ全国会員の集い」
が開かれます・・・

日　時：３月６日（日）　午前10時受付開始
午前10時30分スタート

会　場：「メルパルク東京」
〒105-8582　東京都港区芝公園２－５－20
TEL：03－3433－7212

第１部：第94回 タンゴ・セミナー（クラセ・デ・タンゴ）
テーマ：来日タンゴ楽団の記録
――16ミリフィルムに残された稀少映像――
コメンテーター：西村秀人

第２部：懇親パーティー
（会長挨拶、事業報告、決算・予算報告、懇談）
アトラクション出演楽団：アストロリコ
歌：Sayaca

「ラ・クンパルシータ全集」（仮称）の制作が進行中

不朽の名曲「ラ・クンパルシータ」の作曲された年代については諸説がある。しかし現在では1916年説（Roberto Firpo や Juan Maglio Pacho など）が一般的と言えよう。そうすると今年2016年は記念すべき生誕（！）100周年に当たる。これを記念して日本タンゴ・アカデミーが手掛ける初の事業として「ラ・クンパルシータ全集」（CD２枚組　50曲収録）を企画・制作中である。

音源は島﨑長次郎名誉会長の半生をかけたコレクションの中から、選りすぐりのオリジナルSP盤が使用される。特徴としては、アルゼンチンを中心として欧米更には本邦に於ける記念すべき録音を取り上げ、これまでになかった大全集とすべく鋭意作業が取り進められている。発売は今年の夏頃と予定されている。ご期待頂きたい。

■CD-1（アルゼンチン編）の内容の極く一部を紹介して置く。

●1916～1929　楽団としてはR. フィルポを筆頭にアロンソ＝ミノット、F. カナロ、C. プグリッシ、二重奏ではマフィア＝ラウレンス、イリアルテ＝ペソア、歌ではC. ガルデル、R. ディアスなどの８人のアーティストたち

●1931～1946　楽団はJ. デ・カロをトップにロス・プロビンシアーノス、E. ドナート、F. ロムート、R. ビアジ、O. フレセド、A. デ・アンジェリス、A. ダゴスティーノ（バルガス）、フランチーニ＝ポンティエル、四重奏でR. フィルポ、等の10アーティスト

●1950～1965　楽団はE. ロドリゲス、R. カロー、H. バレラ、そしてコンフントでトロイロ＝グレラ（4to.）、N. ダレッサンドロ（6to.）、歌ではE. リベロ、J. ソーサなどの７アーティスト

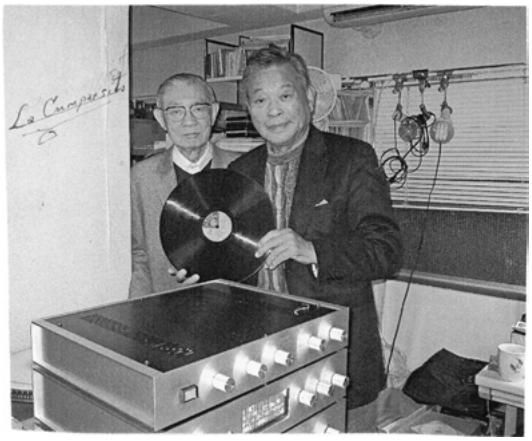
そしてCD-2ではアルゼンチン編に続いて欧米・日本編が登場する。

■CD-2（アルゼンチン編〈続き〉）（欧米～日本編）

●アルゼンチン〈続き〉　A. ピアソラ、A. トロイロ、J. ダリエンソ、C. ディ・サルリ、O. プクリエーセ（1965年初来日ライブ）の４アーティスト。

●欧米編　J. ウァルテ、E. ボール、M. ウエーバー、ビアンコ＝バチーチャ、H. ペトロッシ、O. ローマ、T. スキーパなど、11アーティスト。

●日本編　巴里ムーラン・ルージュ、テイト・ニュー・タンゴ・アンサンブル、桜井潔、原孝太郎六重奏団、藤沢嵐子＝オルケスタ・ティピカ東京、淡谷のり子、黒木曜子、早川真平と日本オールスターズなど９アーティスト。



レコード録音中のオーディオ・パーク社長寺田氏と島﨑さん

カルロス・ガルデル（6）
Carlos Gardel (6)

大澤　寛（訳）

“CARLOS GARDEL”, Tango de colección 20（Clarín（2005））

翻訳資料添付ＣＤの歌詞邦訳（2/2）

「Cuando tú no estás」
（あなたが居ないとき）

Letra : Alfredo Le Pera + Mario Batistella
Música : Carlos Gardel + Marcel Lattes

運命のなすがままに　独りでいて
あなたの眼差しに守られていないと
私は　旅の途中で歌を忘れた渡り鳥

あなたが居ないと　花は香らず
あなたが去ってしまうと　私は霧に包まれる
渡り鳥も　泉も　星も
私には　つまらないものになる

あなたが居ないと　私の希望はしぼみ
あなたが去ってしまうと　私の夢は消える
私の嘆きを聞いてほしい　風に乗せて語るから
あなたが居ないと　嘆きは深くなる

あなたが居れば
夜明けは輝き　朝は明るく　薔薇園は美しく
星はきらめき　泉は歌う
人生が笑いかけて来る

邦訳：大澤　寛

「Criollita, decí que sí」
（“はい”と言ってよ　お嬢さん）

Letra : Alfredo Le Pera
Música : Carlos Gardel

“はい”と言ってよ　お嬢さん
“はい”と言ってよ　お嬢さん
もう星が照らしてくれません
私の愛するあなたの瞳が
私に輝いてくれないから
空の欠片をひとつだけ
それが私の気まぐれな幸せ
そして
あなたの瞳にわたしを結わえた
あの髪の毛のひと房を
宝物みたいに大切に
隠して持っているのです

何も言わないで　お嬢さん
何も言わないで　お嬢さん
風に向かって私が嘆いても
それは私の胸に　悩みが
彫り込まれているのだから
私にくれたね　小さな花を
そして私はあなたから
唇を奪ったのだった
あなたは決して知ることはない　お嬢さん
どれほど私を傷つけたかを
私が奪い　あなたが失くした
あの昼下がりの唇付けで

“駄目”と言ってよ　お嬢さん
“駄目”と言ってよ　お嬢さん
私は苦しくて死にそうだ
何故なら　あなたの唇付けが
私の思いに火を付けたから

これから　私は持つことになる
私の胸で絡み合う　二つの悩みを
私の心はぼろぼろになり
嘆き続けて行くだろう
冷たくされると死にたくなるし
愛されたら燃え尽きてしまうのだから

邦訳：大澤　寛

「Cuesta abajo」
（下り坂）

Letra : Alfredo Le Pera
Música : Carlos Gardel

若かったことの恥と　もう若くはない悲しみを
この世で引きずって来た俺だけれど
帽子の鍔で隠しきれない涙があふれるのを
こらえ切れなかったことが幾度もある

運命に打ちひしがれる非人のように
道を彷徨(さまよ)った俺だけれど
怠け者だった　目が眩んでいた俺だけれど
今　世間に判って欲しいことが一つだけある
愛するという勇気の価値(ねうち)だ

俺には　愛することが人生そのものだった
春の太陽のように　俺の希望であり情熱だった
俺にはいつも判っていた
俺の哀れな心が抱いた密かな喜びは
全くこの世に受け容れられないことが

今はもう　人生の下り坂だが
俺は捨て去ることが出来ないでいる
昔の夢の数々を
俺は夢に見る　懐かしい昔を
泣きながら想う　二度と還らぬあの頃を
女の後を追いながら
苦しみの酒を浴びるほど呑んだ
だけど　誰も判ってはくれなかった
俺が何もかも放り出しても
心のかけらをいつも　グラスに残して来たことを

今はもう　ひとり淋しく打ちひしがれて
人生の下り坂だが　言いたいことがある
俺に語りかける女の愛が偽りでも
女のあの輝(ひか)る目のためになら　何時でも
もっと愛を与えただろうと

邦訳：大澤　寛

「Mi Buenso Aires querido」
（我が懐かしのブエノス・アイレス）

Letra : Alfredo Le Pera
Música : Carlos Gardel

俺の愛しい町　ブエノス・アイレス
再(ま)たお前に会えたなら
嘆きも　すっかり消えるだろう*
俺が生まれた町の　街角の小さな街灯は
俺の愛の誓いの見張り役だった
静かな　小さな明かりの下であの娘(こ)に会った
太陽に輝くような　俺のあの娘を
俺が　只一つだけ愛する　あの港町
今日　運が良くて　お前に再た会える
バンドネオンの嘆きを聴く
そして心は　解き放たれる

華やかな　俺のブエノス・アイレス
俺が命を終える場所
お前に守られていると　幻滅することもなく
歳月は飛び去って行き　悩みを忘れる
想い出が　感動の甘い名残のように
行列を作って過ぎて行く　判ってくれ
お前を思い出すとき　心の悩みが晴れるのを

場末の町の街角の小さな窓で
花のような少女が微笑む
俺も　もう一度　あの瞳を見つめたい
夢見るようなあの瞳を
場末の狭い露地裏で　唄が聞こえる
勇気を持て　元気を出せと
希望と　そして溜息の唄
あの歌は　俺の嘆きの涙を拭ってくれる

邦訳：大澤　寛

「Soledad」
（孤独）

Letra : Alfredo Le Pera
Música : Carlos Gardel

私は誰にも言って欲しくない
お前がお前の優しい命を
私からもう奪い去ったことを
私は嘘が欲しい
お前のあり得ない電話を待つために
私は誰にも考えて欲しくない
私の永遠の孤独がどれほど苦く深いものかを
時は過ぎ去る
時計の長針はゆっくりtic tac しながら
悪夢をすりつぶしていく

私の部屋の嘆きの暗闇の中で
多分戻って来ないあの足音を待つとき
時々その歩みは止まる　しかし入っては来ない
そんな気がする
だけど誰もいないし　あの娘も来ない
みんな私の夢が作った幽霊なのだ
あの娘の姿は　消え去る時に
私の心に灰を残して行く

銀色の文字盤の中では
時は苦しんで　進みたがらない
嘲笑うような眼差しで私を見つめる
奇妙な姿の人たちの行列
それは終わりのないキャラバンだ
不気味な顰め面をして　忘却に沈んでゆく
私のものだったあの唇が
その行列と一緒に去って行く
私に残るのは　私の不幸の苦しみだけだ

邦訳：大澤　寛

「Rubias de New York」
（ニューヨークの金髪娘たち）

Letra : Alfredo Le Pera
Música : Carlos Gardel

ペギーに　ベティに　ジュリーに　メアリー
ニューヨークの　金髪の娘たち
愛の嘘つく　飾った髪で
空の星さえ　羨むほどの
あの娘たちが居なかったなら
私は生きて行けるだろうか
メアリーに　ペギーに　ベティに　ジュリー
花のような唇の

ジュリーの笑いは　水晶のよう
それは泉の唄のよう
私の眠りの邪魔をするのは
ペギーの甘い　あの魅力
瞳は深い海の青

匂い立つ　甘い生き物たちよ
口紅掃いた　小さな唇の
その唇付けが欲しいもの
忘れっぽくて嬉しくて　壊れやすい人形たちよ
鈴のように　喜び笑う

ひとを酔わせる茶色のカクテル
メアリーは　まさにそんなふう
お前の輝く長い髪を
私のものにしたいのだ
お前が私にくれた愛が
ほんの一日限りのものでも
燃え盛る炭火みたいだ
お前の愛は　なあ　ベティ

邦訳：大澤　寛

お詫びと訂正

Tangolandia誌 第31号（2015年秋号）で大きなミスをしました。多村知子さんの「ローラとボルヘス」21頁２行目と16行目の ¿pór que? のアクセント記号の位置は正しくは ¿por qué? です。

信じ難いミスを犯して、西語にお詳しい多村さんに恥ずかしい思いをして頂く結果となりました。深くお詫びいたします。

（編集部）

「Arrabal amargo」
（苦い想い出の下町よ）

Letra : Alfredo Le Pera
Música : Carlos Gardel

呪いの言葉が咎めるように
私の人生に入り込んだ
苦い想い出の下町よ
お前の影が
眠れぬ私を苦しめる
お前の夜が
私の心に閉じこもる
あの娘が傍に居た頃は
お前の悲しみも　泥沼も　みじめさも
私には見えなかった
あの娘は私の灯りだった
そして今　私は捨てられて
お前の街角に　十字架のように
打ちつけられた心を引きずっている

私の好きなお前の中庭では
星のテントに覆われて
なにもかもが輝いている
下町の小さな街角よ
あの娘がお前に会いに来れば
お前の古いスイカズラは
お前を愛して花盛り
去って行く雲のように
私の夢が行ってしまう
行ってしまって　もう帰らない

誰にも言うのではないよ
お前がもう私を愛していないことは
私が人から訊かれたら
お前が帰って来ると言おう
だからお前が帰って来ても
誰も驚いたりしないと誓うよ
皆が　どれほどやきもきしながら
お前を待っていたか判るだろう
私の白い家も　古い薔薇園も
どれほど悲しみから蘇るか
祭りの衣装を付けた
私の美しい下町よ

邦訳：大澤　寛

「Sus ojos se cerraron」
（閉ざされし瞳）

Letra : Alfredo Le Pera
Música : Carlos Gardel

あの娘の瞳は閉じられた
しかしこの世は何事も無く
私のものだった　あの唇は
もう私に口付けをしてくれない
良く通るあの笑い声の木霊は消えて
この沈黙の苦しみは私には耐え難い
私のものだった　あの手の優しい温もりは
悩む私を慰めてくれた
そして今　嘆きに沈む私には
涙も縺れて　流れようとしない
泣くことで慰められることも無い

人生は何故　残酷にあの娘の翼を焼いたのか
死神の　あの気味の悪い顰め面
私はあの娘を守りたかったが
死神の力に負けたのだ
私は嘆き　心の傷は深くなる
やがて見知らぬ人々が
私の傷みを慰めに来るだろう
みんな嘘だ　そんな慰めは
今あるのは　私の真心だけだ

私を裏切る苦しみは　あの娘の愛を羨んで
獲物を追う犬のように　私の後を追って来る
あの娘の優しい瞳の奥に隠れ潜んだ死神は
ひそかに時を刻んでいたのだ
私の熱い願いは空しく
死神は　私にその鉤爪を打ちこんだ
街では　訳の分らぬ叫び声を挙げて
カーニバルの群衆が
はしゃぎ笑い続けていた間に
運命は　嘲り笑いながら
私からあの娘の愛を奪ったのだ

邦訳：大澤　寛

「Lejana tierra mía」
（遠き故郷）

Letra : Alfredo Le Pera
Música : Carlos Gardel

私の遠い故郷よ
お前の空の下で
お前の空の下で
いつか死にたいもの
お前に慰められて
お前に慰められて
いつも懐かしむお前の鐘の
金色の音を聴きながら
お前の許に帰りついて
お前を見つめて
笑ったり泣いたり出来るだろうか

私の村の静けさを破るのは
ロミオの熱いセレナーデだけ
穏やかな銀色の月の下
花咲くバルコニーでは
愛の苦しみの噂と共に
そよ風が運んできた
誓いの言葉の囁きが聞こえた

そのバルコニーは今もある
花も　太陽も
しかしあなたは居ない
居ないのは　あなただけ！　私の恋人よ
私の愛の遠い故郷
眠れぬ夜に　どんなにお前を呼ぶことか
私の小さな星よ　つぶらな瞳で言ってくれ
私の願いは叶うと
そして間も無く　愛する故郷に帰れると

邦訳：大澤　寛

「El día que me quieras」
（想いの届く日）

Letra : Alfredo Le Pera
Música : Carlos Gardel

“想いの届く日”という日本語タイトルはうっとりするような先人の名訳

あなたの吐息の優しさが
私の夢を撫でている
人生がどんなに
微笑(わら)いかけてくれるだろうか
あなたの黒い瞳(め)が
私を見詰めてくれるなら
歌うような　あなたの軽やかな笑い声が
私を包んでくれるなら
私の心の傷は癒されて
何もかも忘れてしまう

何時(いつ)かあなたが　私を愛してくれる日には
色鮮やかな薔薇は　その色を際立たせ
祭りの衣装(よそおい)に　身を包むことだろう
風に鳴る鐘は　あなたは私のものだと
告げるだろう
泉の水は　狂ったように
あなたの愛を　私に語りかけるだろう

何時かあなたが　私を愛してくれる夜には
星たちは　私たちが歩くのを
蒼い空から　羨ましそうに眺めるだろう
そして　不思議な光りが差して
あなたの髪に宿るだろう
不思議そうにしているホタルにも　判るだろう
あなたが私に安らぎをくれるのが

何時(いつ)かあなたが　私を愛してくれる日には
あるのは　心地よい調べだけ
夜明けは明るく　泉は楽しげに
そよ風は静かに
快い音のそよぎを運んで来るだろう
泉の水は私たちに　水晶の歌をくれるだろう
何時(いつ)かあなたが　私を愛してくれる日には
歌う小鳥は　声を甘く和らげるだろう
人生は華やいで　悩みは消えるだろう

何時かあなたが　私を愛してくれる夜には
星たちは　私たちが歩くのを
蒼い空から　羨ましそうに眺めるだろう
そして　不思議な光りが差して
あなたの髪に宿るだろう
不思議そうにしているホタルにも　判るだろう
あなたが私に安らぎをくれるのが

邦訳：大澤　寛

2015年下期首都圏タンゴ・コンサート情報

作成：脇田　冨水彦

*出演者氏名*がイタリック（斜体）、アンダーラインで示された方はNTA会員です。
“雑司ヶ谷 EL CHOCLO” のマスターはNTA会員の*伊藤修作*さんです。

● VIENTO　SUR
Sayaca（vo）、田中伸司（cb）、青木菜穂子（pf）
７月３日、10月１日　雑司ヶ谷 EL CHOCLO

● ～アルゼンチン共和国独立記念日～アルゼンチン・タンゴ・コンサート
西塔祐三とオルケスタ・ティピカ・パンパ（bn ５人含む12人編成）
エストレージャス・デ・パンパ（６人編成）、チコス・デ・パンパ（４人編成）
vo）菅原洋一、山口蘭子、あみ、KaZZma、ダンス）高志＆めぐみ
７月９日　横浜みなとみらいホール大ホール

● TANGO Buenos Aires vol. ２　タンゴ　ブエノスアイレス
Mentao　*池田達則*（bn）、専光秀紀（vn）、大熊慧（cb）、松永裕平（pf）、
（bl）CristianLopez/Nao、Leandro Oliver/Laila Rezk、Juan Malizia/Manuela Rossi
Gaspar Godoy/Carla Mazzolini、Edison chaves/tatiana、Takashi/Megumi、中澤源太、四十八願恵太/Mana、川島真紀
７月12日　港区赤坂　草月ホール

● LOS REFLEJOS DEL ALMA VOL.11
Viento Sur　*Sayaca*（vo）、青木菜穂子（pf）、北村聡（bn）、田中伸司（cb）、鬼怒無月（gt）
７月23日　神楽坂 THE GLEE

● 泣いて笑って、それがタンゴ
ユリ・アスセナ（vo）、吉田篤（vn）、丸野綾子（pf）
７月25日　雑司ヶ谷 EL CHOCLO

● 月と星のシンフォニー
喜多直毅クアルテット　喜多直毅（vn）、北村聡（bn）、三枝伸太郎（pf）、田辺和弘（cb）
７月30日、７月31日　公園通りクラシックス

● 第５回　ミロンガパーティー　日本タンゴ・アカデミー（NTA）がおくる
チコス・デ・パンパ　北村聡（bn）、永野亜希（vn）、宮沢由美（pf）、佐藤洋嗣（cb）
ダンス・デモ　JOE & TAKAMI
８月２日　いきいきプラザ一番町カスケードホール

● 東京バンドネオン倶楽部 with 小松亮太 Unit
Sayaca（vo）、KaZZma（vo）
８月16日　かつしかシンフォニーヒルズ小ホール
９月５日　大田区民プラザ大ホール

● 古橋ユキ　タンゴ・カルテート　タンゴバイオリンの魅力
古橋ユキ（vn）、鈴木崇朗（bn）、竹本真理（pf）、斉藤直樹（cb）
８月28日　　art café Friends

● **吉田水子企画公演　What`sタンゴ？　～ Vol.1 タンゴが生まれた時代編～**
吉田水子（cb）、渡邊公章（bn）、東大輔（fl）、竹内永和（gt）、瀬尾鮎子（vl）
９月５日　和光大学ポプリホール鶴川　多目的室

● **平田耕治プレミアムタンゴコンサート**
平田耕治（bn）、金益研二（pf）、那須亜紀子（vn）、藁科基輝（cb）
９月６日　横浜みなとみらいホール小ホール

● **第２回港横濱タンゴ・フェスティバル～港横濱☆タンゴの星～**
オルケスタYOKOHAMA、キサス・タンゴ、ケーナとギターの夢、専光秀紀とコンフント、メンターオ、アウロラ・クアルテート
９月６日　神奈川県立音楽堂

● **Tango Quartet『Virtus』『ブエノスアイレスの四季』CD発売記念ライブ**
仁詩（bn）、水村浩司（vn）、須藤信一郎（pf）、高杉健人（cb）
９月13日　art café Friends

● **Tango Argentino**
池田みさ子とロス･アミーゴス　*池田みさ子*（pf）、*池田達則*（bn）、専光秀紀（vn）、齋藤順（cb）、金子なつみ（vo）
９月13日　雑司ヶ谷 EL CHOCLO

● **アルゼンチン・タンゴコンサート　～世界のタンゴ～**
チコス･デ･パンパ　北村聡（bn）、永野亜希（vn）、宮沢由美（pf）、佐藤洋嗣（cb）、鈴木崇朗（bn）、吉田篤貴（vn）、山口蘭子（vo）、兵頭カンナ（vo）
９月16日　練馬文化センター小ホール

● **秋のタンゴ　コンサート**
ジャノタンゴ　北村聡（bn）、熊田洋（pf）、近藤久美子（vn）、東谷健司（cb）、ダンス AKITO & aia
９月28日　JR国分寺駅前　いずみホール

● **タンゴ2015秋のコンサート　西塔祐三とオルケスタ・ティピカ・パンパ**
エストレージャス･デ･パンパ　中西伸一（bn）、鈴木崇朗（bn）、瀬尾鮎子（vn）、吉田篤貴（vn）、松永有平（pf）、小栗亮太（cb）、兵頭カンナ（vo）
チコス・デ・パンパ　北村聡（bn）、水野亜季（vn）、宮沢由美（pf）、佐藤洋嗣（cb）、金子なつみ（vo）
オルケスタ・ティピカ・パンパ　西塔祐三（bn）、中西伸一（bn）、北村聡（bn）、早川純（bn）、鈴木崇朗（bn）、川波幸恵（bn）、永野亜季（vn）、江藤有希（vn）、瀬尾鮎子（vn）、吉田篤貴（vn）、柴田奈緒（vn）、宮沢由美（pf）、田辺和弘（cb）、あみ（vo）、KaZZma（vo）
10月９日　すみだトリフォニー小ホール

● **スエニョス楽団**
黒木皆夫（bn）、鳥飼覚（bn）、村井正宏（vn）、澤崎祥子（vn）、薬師丸淳治（pf）、山口勝規（cb）、*ユリ・アスセナ*（vo）
10月９日　雑司ヶ谷 EL CHOCLO

● **TOUCH OF CLASSIC　SATIE**
中島ノブユキ（pf）、北村聡（bn）
10月１日　東京オペラシティ　リサイタルホール

● **The Ginza Romantica**
佐藤美由紀（pf）、川波幸恵（bn）、清水良憲（cb）
10月12日　ザ・ギンザ・アカデミー

● **古橋ユキ Real Tango 秋のサロンコンサート**
古橋ユキ（vn）、鈴木崇朗（bn）、竹本真理（pf）
10月12日　二子玉川　オーキッド ミュージック サロン

● **Vintage Tango Live**
Cuarteto Astrorico　*門奈紀生*（bn）、*麻場利華*（vn）、平花舞依（pf）、滝本恵利（cb）
10月15日　JR東神奈川駅前　かなっくホール
10月17日　雑司ヶ谷 EL CHOCLO
10月18日　＋KaZZma（vo）　真鶴　檜チャリティーコンサートホール

● **小松真知子＆タンゴクリスタル**
小松真知子（pf）、吉田篤（vn）、北村聡（bn）、田辺和弘（cb）、KaZZma（vo）
10月15日　雑司ヶ谷 EL CHOCLO

● **HAYAKAWA　TERUGGI　TRÍO**
ハヤカワ・テルージ・トリオ　早川純（bn）、レオナルド・テルージ（cb）、久保田美希（pf）
10月17日　船橋　きららホール
10月20日　横浜　大倉山記念館ホール
10月21日　武蔵野スイングホール

● **Viento　Sur**
田中伸司（cb）、北村聡（bn）、松永裕平（pf）、志賀聡美（tb）、*Sayaca*（vo）
10月23日　杉並学院sgホール

● **Tango Singer KaZZma リサイタル**
熊田洋（pf）、近藤久美子（vn）、田中伸司（cb）
10月29日　江古田「BUDDY」バディ

● **Los Reflejos Del Alma　vol.12**
Sayaca（vo）、青木菜穂子（pf）、鈴木崇朗（bn）、田中伸司（cb）
10月30日　CYGNUS GINZA

● **“kitamura satoshi” の２日間**
北村聡（bn）、鈴木大介（gt）　10月30日
北村聡（bn）、藤木一馬（gt）　10月31日　柏Studio WUU

● **QUIZAS　TANGO　CUARTETO**
池田達則（bn）、瀬尾鮎子（vn）、深町優衣（pf）、大熊慧（cb）
11月７日　中目黒「楽屋」

● **JAPAN　TOUR　Gustavo　Eiriz**
グスタボ・エイリス（gt）、北村聡（bn）、*Sayaca*（vo）、田中伸司（cb）
11月８日　雑司ヶ谷 EL CHOCLO

● **LAST TANGO　ブエノスアイレス帰国記念ツアー**
柴田奈穂（vn）、田ノ岡三郎（ac）、江森孝之（gt）、西村直樹（cb）、マヤン（vo）
11月18日　渋谷　JZ Brat

● **アルゼンチン・タンゴ・コンサート　～世界のタンゴ～**
チコス･デ･パンパ　北村聡（bn）、鈴木崇朗（bn）、永野亜希（vn）、吉田篤貴（vn）、宮沢由美（pf）、佐藤洋嗣（cb）、菅原洋一（vo）、山口蘭子（vo）、兵頭カンナ（vo）
11月20日　よみうり大手町ホール

● **CAMBA TANGO**
平田耕治（bn）、アリエル・ロペス・サルディーバル（gt）、ルーカス・ステリン・ペンセル（gt/cb）、エヴァ・フィオーリ（vo）
11月20日　鶴見区民文化センター　サルビアホール
11月21日　雑司ヶ谷 EL CHOCLO
11月24日　北沢タウンホール

● **アルゼンチンタンゴ早慶戦**
オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ、慶應義塾KBRタンゴアンサンブル　ロス・ポジートス（早大OB）、友情出演：オルケスタ・ティピカ・ルナ（中央大OB）
ゲスト出演：*池田みさ子*とオルケスタ・オルテンシア、ダンス：MARTIN & YUKA
11月22日　イイノホール

● **LOS REFLEJOS DEL ALMA VOL.13**
Viento Sur　*Sayaca*（vo）、青木菜穂子（pf）、北村聡（bn）、田中伸司（cb）、鬼怒無月（gt）
11月26日　神楽坂　THE GLEE

● **ブエノス・アイレスの冬　アルゼンチンタンゴショー**
キサスタンゴ　*池田達則*（bn）、瀬尾鮎子（vn）、深町優衣（pf）、大熊慧（cb）
KaZZma（vo）、ダンス　窪田央 & *間々田佳子*
11月28日　内幸町ホール

● **タンゴ　de　乾杯！**
京谷弘司（bn）、淡路七穂子（pf）、喜多直毅（vn）
11月29日　調布シャンティン

● **池田みさ子とロス・アミーゴス**
池田みさ子（pf）、*池田達則*（bn）、吉田篤（vn）、専光秀紀（vn）、齋藤順（cb）、西澤守（vo）、ダンス　エンリケ & カロリーナ
12月５日　狛江エコルマホール

● **PASIONAL vol.14　ユリ・アスセナ**
ユリ・アスセナ（vo）、鈴木崇朗（bn）、吉田篤（vn）、三枝伸太郎（pf）、田辺和弘（cb）
12月11日　池之端ライブスペース　Qui

● **タンゴの家ライブ**
齋藤一臣（vn）、専光秀紀（vn）、石川麻衣子（vn）、*池田達則*（bn）、古野奈己（bn/fl）、小川真人（bn）、飯泉昌宏（gt）、齊藤直樹（cb）、齋藤晶（pf）、KaZZma（vo）
12月20日　三田塾ホール　タンゴの家

● **Mentao Sexteto　YEAR　END　SPECIAL　LIVE**
池田達則（bn）、専光秀紀（vn）、宮越建政（vn）、舘野ヤンネ（vn）、松永裕平（pf）、大熊慧（cb）
12月23日　雑司ヶ谷 EL CHOCLO

● **オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ　第54回リサイタル**
12月26日　なかのZERO 小ホール

● **Viento Sur YEAR　END　SPECIAL　LIVE**
Sayaca（vo）、青木菜穂子（pf）、田中伸司（cb）、赤木りえ（fl）
12月27日　雑司ヶ谷 EL CHOCLO

● **三枝伸太郎　オルケスタ・デ・ラ・エスペランサ**
三枝伸太郎（pf）、北村聡（bn）、吉田篤（vn）、沖増菜摘（vn）、吉田篤貴（vn）、島津由美（cl）
12月28日　大塚グレコ

原稿募集

タンゴに関する随想・研究・資料・書評・コンサート評など、会員からの寄稿をお待ちしております。ご執筆の内容によって「タンゲアンド･エン･ハポン」または「タンゴランディア」のどちらかに掲載いたします。「タンゲアンド･エン･ハポン」の次号の締め切りは５月末日、「タンゴランディア」は３月15日となります。なお、原稿（図・画像を含む）は可能な限り電子化して電子メールの添付ファイルまたは外部メモリーの形で送ってください。やむを得ず手書き原稿になる場合は、編集部で電子化する作業が必要ですので、早めに送っていただくことをお願いします。また、原稿の内容によっては掲載できないことがあることをご承知置き下さい。

本誌に掲載の見解その他は、あくまでも執筆者個人のものであり、必ずしも日本タンゴ･アカデミーを代表するものではありません。なお人名のカナ表記については執筆者の表記のままを原則としますが、例えば Juan を「ファン」と表記されたものについては、表記の流儀の問題ではないと考え、編集部の方で「フアン」と改訂いたします。

編集後記

タンゲアンド・エン・ハポン第37号をお届けします。経済的な事情で今号も頁数を100頁ほどに抑えております。そうした中での紙面の質を維持することに取り組んでまいります。ご支援をお願いいたします。具体的には、執筆者が固定化する傾向を改善しなければなりません。全国の皆様からの投稿をお待ちしています。

なお、これまで長年に亘り機関誌編集に尽力され、現在の機関誌のスタイルを確立された齋藤冨士郎氏が退任されました。皆様と共に編集部一同深い謝意を捧げるものです。

（大澤　寛）

日本タンゴ･アカデミー機関誌　TANGUEANDO EN JAPÓN

第３７号　２０１６年１月発行（非売品）

発　行：日本タンゴ･アカデミー
〒156-0044　東京都世田谷区赤堤2-32-14-104
飯塚　久夫方
TEL/FAX 03-3324-1989　iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編集部：大澤　寛（編集長）
〒165-0051　東京都新宿区西早稲田2-1-23-609
TEL 03-3208-2247　hdomingo@bc4.so-net.ne.jp

副編集長：池永 博威、笠井 正史、鈴木 啓子

編集委員：島﨑 長次郎、宮本 政樹、弓田 綾子

印　刷：（株）藤印刷　〒102-0072　東京都千代田区飯田橋2-13-1
TEL 03-3262-8641　FAX 03-3262-8643　E-mail: fujip@fuji-p.co.jp

กใค